

知被遊、夫々御評議相成候處、何分東西共切迫之形勢候得共、御謝罪筋ハ督府へ不相達候テハ、御貫徹難相成候へハ、此表之事情早々御飛札可被指出ト御決議也、其翌廿九日、參政衆へ御報、竝ニ淀侯御旅中へ被遣御直書、如左、

二月廿二日附之御狀、廿八日申ノ刻相達、退朝原註、第直ニ令披見候、春暖之砌 德川公益御安泰被爲在候哉、日々心中案勞堪兼、被申越候趣ニテ安堵シ奉遙賀候、各方御無異御勤仕令珍重候、抑淀侍從老中被冤候趣被申越令承知候、其他、當今御謹慎中直ニ入京如何可有哉ト、段々之被申越一々承リ申候、右ハ過鴻、田安中納言竝大久保一翁迄申越候次第柄ニ付、從慶永發急飛、淀侍從旅中迄別紙之通申越候間、左様御承知可給候、只今入京等之儀、當局原註、內國事務、同僚竝辦事官所へ取調候テハ不都合故不申聞候、依之、貴答如此候也、恐々謹言。

二月廿九日 第九字

越前宰相

淺野美作守左

川勝備後守左

大久保一翁左

服部前守左

猶々御端書之趣令承知候也。

○以急飛令啓上候、春暖之砌先以愈御清全珍重存候、抑今般貴所被老中被免候上、德川公御謝罪之爲御上京之由、淺野美作守初ヨリ申越候、右ハ貴所被御京著御謝罪狀被指出候テモ 大總督宮原註、有栖已ニ御發向濟之事故、於御所御受取ハ無之儀ト被考申候、其子細ハ、先日從德川公之御謝罪狀即慶永參 內、中山前大納言迄差出候處、其後別紙二十一日ノ之通之御達ニテ、何分從江戸表、御人ヲ以御謝罪狀 大總督宮御陣營迄被差出候様ニトノ儀ニ御座候、此段ハ從慶永、田安中納言へ以直書申遣候間、定テ從江戸、貴所被モ御申達相成居候事ト存候、タトヒ江戸ヨリ不被申越候トモ、貴所被御

謝罪狀御持參ニテ、一刻モ早ク 大總督宮御陣營へ御參上ニテ、御差出被成候様致度候、且又貴所被御上京之儀ハ 大總督宮へ御伺被成候様仕度候、爲御心得、去廿一日、從朝廷御渡相成候書付入御披見候、仍早々以急飛申入候也、恐々謹言。

二月廿九日

淀侍從左

慶

永

副啓申入候、扱ハ貴所被京都近ク御旅行被成候テモ 大總督宮御陣營之處迄御引戻シ被成候テ、御謝罪狀御差出可被成候、此段爲念申進候也。

二月廿九日

慶

永

淀侍從左

○春嶽私記ニ又云、廿九日、以飛脚淀侯御旅中へ、右御直書被遣、御道中ニテ御出逢申次第指出候様脚力へ被仰付候處、三月七日、小田原紹太寺御旅宿中へ相達、夫ヨリ江戸表へ罷出、參政中へノ御書相達、同十八日、淀侯返書持參歸京。

去月廿九日之御書、今五日、小田原紹太寺宿寺へ相達辱誦仕候、如命春暖之候益御安健奉賀候、然ハ正邦 德川前内府謝罪狀持參之儀、參政ヨリ御承知被成下、就テハ、右謝狀、正邦上京ニテ差出候テモ、最早大總督宮御發向後ニ付 朝廷ニテハ御請取ニ相成間敷儀故、旅中差急總督宮御陣營へ差上候様可仕、其節正邦上京モ相伺候方可然、委細被仰下謹承仕候、然ル處、正邦、去月廿六日江戸出立、同廿八日、三高驛ニ罷越候處、薩州先鋒之者ヨリ上京之趣意尋候故、在體相答候處、德川之謝罪狀等持參之者ハ、一應督府へ相伺候上ニ無之テハ通シ不申答ニ付、彼ヨリ沙汰致候上ハ、小田原驛へ引返シ、關外ニ扣罷在候様ニト申事故、不得止任其意引戻候上、猶再三上京之儀應接爲致候得共、何分承引不仕、只今之處ニテハ朝暮督府ヨリ之命令相待、空、山寺へ幽居罷在心痛而已仕候事ニ御座候、彼是因循致候内、必天下之大事ヲ可誤ト胸裏如焦ニ御坐候、焦眉之急難救儀ニハ御座候得共、於 尊地モ其筋へ御達シ、旅行速ニ相成候様御周旋相願候、前文之事實、宜御諒察御安置被成下候様是又相願候、先ハ、右等差急貴酬申上度如此御坐候、恐々頓首拜。

三月五日

越前宰相様

正

邦

猶々時下御自愛專一奉存候、去月廿一日、御達書之寫竝御副書共、隨ニ落掌仕候、且正邦、此度上京之儀ハ、謝罪而已ニハ無之、昨冬以來再應之 朝命ニテ上京仕候心得之處へ、謝罪狀被相頼持參仕候處ニ相成居候間、其邊モ御合置、吳々々御取成宜奉希候、以上。

○正邦家記ニ云、二月廿六日、所勞快方ニ付、爲上京江戸表發足、同廿七日、小田原止宿、同所へ薩藩兵隊内海茂十郎被參、旅行之趣意被相尋候付、今般上京可致旨及答候處、多人數被召連、殊ニ兵器ヲ相持セ候段可憚旨被申聞候付、人數十餘名、銃砲等、不殘江戸邸へ差戻候、同廿八日、三島驛止宿、同所へ薩藩村田善平被參、美濃守殿多人數被召連、慶喜歎願書持參之由外疑敷件々モ有之候付、御謹慎可有之旨、大總督有栖川殿ヨリ被仰出候旨被申聞奉畏候、且同夜、三島驛、長藩兵隊宿陣相成候付、早々立退與候様本陣ヨリ申出候付、臣宇式直ヲ以、先鋒隊長鈴木金十郎ト申仁へ面會、旅行之儀及歎願候處、宛ニ角小田原驛迄相退キ 朝命可相待旨、同人被申聞候付、同驛一里程脇入、生田村長興山紹太寺ト申稻葉家菩提所へ謹慎罷在候、三月朔日、軍監中村半次郎、小田原旅宿へ家臣差出、上京旅行御差許御座候様奉歎願候處、大總督へ委細進達致置候間、其内何分之御沙汰可有之、夫迄相待可申旨被申聞候、同二日、同人旅宿へ家臣罷出面會、謹慎微行ニテ上京仕度旨奉願候處、只々大總督宮ヨリ之御沙汰可相待旨被申聞候、同四日、同人旅宿へ家臣罷出面會、同役長州藩佐久間左馬太出會被致候付、段々苦情歎願仕候處、左候半ハ、大總督宮御宿陣迄爲歎願可罷越被申聞候付、宇式直、即日府中へ向ケ出立致候事、同七日、府中驛先鋒總督御宿陣へ罷出、參謀木梨精一郎殿へ面會申入候處、所勞ニ付面會斷之事、同八日再罷出候處、午后可罷出旨被申聞候付、夫ヨリ 大總督宮參謀薩藩西郷吉之助殿へ罷越面會、上京旅行之儀及歎願候處、美濃守殿多人數被召連、兵器等所持之趣、其外疑敷件々モ有之候間、上京差立候旨、先鋒隊ヨリ注進有之候付、上京御差止相成候次第之旨被申聞候付、廉々逐一申披キ、慶喜歎願書之儀、出立折節被相頼難斷無餘儀持參致候得共、直様燒捨申候ニ無相違、且

毛頭異心無御座候旨申述候處、慶喜歎願書燒捨候ニ無相違、且毛頭異心無之候ハ、同役宇和島藩林致十郎ト申者、大總督宮御宿陣ニ罷在候間、夫へ罷越歎願可致旨被申聞候付、先鋒總督御宿陣へ罷越、木梨精一郎殿へ面會、前件之次第申述候處、彌異心無之候ハ、先鋒總督ニ於テハ上京被差許候間、尙大總督宮へ相願可申旨被申聞候付、直様駿府城御本陣へ罷越、林致十郎殿へ面會、段々至情及歎願候處、聊異心無之候ハ、其證書可差出旨被申聞候付、委細拜承、即同驛出立、同九日歸寺、前件之次第謹承仕、同日、臣宇式直へ證書持參出立爲致、同十一日、大總督宮御宿陣へ罷出、林致十郎殿へ面會、左之誓文竝願書^{誓文願書}ヲ略ス、差出候處、御落手相成、暫シテ上京可被差許旨、木梨精一郎殿申聞、御免許之證書御渡有之^{證書之ヲ略ス}、同驛出立、同十二日歸寺、同十四日紹太寺出立、同十五日沼津驛ニテ、先鋒總督橋本少將殿、柳原侍從殿へ面會伺 天機、同十六日、駿府御宿陣へ罷出、有栖川帥宮參謀西四辻大夫殿ニ面會、猶又 天機相伺、誓狀御落手之御答相伺、夫ヨリ追日旅行、同廿三日大津驛へ止宿、

又云、謝罪狀ノ義燒捨候趣申立候子細ハ、度々家來差出シ、先鋒參謀衆へ通行相願候末、雙方ノ内話ニ、慶喜ノ謝罪狀持候テハ、到底通行御差免シハ相成間鋪ニ付、慶喜方へ差戻シ候歟、又ハ燒捨モ致シ候ハ、可然哉ノ口氣ノ旨、家來罷歸リ申聞候處、拙者ハ紹太寺謹慎中前後ハ、官軍ニテ道塞リ可差戻様モ無之、進退維谷リ、不得已、一時ノ權謀ヲ以テ燒捨候趣申立、一刻モ差急キ上京、春嶽ト評議シ、慶喜恭順ノ趣意貫キ候様致度決心ニテ、僞言申立候ハ、至情不得已義トハ乍申、何共恐入候義ニ御坐候、右謝罪狀其儘預リ置、今以テ拙者方ニ存在候義ニ御坐候。

○附錄 勝義邦建白書

臣愚微志ヲ雖欲陳于政機朝臣、卑臣有罪之小臣ナルヲ恐レテ不能、仰 天日空敷默止シテ臣節ニ死スルハ其分也、雖然有罪ト無罪ヲ論セス、邦家之爲卑言ヲ盡ス者ハ 皇國之一民今日ニ在ルヲ以テノ故也、伏テ惟、皇國外國之通交開ケテヨリ尊王斥夷開鎖異同之說興リ、同屬憤爭、是カ爲ニ死スル者連年比々トシテ絶ス、是其政機ノ轉スヘキモノ不轉、徒ニ鎖國、一邦ニ可成ノ舊例ヲ守テ不移ノ故カ、或ハ其政機ノ移ル處遅クシテ、化育ノ速ニ成ルノ故カ、下言中ニ壅塞シテ不通ノ故

カ、其憤争ノ跡ヲ考レハ、頗ル過激ニ失ストイヘトモ、其情ヲ察スル時ハ、共ニ皇國ヲ愁フ一念深キニ發セリ、爲是ニ死スル者、其深怨之歸ル所亦何人ニ在之哉、今日ニ至テハ我徳川氏罪ヲ天朝ニ得、臣衆數千冤罪ヲ愁訴セント欲シテ、其志不達、既ニ同胞相喰ントス、臣愚カ輩其忠諫盡カスヘキ處、其機ヲ失スル既數年前ニアリ、今日悔悟涕泣ストモ不能及、今我主獨リ其誤ヲ悔テ仰天裁モノハ、臣子之分是ヲ慚愧斷腸ストモ不能所、終ニ激怒シテ同胞憤争之基固ク、乘御ノ道ナク、是カ爲ニ百萬生靈其災害ヲ不遁之勢アリ、關内如斯ナルヲ聞テ上國是ヲ笑フ者ハ戰略又妙ナリトイヘトモ、王者ノ政、生靈ヲ愛護スル道ニアラス、舊歲、毛利家ニ國ニ蟄シテ弱、轉シテ強トナル、關東今日之弱者、豈後日之強者ニ轉スルヲ思ハサラシヤ、且同胞相喰シム、憤死之怨亦何人ニ歸スル哉、況哉、譜代之主ヲ捨テ官軍ニ加ラシムル者ハ、君臣父子相喰ノ道ニシテ、羸弱之者一時猛勢ニ恐ル、處ニ出ル歟、天朝之尊嚴ヲ恐レテ如此成歟、不可知トイヘトモ、内心忌懼、邦内人心離散ノ基ト成ルヘキ必セリ、小臣カ輩哀訴セントスル者數百人、然レトモ、黨ヲ結ヒ強訴スルハ我主ノ意旨ニ反ス、故ニ小臣代リテ其微志ヲ愁訴ス、亦興廢ト戦争ヲ恐ル、ニアラス、一片之誠心、爲皇國開キ難キノ口ヲ開キ、アカラサマニ其情實ヲ訴フ、コヒネカハクハ、高明至正之慧眼ヲ以テ了察高議ヲ仰クニ在ル而已、恐惶恐惶誠恐謹言。

辰二月十五日

勝安房

春嶽私記

○案スルニ、義邦ノ建白書、本件ニ關スル所ナシ、私記、本日ニ併收スルヲ以テ此ニ附ス、又勝安房日記ニ、越前家ヲ以テ京師參與へ上言ストアリ、然レトモ、私記ニ據レハ、其上達セシヲ見ス。

復古記 卷四十 終

總閱

一等編修官 臣長松 幹

纂修兼校勘

一等編修官 臣長 茨

二等編修官 臣四屋 恒之

原纂

十二等出仕 臣石津發三 郎

校錄

六等掌記 臣澤渡 廣孝

八等掌記 臣松浦 辰男

繕寫

一等繕寫 臣小川 長和

二等繕寫 臣小島 春

二等繕寫 臣藤園 賢意

復古記 卷四十一

明治元年戊辰二月晦日

○二月

晦日、佛國全權公使レオンロッシュ及ヒ船將二人、蘭國公務代理總領事ド、デ、クラフファン
ポルスブロック及ヒ書記官、朝參ス、天皇之ヲ紫宸殿ニ延見シ、益交際ヲ厚クシ、之ヲ久遠ニ
要スルノ旨ヲ勅諭ス、公使等恩命ヲ奉シテ退ク、是日、英國公使モ亦將ニ朝セントス、途中刺
客アリ、其從衛ヲ衝突ス、遂ニ朝スルヲ果サス。

御門御對面被致度候間、明卅日第一字參朝有之度候、右之趣御案内申入候、此段如此御座候、以上。

二月廿九日

肥前侍從
宇和島少將
東久世前少將
外國事務局叢書

デーテクラフファンポルスブロック閣下

○英、佛公使へノ書翰ハ之ヲ伏ス。

○外國公使參朝次第

一前日、各國公使へ何刻原註、西洋第幾字令參 内之旨、外國事務輔ヨリ、書翰ヲ以三ヶ國公使へ通達ス、

一當日、各國公使參 内之節、外國掛リ公卿諸侯建春門内迄出迎、

但、外國掛リ判事一人ツ、公使旅館迄前導トシテ被遣、公使同道ニテ參 内ス、

一公使虎ノ間迄誘引、外國事務輔相勤、

但、判事附添、

一虎ノ間座席進退、外國掛リ公卿諸侯相勤、

但、判事準之、

一茶菓ヲ賜フ程合ハ、外國掛リ判事取計ヒ、配膳ハ使番ニテ取扱フ、

一各國公使相揃候段、外國掛公卿諸侯ヨリ以非藏人注進、

一副總裁及外國事務督輔、内國事務督輔出會ス、皇帝出御于南殿、

一内國事務輔 出御之旨ヲ外國掛リ公卿諸侯へ通達ス、

一外國掛リ公卿諸侯公使ヲ誘引ス、

但、虎ノ間ヨリ、日華門内ノ東階マテ誘引、夫ヨリ直ニ昇 殿、

但、判事徵士、日華門外マテ、外國掛リ非藏人ハ東階下マテ附添、

一日華門内、外國掛リ公卿諸侯誘引、之先へ内國事務輔先導ス、

一公使ノ日華門内ニ入ルヲ見テ樂ヲ奏ス、

一前導ノ内國事務輔誘引シテ、直ニ本座ニ著ス、

一公使、東階ヨリ昇 殿、外國事務輔誘引ス、

一公使拜 天顏、

復古記 卷四十一 明治元年二月晦日

- 一 公使名披露、山階宮、三條大納言侍ス、通譯外國事務判事伊藤俊介亦侍ス、
- 一 有 勅語、大臣山階、三條、之ヲ傳フ、
- 一 公使奉答ス、
- 一 判事、公使ノ奉答ヲ言上ス、
- 一 公使隨從之士官進テ拜 天顏、
- 一 隨從士官名披露、判事言上ス、
- 一 判事傳 勅旨、
- 一 禮式相濟、公使西階ヲ下リ、月華門ヨリ退ク、
- 一 公使ノ月華門外へ出ルヲ見テ奏樂ヲ止ム。

太政官日誌

○ 本文、蓋豫定ノ儀注ニ係リ、事後ノ叙記ニ非ス。

二月三十日午ノ半刻、佛國公使「レランロッシュユ」、ベニユス船將「ロワ」、シユビレッツキス船將「ペテイトワール」參朝、但、副總裁始メ公卿諸侯及掛リ役員列席。

一 皇帝陛下親シク敕シテ曰、貴國帝王安全ナルヤ、朕之ヲ喜悅ス、自今兩國之交際益親睦永久不變ヲ希望ス。

佛公使曰 天皇陛下、今日、各國公使等ニ拜謁ヲ 賜ヒシハ、余、佛國ニ對シ玉ヒテ、御厚意ナル確證ト仰キ奉ル也、貴國ノ衆民ニ於テモ、如斯高明ナル證ヲ知ル上ハ、即チ 天皇陛下ノ尊キ御宸意ヲ遵奉スルコト、疑ヲ容レサル所ナリ、故ニ今日ハ、即後來ニ長ク記念スヘキ日ニシテ、貴國ト各國ト、至誠ノ交誼ヲ親クスル始ナルヲ以テ、余我國帝陛下ニ代リ 天皇陛下竝ニ貴國ノ幸福盛美ヲ祈リ、深ク神明ノ守護アラシムコトヲ奉願也。

同日、和蘭國公使「ド、デ、クラフ、フアンボルスブロック」書記「クラインゲース」參朝。

一 皇帝陛下自カラ敕スル前ノ如シ、

和蘭公使曰、隨近報承リ候處、和蘭國王陛下安全也、 天皇陛下長ク御安全ヲ保タセ玉ヒ、且御在位幾多ノ年ヲ重ネ玉ハンコトヲ希望シ奉ル也。

太政官日誌

○ 春嶽私記ニ云、晦日、今日外國公使入朝拜禮之事アリ、第一字ヨリ、佛、蘭之公使ハ入朝シテ、英國公使ヲ待ニ不至、朝ノ誤、三字ニ至ツテ、入朝之途中ニテ亂妨ニ逢フノ風聞有之候付、速ニ二國公使ヲシテ拜禮之儀式ヲ竟ヘシメ、畢テ於板敷諸官對接中へ、後藤象二郎來テ變テ告ク、其次第如左、

英公使、知恩院之旅館ヨリ十二人之騎兵ヲ前驅トシ、中井弘藏先導シテ、門前ヨリ繩手通りニ右轉シ、象二郎ハ、猶公使ト共ニ門前町ニアル時、前途俄然トシテ騷擾ヲ發スル故、象二郎乗付ケミタルニ、弘藏一浪士ト戰ヒ、弘藏既ニ手負テ僵レタル際ナリ、象二郎、馬ヨリ飛下リ、忽チニ右相手之浪士ヲ討留メ、猶同類之有無ヲ尋ルニ、英之通辨官サト一此場ニアリシカ、今一人ヲ見タリトイヘル故、其邊搜索スルニ、町家之軒下ニ一人之手負アリ、就テ見ルニ重傷ニシテ氣息奄々タリ、水ヲ與ヘ介抱シテ、英人ト立會、同類ヲ問フニ、初ハ隱セシカト、已ニ一人ヲ生捕タリトイフニ因テ、二人之姓名出處ヲ白狀ス、案スルニ、上文討留ノ外別ニ生捕アリ、此時 朝廷ヨリ迎ニ出タル五代才助行懸リタル故、象次郎ハ、才助ヲシテ公使ヲ導キルニ非ス、蓋シ辭ヲ設ケシモノナリ、此等 朝廷ヨリ迎ニ出タル五代才助行懸リタル故、象次郎ハ、才助ヲシテ公使ヲ導キ旅館ニ歸ラシメ、象次郎ハ弘藏之手當等ヲ命シテ、唯今參 朝セリト、白キ羽織ノ紐袴等へ鮮血ヲ濺キ、息モ繼キアヘス注進セリ、諸官是ヲ聞テ驚愕駭然タリ、不得止、兩國公使ヘモ此由ヲ告タルニ頗憂勞之氣色アリ、英公使ヨリノ書簡原記、之モ來リ、匆々トシテ辭シテ退朝セリ、○英之騎兵九人外ニ士官一人傷キタリ、九人ハ輕傷ニシテ、一人ハ重傷之由、弘藏頭上之傷稍深ケレトモ絶命ニハ至ラサル由。

○ 外國事務局督見親王以下ヲ英國公使ノ客館ニ遣シテ、之ヲ慰問シ、且書ヲ遺リテ之ヲ謝ス、又諸藩ニ令シテ、犯人ヲ搜索シ、警護ヲ嚴ニス、尋テ護衛ノ隊長ヲ按問シテ、之ヲ譴罰ス。

○春嶽私記ニ云、公使退 朝後、諸官集議之上、外國掛リ山階宮、東久世、宇和島老侯、内國ニテハ德大寺、並吾公等、速ニ英公使旅館ニ御行キ向ヒ發作不慮之御挨拶アリ、公使モ、無餘儀情態ヲ目撃セシ故カ敢テ怒ラス、明日早謝狀ヲ給ハラシ事ヲ申出タリ、公、豫侯ト共ニ公使之便室ニ入、閑暗スル談話平常ニ異ナラサリシ由、翌朔日、三條、岩倉兩卿御退散ヨリ旅館へ御行向候、昨日之暴動ヲ謝セラレ、生捕之者ハ、來ル四日帶刀ヲ奪ヒ士籍ヲ削リ、斬首シテ三日之間梟木ニ懸クヘキノ書面ヲ示サレタリ、

昨日、於途中同類申合、白刃ヲ以隨兵へ爲手負候ニ付、參 内モ被差延、御交際ヲ妨亂行之始末、重疊之不届者ニ付、帶刀ヲ奪ヒ士籍ヲ削リ、來ル四日顯戮斬罪之上、三日之間令梟首事、

是等之次第ニヨツテ、公使顔ヲ解キ、此上異義無之由ヲ陳述シテ、明後三日、再參 朝スヘキ事ヲ約定セリ。

○ 昨二月卅日、閣下參朝之中途、大和之産、三枝翁、城州桂村之産、朱雀操、意外之暴行ニ及、貴國之兵士數人ニ手ヲ負セ候次第ニ相運ヒ候處、幸附添之者ヨリ、一人ハ打留、一人ハ貴國兵士召捕候段申出候、尤我ノ政府ニ於テハ、專外國交際ヲ重シ普親睦ヲ厚センカ爲、參朝之儀モ申入候儀ハ、兼テ御諒知之通候處、頃日ニ至リ、右様之所業數々有之候ハ、畢竟我ノ政令不行届ヨリ生候次第、各國へ對シ實以汗背心外之至候、勿論右之者餘類之有無精々探索ヲ盡シ、何處迄モ根ヲ可斷候、又召捕候三枝翁ハ、兩國政府之重大之禮式ヲ妨ケ不届至極ニ付、嚴科ニ可處ハ勿論之事ニ候、且又、貴國之兵士手負者治療不相届、終ニ及死亡候歟、又ハ是ヨリシテ職掌ニ離レ、活計ヲ失フ者ハ、我政府ヨリ至當之養育料ヲ與ヘテ、忿恚之一端ヲ慰シ申度ハ、我政府之實意候間、此段貴下兵士ハ勿論本國政府へモ厚意貫徹候様、以書面申入ヘク旨朝命有之候ニ付、此段如是御座候、以上。

辰 三月 一日

三條 大納言
岩倉 右兵衛督

英國 公使

サーハルリーパークスケシビ

德大寺 大納言
越前 宰相

閣下

外務省記
官中日記

○英國公使復書

昨朔日附御書致披閱候、然ハ一昨晦日、拜謁之タメ 皇宮へ罷參途中ニ於テ、拙者へ對シ暴發有之候段 御門政府へ聞エシ處、御痛心セラル、趣致承知候、扱條約ヲ取結ヒシ外國へ對シ、親睦ヲ被盡度思召ヲ以テ、折角 御門陛下ヨリ、各國公使ヲ御請待相成候得ハ、本國皇帝ハ勿論政府ニ於テモ、日本ニ對シ 御門陛下同様之懇情ヲ抱キ、且他之太國皇帝ヲ尊崇スル禮儀ヲ以テ 御門陛下ヲ敬スル本意ヲ顯カタメ、早速洪恩之御請待ヲ受度罷出候處、豈計ンヤ、不幸ニシテ惡心之者共アリテ、右 御門之思召ヲ妨奉ラントセシハ、元來、本國皇帝へ對シ至極失敬之所業ニ候、 御門陛下ニ對シ猶一層之失敬ニ當候段、閣下達可被察、自然 御門政府ヨリ、早速右一件之處置可及答ト信候故、閣下達へ苦情ヲ申立不致、且 御門ヨリ數度見舞之使者ヲ被遣而已ナラス、猶閣下達ヨリ御書狀被差越、生殘候同類探索等被及候ハ 御門並ニ其政府ニ於テ、眞實ニ如斯暴發有之ヲ痛心被成證據ニ候ヘハ、矢張是迄之通御懇親可申ト存候、且昨日、閣下達へ面會之御御談シ申候ハ、此度之處置ハ、勿論閣下達被仰候通、是迄政令不行届之處、自今、政令十分行届ヘキ様盡力イタシ、後來右等之所業無之様、御處置可有之、尤是迄、貴國之内、外國人ヲ犯候ヲ潔キ事ト思フ黨與有之候處、最早今日ニ至リテハ、外國人殺害ヲ可耻様ニ至ラサレハ、職掌不相濟事、貴國政府ニ於テ被察、猶 御門於テモ外國ト懇親之交ヲイタシ度故、外國へ對シ惡業ナスモノハ、日本之國害ニ相成ニ付、萬一右様之所業ニ及候者ハ、嚴重ニ罰ヲ可與旨、天下中へ布告スヘキ御約束ニ御坐候、右之意ヲ以テ御布告ニ相成候ハ、右惡黨ノ者心ヲ改ムルハ必然也、是又外交永久相續ノ一端ト存候、且此公使館護卒之内、或

ハ死亡シ、或ハ怪我之療治不行届ニテ、其職ヲ離レ候モノ有之候ハ、養育料被差出度 御門之御意、拙者ハ勿論、定テ本國皇帝陛下ニ於テモ定テ満足ニ被思召ト存候、右者怪我之淺深ヲ吟味シ、本國政府ニ於テ、請取理有之ト思ヒ拙者ハ命ヲ下シ候ハ、猶可申入候、就テハ 皇宮へ參 内 之爲、拙者ニ附添居候後藤象次郎、中井弘藏兩人之立派ナル所業ヲ不得不述、右兩人自己之命ヲ不惜、只々職掌ヲ盡シ度意ヲ以テ、早速殺害人へ打掛リ、其場ニテ一人ヲ打取候ヘトモ、中井弘藏深手ヲ負シ段氣之毒至ニ存候、尤拙者之申立ヲ不被待トモ、日本帝王竝國民之名ヲ惜、如斯我命ヲ不顧候モノハ、自然 御門之寵愛ヲ可蒙答存候、右之段回答如斯御坐候、以上。

三月二日

ハルリーエスバークス

三條 大納言

岩倉 右兵衛督

德大寺 大納言

越前 宰相

閣下

外務省記
官中日記

○諸藩へ達書

今般被 仰出候通、今晦日英國公使參 朝掛於途中亂妨之所業有之、終ニ參 朝及延引、實以不容易事體致出來、此御處置振如何收拾相整可申哉ト、深被爲惱 宸襟、誠ニ以奉恐入候次第、就テハ、前以嚴重御沙汰之趣モ有之末ニ候條、於藩々モ、猶又手厚取糺、不審之者有之候ハ、召捕、速ニ可申出候、萬一等間ニ相心得候者於有之ハ、屹度咎被 仰付候事。

二月

島津忠義家記
黒田長和家記

○警護諸藩へ達書

今般被 仰出候通、今晦日、英國公使參 朝掛於途中亂妨之所業有之、終ニ參 朝及延引、實以不容易事體致出來 皇國之御大事ニモ相係リ候儀ニ付、此御處置振如何收拾相整可申哉ト、深ク被爲惱 宸襟、誠ニ以奉恐入候次第ニ候、就テハ、其藩之儀、兼テ警衛被 仰付置候得ハ、別テ嚴重可致守衛ハ勿論之事ニ候得共、猶以厚可相心得候、此往萬一右様之所業出來之節、警衛之者傍觀體之儀於有之ハ、其主人之落度ニ被 仰付候事。

二月

島津忠義家記
徳川義宜家記

○巡邏諸藩へ達書

同上文、但、警衛ノ字ヲ市中巡邏ニ作リ、守衛ノ字ヲ取締ニ作ル、節ノ下、警衛之者傍觀體之儀於有之ノ十二字無シ、

島津忠義家記
前田利同家記

○肥後藩上申書

今晦日、英人參 内之儀被 仰出、午刻頃、知恩院旅館新門ヲ出候ニ付、三藩警衛之人數ハ前後ニ罷在候處、通行之途中、新橋通繩手邊ニ於テ狼藉者有之、英人へ手ヲ負セ候ニ付、右參 内之儀ハ見合、同所ヨリ旅館へ引返候由申出候ニ付、此段不聞御届申上候、以上。

二月晦日

細川 右京大夫 内
青地 源 右衛門
内國事務局叢書

○叢書中、阿波藩モ亦同一ノ上申アリ、之ヲ略ス。

○巡邏諸藩上申書

今晦日、英人參 内之由ニテ、新橋通繩手筋へ通掛候處、北之方ヨリ、帶刀之者二人計罷越、刀拔、馬上之英人へ切付由、依之、早速警固方ヨリ、右帶刀人ヲ討留、壹人ハ召捕候趣ニ御坐候、未何方之者共不相知候得共、不取敢此段御届申上候、以上。

二月

市中
御 取 締 方

○肥後藩隊長上申書

昨晦日、英國公使參 内之節、私共儀途中警衛トシテ、尾州、阿州之隊長申談、行列先ヲ守衛仕、午半刻、知恩院發途繩手迄押行候處、英人之騎馬隊列ヲ亂シ、不一方混雜ニ付、銃卒行列ヲ圓メ、早速場所へ乗付候處、士一人軒下へ斬倒レ、一人ハ被生捕居候付、猶繩手通之左右絶切、通路ヲ留取固、同類吟味イタシ候處、右兩人之外見懸不申、然處、後藤象次郎ヨリ、一應英人爲引取候様附屬之者へ申問候間、其通相心得嚴重ニ守衛イタシ、知恩院へ引取申候、此段御届仕候、以上。

三月朔日

細川右京大夫内

堀内彈右衛門

井上儀左衛門

内國事務局叢書

○附暴動概狀

左ノ文ハ、千八百六十八年ヨリ千八百六十九年ニ至ル米國外交往復書集第一卷中原註、從第七百九、二載スルトコロヲ譯スルモノニシテ、當時、我國ニ在留セシ彼國公使ヨリ、本國外務執政へノ報告ニ係ル。

○英公使ハルリーパークス及衛士等京師ニ於テ襲撃ニ逢フ、

今月廿三日(千八百六十八年三月)、京師ニテ、英公使ガ、天皇ニ謁見セント參朝ノ途中、狂暴ノ襲撃ニ逢フタル事ハ、讀者ノ既ニ聞知スル所ナリ、今其實況ヲ明解セントスル、宜ク、此日公使ガ其旅館ナル寺院ヲ出テシ際ニ於ケル、行列ノ次第ヲ心ニ記スルヲ要ス、扱テ、其行列タルヤ、公使館ノ衛士監督某ト舊薩摩藩士ニシテ、今ハ朝廷ノ官吏タル中井弘藏ナル者ノ兩人、之カ先驅ヲナシ、其次ハ公使館附騎馬ノ衛士、其次ヲパークス公使トス、外國事務局ノ重官後藤象次郎、馬上ニテ其傍ニ在リ、「サトウ」氏亦之ニ伴フ、「ブラトシヤウ」及「プリユース」ノ兩佐官、第九聯隊ノ兵ヲ率ヒ又之ニ從ヒ、「ミット」フオル

ト「氏」ハ馬ヲ得サレハ肩輿ニテ其後ヨリス、爰ニ一大天幸ト云フヘキハ、公使館附醫官「ウキルス」氏、並客員トシテ公使ニ隨從シ上京シタル「ボルス」及「ライディンクス」ナル英國海軍ノ兩醫官、亦此日、夫ノ行列ガ關門ニ入ルノ景況ヲ觀シ、其列後ニ隨行セリ、斯クテ旅館ヨリ行クコト僅カニ數百ヤルトニシテ、夫ノ行列ノ先手、既ニ街角ヲ轉スルヤ、忽然數名ノ日本人、兩傍ノ人家ヨリ突出シ來リ、刀ヲ揮テ縱橫無盡ニ切廻リ、其勢頗ル猖獗ナリ、於是乎、馬ハ此騷動ニ驚キテ暴レ出シ、加フルニ街路狹隘ニシテ、警衛ノ士モ、其手槍ヲ使用スルニ自由ナラサルヲ苦ム、時ニ、中井弘藏急ニ馬ヨリ飛下リ、進テ暴徒ニ向ヒ戰フタリシガ、偶々蹉跌シ痛ク頭部ヲ傷ク、折柄今一人ノ暴徒(此擧ヤ暴徒ノ數僅ニ二人ナリシト見ユ)又闖入シ來リ、前後左右ヲ亂撃シ、人ヲ傷スル甚タ妙ラス、此時ニ當リ、後藤象次郎ハ、公使ト共ニ尙未タ街角ヲ轉セザリシガ、先手ノ此騷擾ヲ視ルヨリ、忽チ馬ヲ下リ馳セ赴ヒテ、既ニ危ク見ヘタル中、并ヲ救ヒ、立トコロニ彼ノ暴徒ヲ斬リ其首ヲ刎テタリ、然ルモ、後ヨリ出タル今一人ハ、尙ホ恰モ猪子ノ荒ル、カ如ク、四方ヲ切廻リ、身ニ銃劍槍刀或ハ拳銃ノ爲ニ數ヶ所ノ疵傷ヲ受ルト雖トモ、更ニ屈スルノ色ナク、其舉動ノ意外ニ出テ、進退ノ神速ナル、實ニ驚クヘキ數多ノ人ヲ傷シ、遂ニ人家ノ後園ニ逃レ去ルニ及ヒ、力盡キ勢窮テ此ニ捕縛ニ就キタリ、此變ヤ、警衛ノ士卒傷ヲ被ムル渾ヘテ九人、但シ其内一人ハ日本人ナル馬丁ニシテ、又馬ノ被傷四頭ナリト云フ、途中斯ル事變ノ生セシ事ナレハ、先ツ參朝ヲ見合せ、第一ノ急務ハ、夫ノ傷者等ヲ旅館ニ送り還スニ在リ、初メ此變ノ起ル、事不意ニ出テ、敵ノ多少計リ難ク、衆群中ノ人又ソノ敵タルモ知ル可ラス、加ルニ、狹隘ナル街路ニ於テノ事ナリ、斯ル際ニ臨ンテ、彼輩皆毫モ屈スル所ナク、非常ノ働ヲナセシハ實ニ賞スルニ堪ヘタリ、而シテ爲ニ傷ヲ負フタル者ノ内ニハ、流血甚ク殆ント死ニ至ラントスルノ恐アルアリ、是ニ於テ、醫官等畢生ノ力ヲ盡シテ、是等ハ先ツ假リニ血止メノ手當ヲ施シ、血液欠耗ノ爲メ、身體既ニ衰弱ヲ極メ、馬ニ跨リ能ハサルハ、人夫ヲ備フテ之ヲ運搬セシメタリ、但シ、人夫ヲ備フニ少シク時間ヲ消費セリ、又稍ヤ身體ノ自由ヲ得ルハ、苦ヲ忍ヒ馬ヨリ歸館セシメ、又夫ノ捕縛ノ暴徒ハ、人夫居サレハ、其近傍ニ店ヲ出セル商人兩人ヲシテ、強テ之ヲ運バシメタリ、醫官等ガ治療ヲ施スニ勉強ニシテ能ク深切ヲ盡シ、且其術ノ巧妙ナリシハ、誠ニ感スルニ餘リアリ、殊ニ之ヲ補助スルノ

人モナク、只タ暫時ニ、先ツ假リニ傷所ノ手當ヲ終リ、傷者ヲシテ、速ニ病床ニ安臥スルヲ得ルニ至ラシメタルハ、實ニ是レ醫官ノ功ト云フヘシ。

却説、夫ノ捕縛ニ就キタル暴徒ニ於テハ、取敢ヘス吟味アリシニ、外ニハ與黨ナシト陳シ、元ト己レハ大坂ノ近傍ナル某寺ノ僧徒ニテ、親兵隊ニ編入セラレンコトヲ志シ、京師ニ出タル旨ヲ供セシガ、第二回ノ吟味ニテ、始メテ外ニモ與黨アリ、共ニ相謀テ外人ヲ殺害セン爲メ來リシ旨ヲ白狀セリ、是ニ於テ、先キニ後藤象次郎カ斬ル所ナル彼ノ一人ノ首級ヲ出シ、之ヲ示スニ、即チ其黨與ナリト云フ、而シテ、渠レ又云フ、己レ此前曾テ外人ヲ見タルコトナシト、又第三回ノ吟味ニ至リテハ、外ニ尙ホ三名ノ黨與アリテ、渠レ若シ事ヲ果サ、ルトキハ、彼輩相續ヒテ起ルノ手筈ナリシト白狀セシカハ、其黨與悉ク皆直ニ捕縛セラレタリ、

抑此舉ヤ、僅ニ兩人ニシテ、殆ント七拾名許ノ英人ヲ襲撃シ、斯ク多人數ヲ傷スルヲ得タルハ、實ニ是レ驚クニ堪ヘタリ、此日パークス公使ハ、盛服ヲ著シ肥大ノ馬ニ乗居タルコトナレハ、暴徒之ヲ目指シ刀ヲ揮テ切掛ケタリシカ、渠レ偶々跌キ其狙ヲ失セシヨリ、其刀ハ公使ノ馬丁ニ及ヒ、馬丁其脚部ヲ傷セラレ、「サトウ」氏ノ乘リタル馬、マタ之カ爲ニケ所ノ疵ヲ被ムリ、公使ハ幸ニシテ奇難ヲ免レタリ、

此變ニ就テハ、天皇政府ノ措置誠ニ喜フヘキアリ、彼ヨリ求ムルアルヲ俟タスシテ、英公使ニ對シテノ此無禮ニ謝スルノ道ヲ盡サレ、其夕、直ニ天皇ヨリ親シク勅使ヲ以テ公使ヲ慰勞アリ、且ツ朝廷ノ官吏及重立タル諸侯等、又自ラ來リテ負傷者ヲ訪ハル、等、其痛歎ノ情、眞ニ誠心ニ出ルヤ疑ヲ容レサル所ナリ、然トモ、政府ガ其實情ヲ表セラレタル第一ノ確證ト云フヘキハ、外人ニ對シ暴舉ニ及フハ、朝廷ニ於テ、甚タ惡ムヘク嫌フヘキノ所行ト思惟セラル、旨、布告ヲ以テ全國ニ知ラシメラレタルノ一事ニシテ、武士タル者斯ル犯罪アルニ於テハ、佩刀ヲ奪ヒ身分ヲ下シテ士籍ヲ削ルヘク、又其罪ノ重大ニ涉ルモノハ、死刑ノ上三日ノ梟首ニ處スヘシトノ事ナリキ、天皇既ニ親シク、外人ニ對シ友情ヲ表セラル、ノ明證ヲ與ヘラレ、又加ルニ此令アリ、是ヨリシテ、日本人中マタ外人ヲ疾惡スルノ思念、竟ニ地ヲ拂フテ絶滅スルニ至ルハ必然期

スヘキカ、若シ、實ニ今般ノ舉ノ如キ、即チ此思念ヨリ出タルモノタラサルヲ得ス、外人ヲ殺害シ、我身死罪ヲ免レサルハ、彼輩亦自ラ之ヲ知ルト雖モ、憂國ノ熱心抑制シ難キノ然ラシムル所ナリ、是レ、彼ノ暴徒ノ口ヨリ出タル語辭ニ依テ徴知スルニ足レリ、渠レノ如キハ、斯ク外人ヲ殺ント迄謀リシモ、後漸ク外人ガ甚タ己レニ懇親ナルヲ知り、始メテ先キニ報國ノ爲メト妄信シタル所行ノ、却テ非ナリシコトヲ悔悟セシト云フ。 外務省記

○尾張藩へ達書

去月晦日、英國公使參 内之節、途中警衛之儀ハ、其藩へ被 仰付置候處、於途中、對英人亂妨之振廻ニ及候者有之候處、警衛之者如何之所置致候哉、其節之始末、隊長之者ヨリ委敷書付ヲ以、早々可申出候事。

三月 八日

刑 法 事 務 局

但、阿州、細川等へモ御達相成候事。

徳川義宜家記

○義宜家記ニ云、本文之趣申上書付留欠テ見エスト、又蜂須賀茂詔家記ハ達書ヲ佚シ、細川護久家記ハ上申書ヲ并テ之ヲ佚ス。

○阿波藩隊長上申書

私共義、去月晦日、英國人參 内仕候節、三藩原註、尾州細川、申談之上、後隊警固罷在、先隊へハ壹町半餘モ相隔離申所、知恩院門前通り大和橋筋へ折曲候所ニテ、小銃一二發相聞候内、先隊混雜之模様ニ相見へ、殊ニ路傍見物人群集之中一入雜沓ニ相至、進退不得自由候得共、組銃隊之内半隊分配、急速相進メ警固可仕内、英國人引返シ來リ候ニ付、兩隊相纏メ知恩院へ護送仕、罷歸候義ニ御座候、前顯之懸リ、後隊罷在程隔候事故、亂妨之模様等相見認メ不申候、御尋ニ付此段申上候、以上。

三月 二日

蜂 須 賀 美 作

蜂須賀茂詔家記

○山崎藩隊長上申書

復古記 卷四十一 明治元年二月晦日

去月晦日、英國公使參 朝之砌、肥後守人數、新橋通り辻々警衛被 仰付候處、元來、小藩小人數之上、右新橋通りハ小辻等殊ノ外多ク御座候ニ付、聊ノ人數夫々へ分配爲仕嚴重相守、私共儀ハ新橋通り半途ニ屯集仕居、屢持場内辻々巡見等仕候ニ付、新橋通り持場中ハ、英人モ無滯通行相成候、然ルニ新橋通りヨリ繩手通り北へ廻リ候テ、俄ニ人馬動搖ノ體相見へ、如何ノ譯哉ト相窺居候へハ、何者共不相分、右繩手ノ辻南ノ方衆人群集ノ中ヨリ突出、亂暴相働候趣ニ相聞へ、右繩手ハ最早持場外ニハ相成居候得共、夷人御警衛阿州様御人數等者、持揚中全ク通り切ニモ相成居不申、新橋持場境へハ、少々輕輩ノ者差出置候ニ付、不取敢、外辻々分配ノ人數引纏、持場堺迄押出シ度存候得共、何分人馬ノ蹂躪甚敷、夷人銃隊竝ニ阿州様御人數モ、當方持場ノ方へ次第々々御戻シニ相成、往返ノ混雜動搖ニテ、持場際迄人數ノ運ヒ更ニ相付不申、種々心配仕、漸々人數押出候處、素々短兵急ノ舉動ニ付、最早亂暴之徒、倒死仕候次第ニ御座候、就テハ、右殘黨餘類、萬一持場群衆之中ニ潛伏等ノ程モ難計相心得、乍不及夫々手配申付候得共、差テ怪敷見請候者モ無之、殊ニ衆人羣亂之中ニ、諸藩士等モ混交仕候儀ニ付、自然疎忽之所業ニ相成候テハ、却テ恐入候ニ付、前後模様相同居候折柄、外國事務御掛ヨリ、一ト先英人歸宿ニ付、道筋之群聚追拂候様被仰渡、早速町家ハ、店等締切申付、尙知恩院門前迄、諸人ハ盡ク相制シ歸宿ニ相成候、勿論前書之通、郡聚中急遽之儀、別テ持場離レ之場所ニモ御座候間、何事モ確證ニハ難相成御座候得共、唯々見受候形勢而已荒々奉申上候、尤持場接近ノ場ニ付テハ、彼是心配モ仕候間、早速右之趣、尾州様、紀州様迄申上置候、右及亂暴候場所ハ、繩手通辻テ少々北へ相廻リ居候場所ニ御座候ノ間、初度ノ委細ハ何共難相分、右ノ外ニ申上候廉モ御座ナク候得共、御尋被仰出候ニ付、不取敢、以書取奉申上候、以上。

三月十三日

本多肥後守
 人數隊長
 小野源太夫
 本多忠明家記

○忠明家記ニ云、三月十二日、刑法律務御役所へ家來ノ者御呼出シ、去月晦日、英人參 内ノ砌、亂暴アリタル始末、且持場ノ儀巨細取調、明十三日午ノ刻迄ニ、差出シ申スヘキ旨仰渡サレ候ニ付、右之通差出候。

○三月十七日紀伊以下十一藩上申書

紀伊中納言内
 隊長
 西郷清輔
 安藤治兵衛
 此外十藩
 隊長連名

今般、英國公使入京之處、知恩院へ止宿ニ付、私共隊ニテ近邊警衛之儀被 仰付、晝夜廻番巡邏等、無怠慢相勤罷在候處、尙又、去ル晦日、右公使參 朝之筈ニ付、往還道筋警衛之儀被 仰付候ニ付、各藩申合、別紙之通往還之受場割ヲ以、人數手配等仕候儀ニ御座候、然ル處、右公使參 朝懸ク、於繩手邊亂妨之所業有之、終ニ參 朝及延引候段御不都合之儀ニ付、右繩手邊ハ、何レ之人數受場ニ候哉取調可申上旨、本多肥後守家來へ被 仰聞候趣承知仕、則取調候處、右ハ發端各藩申合、手廣之場所ニテ辻々等多ク故、自然取混候事哉配當拔ニ相成有之、今更如何共申上方無之、隊長一統不行届之段、何共奉恐入候義ニ御座候、此段御訖申上度、手續之趣有體奉申上候間、宜御取扱被成下候様仕度奉願上候、以上。

三月

○別紙
 英國公使參 朝之節、警衛道順、
 新橋通邊
 本多肥後守隊

復古記 卷四十一 明治元年二月晦日

三條通境町通り 池田丹波守隊
 押小路通り境町邊 木下備中守隊
 境町御門邊 池田相摸守隊
 故院 御所邊 一柳因幡守隊
 日之御門邊 京極飛驒守隊
 從是歸路

清和院御門邊 前田飛驒守隊
 丸太町通り寺町邊 加藤出雲守隊
 押小路通り寺町邊 本庄伯耆守隊
 三條大橋邊 稻葉右京亮隊
 繩手新門前 紀伊中納言隊

○批紙

辻堅之十一藩、書面之通一同奉恐入候得共、亂妨之場所、近ハ紀州、本多ニテ、右兩藩御所置、其他ハ御構不被爲在候事。

三月

刑法事務局

德川茂承家記

○尾張、阿波二藩へ達書

各通

尾州 阿州

去月晦日、英國公使參 内之節、右藩士警衛之途中非常之義有之候條、兼テ御布令之御旨趣モ有之候處、不行届之儀ニ付、

屹度可被 仰付筋ニ候得共、此度寬典之御所置ヲ以、其節警衛之隊長、五日差扣被 仰付候事。

三月廿日

刑法事務局

德川義宜家記
蜂須賀茂韶家記

○紀伊、山崎二藩へ達書

各通

紀州 本多肥後守

右藩士、去月晦日、英國公使參 内之節、街巷警衛相勤候上ハ、兼テ御布令之御旨趣モ有之候處、途中非常之儀有之、全街巷警衛方不行届ニ付、急度可被 仰付筋ニ候得共、此度寬典之御所置ヲ以、其節警衛之隊長、五日差扣被 仰付候事。

三月廿日

刑法事務局

德川茂承家記
本多忠明家記

○肥後藩奉命書

去月晦日、英國公使參 内之節、當藩之者警衛之途中非常之儀有之、兼テ御布令之御旨趣モ有之候處、不行届之儀ニ付、屹度可被 仰付筋ニ候得共、此度寬典之御所置ヲ以、其節警衛之隊長、五日差扣被 仰付候段、御達之趣奉畏、右之者早速差扣申付候、此段御請申上候、以上。

三月廿一日

細川越中守内

池邊悰右衛門

辨事局叢書

○細川護久家記、達書ヲ佚ス、本書ニ據レハ、蓋シ尾阿二藩ト同文ナルヘシ。
 ○附英國公使へ贈ル書

復古記 卷四十一 明治元年二月晦日

五九七

以手紙致啓上候、然ハ當年二月三十日、閣下參 内之途中ニオイテ、貴國護送兵之内二人疵ヲ蒙リ、終ニ生業難營ニ至リ候得ハ、今般歸國相成候趣、我政府ニテモ致承知候、就テハ、三月朔日附之書簡ヲ以テ申入置候通り、我政府ニテ、右二名之タメ養育金差送申度存候得ハ、右養育之爲並右二名之外疵受候六名へ償補トシテ、此度洋銀壹萬四千枚差進候、依之、右金子之儀、銘々へ可然御分配被下度御頼申入候、右爲可得貴意如此御座候、以上。

外國官准知事

東久世中將

辰 八月廿七日

英國公使

サーハルリーパークス

閣下

外務省記

○附九月朔日英國公使復書

以手紙致啓上候、然ハ拙者儀、去三月二十二日、晦日、我二月參 内之途中ニテ、日本人亂妨イタシ候モノ有之、其節ミニストル所附護衛之者疵ヲ受候ニ付、右償金拙者悉致受納候、恭謝之儀 朝廷へ御傳奏被下、拙者恭敬之意 朝廷へ致貴徹候ハ、大慶可存候、右金子、左之通致分配候、乍序貴下へ申上候、
第一 疵ヲ受、身體自由ニ相成不申、無餘義可致歸國兩人之者ハ、五千弗ツ、手當可致積ニテ、一萬弗、本國ロルドシツプ之手ニテ、右兩人ニ始終善キ手當可致候爲メ、拙者本國之外國事務ニ預リ、重立候セクレタリーへ相送申候、
第二 右英國ニ送り候所之路用トシテ、兩人四百弗ツ、手當致シ候、
第三 殘金三千二百弗ヲ、重疵ヲ受候六人之モノへ五百弗宛、薄疵ヲ受候者ニハ百弗ツ、致配當候、謹言。
千八百六十八年十月十六日

英吉利國特派公使

兼全權ミニストル

ハルリーパークス

外國官准知事

東久世中將

閣下

外務省記

○附明治二年英國公使書翰

以書狀致啓上候、然ハ去年二月晦日、余參 内之砌、附添騎兵之内深手イタシ候ニ付、向後勤役相止候兩人養育料、並淺手ヲ負ヒ候者、償金トシテ八月廿七日之貴書ヲ以テ、洋銀壹萬四千枚被差越候趣、本國政府へ通達イタシ候處、我政府オイテ、過分ナル手當トテ満足ニ被思候間、余ヨリ貴國政府へ謝詞可申進様被命候間、此段爲可得貴意如是御座候、以上。

英國公使

ハルリーエスパークス

正月四日

東久世中將

閣下

外務省記

○附九月二十一日英國公使書翰二通

我、去ル西洋第三月二十三日、皇帝陛下ニ入覲ノ途中暴撃ヲ受シ節、足下ノ舉動膽勇讚嘆スヘキヲ、我政府深ク記識セント欲シ、足下ニ一振ノ劍ヲ贈ル、コレ足下卓タル所爲ヲ我政府ノ記念ニ備ヘントナリ、今其品ヲ足下ニ傳寄セヨトノ命ヲ受ケ、予ニ於テ欣喜之至ナリ、依テ、予、又足下ノ國家ニ報スル純忠ナルニヨリ、武運ノ長ク久シキヲ懇願スル詞ヲ茲ニ表スルナリ。

千八百六十八年十一月六日

復古記 卷四十一 明治元年二月晦日

横濱頼利太尼亞使臣館ニ於テ

ハルリーパークス

後藤象次郎 拔

去ル三月廿三日、僕 皇帝陛下へ拜謁ノタメニ參 内イタシ候途中、僕等同勢へ狼籍者致襲撃候處、其節足下カ勇猛絶倫之御働有之候段、女王陛下之政府へ相達シ、女王深ク不堪感激候、依之、足下拔群ナル舉動ヲ永ク記念ニ備ヘントテ、態一劍ヲ制作シテ、コレヲ足下ニ贈リ度ヨシヲ申越候、

我輩儀、右證據之品ヲ足下へ相渡候役目ヲ命セラレ候事、僕ノ面目何事カ不過之候、就テハ、從來貴國ニ疆場之事有之候節ハ、足下カ貴國君民之タメニ忠勤ヲ盡シ、大功ヲ立ラレ候儀ハ明瞭ニ候得共、何卒其節、右劍ヲ號令之タメニ御用ヒ相成度、コレ我輩鄙心竊ニ所冀ニ候。

辱知

ハルリーパークス

外務省記

中井弘藏 拔

○大原俊實ヲ以テ海軍先鋒ト爲ス。

○海軍先鋒日誌ニ云、二月卅日海軍先鋒被仰付候旨、烏丸侍從被申渡候事。

○附海軍先鋒參謀

肥前藩

濱野源六

薩摩藩

中原 猶助

海軍先鋒記

○大原重實履歷書、手記等、宣旨ヲ伏ス、先鋒記ニ云、猶助ハ依所勞辭退ト、而シテ其之ニ代リシモノヲ載セス、案スルニ、四月二十八日、品川海ニ於テ軍艦交付ノ際、榎本武揚ノ書翰、及ヒ先鋒府ノ復書、竝ニ源六一人ノ名ヲ署セリ、則猶助辭職ノ後、別ニ新官ヲ命セサリシナルヘシ。

○附重實履歷書ニ云、三月一日、海軍之職ニ就クカ爲メ、赤報隊之事務ヲ、東伊佐男、荒木尙一、武田文藏、阿部十郎等ニ委任ス。

○井伊直憲、疾ヲ以テ、大阪行幸ニ扈從スルコト能ハス、因テ老臣ヲシテ、兵ヲ率ヰテ沿路ヲ警護セシメント請フ。

今般 御親征ニ付、浪華表へ 行幸被爲在候ニ付テハ、私儀爲御警衛、御供奉願度奉存候處、病氣今以全快不仕候ニ付、爲名代重役之者人數引卒、御途中御警衛爲仕度奉願候、御聞濟被成下候ハ、難有奉存候、以上。

二月晦日

井伊掃部頭

内國事務局叢書
井伊直憲家記

○三月十八日演達

願之趣神妙ニ被爲 聞食候得共、多人數之御供之儀ニ有之、不及其儀候段被 仰出候。

井伊直憲家記

○有馬氏弘、疾ヲ謝シ、在京ノ老臣ヲシテ代リテ事ニ從ハシメント請フ。

今度御變革追々被 仰出候 御旨趣モ被爲在候ニ付、私儀早速上京、可奉窺 天氣筈ニ御坐候處、病氣罷在、速上京仕兼奉

復古記 卷四十一 明治元年二月晦日

恐入候、依之、先重臣之者此度上京爲仕、奉窺天氣、冥加至極難有仕合奉存候、從素勤 王仕候心底御座候得共、未病氣罷在
残念至極奉存候、非常御時節相辨少々モ快方御坐候ハ、押テ上京可仕心得御坐候ニ付、出京迄爲名代爲差登置候重臣へ、
高相應之御用向被 仰付被下置候ハ、志願相立誠ニ以難有仕合奉存候、乍小藩如何様共盡力精勤仕度、何卒微衷御憐察
被成下候様、可然 御執奏偏ニ奉懇願度旨申附越候、以上。

二月晦日

有馬兵庫頭重臣

安西彌右衛門

辨事局記

○氏弘家記、此事ヲ佚ス、且批紙見ル所ナシ。

○鍋島齊正、青山忠敏、長岡護美、京ニ至ル、良之助○肥後藩主昭邦ノ弟 黒田直養、疾ヲ謝シ、老臣ヲシ

テ代リテ京ニ至ラシム。辨事局

是月、參與櫻井元憲ヲ罷ム。櫻井元憲事蹟

○制度事務局權判事井上長秋、石見○薩摩藩士 議ヲ上リ、衣服ノ制ヲ定メント請フ。

軍事急迫ノ御時節、文事竝ヒ被爲興、人材ヲ公撰シ玉ヒ、既ニ制度ノ局モ相立候上ハ、申上ル迄モナク、定テ御手ヲ可被著候
得共、近來衣服ノ制、貴賤無差別上下混雜、競テ異服ヲ著シ候様成行、外國交際ノ時ニ臨ミ、見苦敷次第ト奉存候、右ハ治世
ノ宿習、長袖ノ流弊去リ兼候ニハ勝ルヘク候得共、我國ノ制度不相立、猥リニ異風ニ成行候テハ、異邦ノ正朔ヲ奉スルニ齊
ク、大ナル御失體ト奉存候、乍去、我從前ノ服、何トナク廢絶ニ及ヒ候モ、軍中不便、旁不得止ノ勢ヒニ候、依之、何卒今般 聖
斷ヲ以テ古代簡易ノ制ニ基キ、今世ノ宜ニ從ヒ、用捨斟酌シテ上下ノ分ヲ定、軍役ニモ相立候様、公卿ヨリ准士迄服制ヲ被

改、輕卒以下者胡服ヲ用ヒテモ不苦旨被 仰出度奉存候、右取調方ニ付テハ、古今ニ通シ服制等委シキ人可有之、私存知ノ
者ニモ捲川圖書原註、東寺ノ住ト申ハ、右邊相心得候者ニ御坐候、是ニ被 命候テモ、畫圖、雛形等取調、見込ノ程モ可申上候、右
ハ固陋ノ辯說ニ類シ候ヘトモ、彼孔子ノ被髮左衽ノ語モ有之通り、國體ニ關ル譯ニテ、追々海外ニ使節等御差立可相成候
間、必ス古來ノ國風ヲ不失様、衣服モ嚴正ニ無之テハ、外國ニ笑ヲトリ可申、旁今日ノ急務ト奉存、不奉願賤陋奉言上候、誠
恐誠惶謹言。

二月

井上石見

制度事務局叢書

○附福岡孝弟等服制草案五通

衣服、

延喜式ニ、凡衣袖口闊無高下、同作一尺二寸已下、其腋闊者一尺四寸、其表衣長縫著地、

今大意此制ニ從ヒ、左ノ如シ、

禮服、袷原註、袖口一尺二寸、四幅袴、

衣製寸尺貴賤分チナク、唯、冠竝服色綾絹等ヲ以テ上下ヲ分ツ、

常服、短掛原註、袖口、腋闊、袍ニ同シ、 割袴、

軍服、直垂原註、小袴原註、長以上、 筒袖、筒袴原註、兵士兵卒、

筒衣服色、隊中一樣タルベシ、

以上表衣、其下襲、汗衫等、亦袖口、腋闊、表衣ニ准スベシ、

右制相立上ハ、從來ノ狩衣、水干、笏、竝上下肩衣、平袴等廢之、但庶人ハ短掛原註、平袴タルベシ、 平袴タルベシ、
頭髮、

堂上ハ總髮、冠髻、原註、童子總角、諸侯以下帶刀以上ハ總髮、曲髻、原註、童子前髮、但臨軍者ハ斷髻、便ニ從フベシ、庶人帶刀セザル以下ハ曲髻、額髮ヲ除クベシ。原註、童子前髮、

○井上長秋案 衣服、

禮服、

袴 原註、袖口一尺二寸、腋闊一尺四寸、袖ノ長サ 手首ヲ限ル、俗ニ云角袋、カイコミ等廢之、

服色一位深紫、三位以上淺紫、四位深緋、五位淺緋、六位深綠、無位以下平絹或布、無紋タルヘシ。

○附 無位黃袍、但綠黃等無紋

下襲 單袍ニ准シ減小之、表袴、

大口 帶 笏從前ノ如シ、冠從前ノ如シ、烏烏皮履、直垂 引立烏帽子原註、公卿諸侯兼用之、麻上下原註、從前ノ製ヲ不變、庶人著之、

○附 立烏帽子原註、公卿諸侯兼用之、

一日禮服、

缺腋袍原註、袖口一尺、四幅袴、腋闊一尺二寸、

服色冠烏等如前、其外廢之、

一日禮服、

狩衣名ヲ改ムベシ、

服色等如前、諸侯以上從前ノ製ヲ不變、以下袖口八寸ヨリ一尺二寸迄、腋闊一尺ヨリ一尺四寸迄、袖ノ長サ手首ヲ限ル、表袴或四幅袴、

小袖原註、親王一位白綾、以下六位迄 白無地、無位以下常服ノマ、

○附 三位已上白綾、四位已下平絹白 立烏帽子、

烏皮履、

常服、

羽織原註、袖口八寸ヨリ一尺二寸迄、腋闊 一尺ヨリ一尺四寸迄、騎馬以上鞭裂、

服色一位深紫、三位以上淺紫、以下禁之、

袴原註、襠高或四 幅好ニ應ス、

左右膝ノ上、菊綴ヲ付尊卑ヲ分ツ、一位ハ紫、三位以上紫白、以下紅白、無位ノ者不著之、

平羽織 平袴庶人著之、

野袴 半袴原註、俗ニ云、義經 袴、士分以上著之、

股引 半衣 裊袴原註、士分以 下兼用之、

右二行如從前、旅行等好ニ應シ著用之、或曰廢之、常服又ハ軍服ヲ以テ旅服ニ兼用スヘシ、

軍服、

鎧直垂原註、公卿諸侯ノ外、錦綾ヲ禁 ス、以下士分迄、絹或布ヲ用ユ、

陣羽織前ニ同シ、

筒袖 筒袴原註、隊長以上、肩左右ニ金縫紋、兵 士白紋、徒士以下無紋タルヘシ、

服色隊中一樣タルヘシ、又國々家々ノ印有ヘシ、守衛番士巡邏ノ士卒、或船中又ハ防火ノ時、軍服常服貴賤兼用スヘシ、

○附 引立烏帽子原註、公卿諸 侯兼用之、

以上

一下襲、汗衫、袖口、腋關等表衣ニ准スヘシ、
一右ニ不舉所、従前ノ服類總テ廢絶ス、
一婦女子ノ服追テ改ヘシ、

頭髮、

總髮原註、公卿以下士分迄

冠髻原註、公卿諸侯

總角原註、公卿諸侯ノ童子

前髮原註、地下官人以下ノ童子

曲髻原註、無位以下庶人迄

斷髮原註、兵士兵卒簡便ニマカス

○谷森種松案

續日本後紀所載、從四位下池田朝臣春野傳曰、春野宿老能說故事、或可採容、此十年冬原註、天長十年ノ冬ナリ、將有大嘗會事、天皇欲修禊祓幸賀茂河、春野以掃部頭奉鹵薄陣、看諸大夫所著當色其裾曳地、大咲曰、是尋常之裝束、非神事之古體、便指自所著爲古體之證、其裾離地差高而袴襪露見矣、諸大夫皆驚云、古之儀制原註、中略、後代當效之、春野衣冠古樣身長六尺餘、稠人之中揭焉而立、會集衆人莫不駐眼瞻々、國老如此者今則不見也、

續日本紀曰、和銅元年閏八月丙申制、自今以後、衣標口闊八寸已上一尺已下、隨人大小爲之、延喜彈正式曰、衣袖口闊、無間高下、同作一尺二寸已下、其腋關者一尺四寸、

拾芥抄曰、衣服寸法、

袍袖口闊、五位已上一尺爲限、六位已下八寸、女亦准此、原註、弘格雜、寶龜六年正月九日

袖闊一尺八寸以下、袴廣不及三幅、原註、長保元年七月廿五日宣符

衣袖竝袴廣、同以一尺六寸爲限、原註、長保三年閏十二月三日符、檢非違使申請

所見右ノ如クニ御座候、何卒右等御折中、當世ニ被行ヤスク候様、御考定被遊度奉存候、但シ愚存ノ趣ハアラアラ左ニ申上候、宜ク御取捨可被下候、

一冠 古制ハ、伊勢貞丈ノアラアラ辨ヘタルガ如クニモ可有之候ヘトモ、今日ニ行ハレガタク候ハムト奉存候、尤古代ハ原註、コトモニテ和カニ縫作タルモノニテ、降雨ニ逢ヘバ、冠ヒシゲテ見苦シカリシ趣、清少納言ノ草紙ニ見エ候、古畫ドモヲ通考仕候ニ、巾子ハ太ク低ク、額ハ深ク候様相見エ候、兼好ノツレツレ草ニモ、追々巾子高クナリテ、舊キ冠宮ニ收リガタクナレル故ニ、冠宮ノ縁ヲ繼足シテ用フル由ミエ候、五百年ノ前既ニ如此シ、當世ノ巾子高キコト推テ知ベク候、何卒隨分古體ニ叶ヒ候様被爲在度候事、

一衣袍ノ裁縫、長大ナルハ後世ノ弊風ト奉存候、身體ノ大小ニ合セ、進退ニ便利ヨロシキ様被爲在度候、角袋、カイコミ等ハ尤モ無用ノ長物タルヘク候、法隆寺所傳ノ聖德太子ノ御影像、多武峯ノ藤原鎌足公ノ御畫像、榮山寺ノ武智麻呂公ノ御像、又ハ小野道風、能美宿禰ノ畫像、サテハ伴大納言ノ畫卷ナド、皆古ヘノ衣服ノ制度ヲ相徴スルニ足リヌベキモノニ候、又上ニ引出候池田春野朝臣ノ容體、御勸考被爲在度奉存候事、

一表袴大口當世ノ體ハ襠低クナリ候ヘドモ、カツカツ古體存リ候様奉存候、

一烏帽 紗或ハ絹ニテ縫作り、漆ヌリタルガ本體ト奉存候、ムカシ九條師輔公御妻室逝去ノ後、手宮ヲ開見玉ヒシカバ、師輔公ノ烏帽子ト襪トヲアマタ縫ヒテ收置玉ヒシ由大鏡ニミエ候、

一狩衣 尻長カラス、袖大ナラザル様ニ被爲在度奉存候、

一指貫 當世ノ指貫ハ、アマリ長大ニ過キ候様奉存候、指子ノカタ隨分簡便ニ可被爲在候、

一地下之輩、是迄麻上下著用ノ場合ハ、身分ノ程々ニ合セ、布衣袴著用古様ニ相叶ヒ可申候、平常ハ羽織半袴タルヘク候、

一折烏帽子 平絹、或ハ布ニテ縫作り、漆ヌリ、或ハ澀ヒキ候モ便利ヨロシキ候、但シ晝夜蒙リ候テモ、頭ノ惱ミ無キヤウ

ニ和カニス候様、作り候コト肝要タルヘク候、蒙古襲來ノ畫卷ナドニ、烏帽子ヨリ髮ノ生際、スキテ見エ候體畫キ有之候、冠モ古體ハミナソノ様ニ髮際スキ移リテ見エ候體、古畫像等ニ分明ニ御座候、

一 布衣 身ノ前後隨分短ク候テ便利ナルヘク候、古畫ヲ通考仕候ニ、大體膝ヲ過候程ニ相見え候、袖尤モ短狭ニ有之度候、又身分ノ品等ニヨリ、絹或ハ布ニテ作り候コト御定有之度奉存候、

一 奴袴 裁縫短狭ニ有之度候、就中指子ノ方簡便ニ可有之候、長保三年ノ制ニ、衣袖竝袴廣同以ニ一尺六寸ニ爲限ト見え候御定ニ依り申度奉存候、

一 淺沓 張貫ハ雨濕ニ損シヤスク、木沓ハ拜趨ニ破レヤスク候テ、時ニフレテ失禮ヲモ現スヘク候、烏皮沓ト相見え候令制ニ基ツキ候テ、足ニ合ヒ候ホドニ皮ニテ縫作候ハ、奔走ニモ雨濕ニモ破損ノ患ヒスクナク、尤モ簡便ニ可有之奉存候、

一 平常著用ノ半袴ハ、後紐ヲ廣クシテ腰板ハ廢スヘク候、總テ袴ノ襠ハ高クアルヘキモノニテ、低キハ柔惰ノ弊風ト奉存候、博ク古畫等ヲ見合セテ、袴ノ窄ク襠ノ高カリシ様體ヲ推知スヘキコト、奉存候、

一 直垂ハ、便利ノ服ニテ、軍服ニハ然ルヘク候ヘドモ、上ヲ著込ニシテ、袴ヲ上ニ著ルモノニ候ヘハ、上ヲ尅スル體相ニ候ヘハ、禮容ニハ不肖ノ服ナリト古人モ申候、鎌倉、足利等執政ノコロ、専ラ直垂流行仕候ハ、即チ二氏上ヲ凌ギテ權ヲ恣ニシタル相ノ自然トアラハレ候體ニ御座候ヘハ、尤當世ニ御用心可被爲在コト、奉存候。

谷森 諸 陵 助

○山田有年案
有位以上服製

袍

以前ノ袖ノ闊サユキ等減スヘシ、原註、袖口一尺二寸、腋一尺、カク袋、カイコミ等廢スヘシ、色深紫以下令式文等ノ通り改ムヘシ、但シ有來リノ分ハ裁縫ノミ改メ、色ハ先其儘ニテ新調ノ節改ムヘキ歟、原註、衣冠ノ節ハ小下襲

袍ニ應シ袖ノ闊サユキ等減スヘシ、裾是迄ノ定メヲ夫々減スヘシ、原註、縫著
單 下襲ニ應シ袖減スヘシ、

表袴

在來通り、

大口

同上、

帶

先是迄ノ制ニ從フ歟、

笏

同上、

淺沓

廢スヘシ、烏皮履ニ改ムヘシ、

狩衣

袖ノユキ一幅半、同闊サ減スヘシ、原註、袍ニ
同袴 准スヘシ、

兩足ノ口ノ闊サヲ減スヘシ、原註、一
尺二寸、

奴袴ハ廢スヘキ歟、

直垂

尋常ノ節地合差別有ヘシ、尤袖ノ闊サユキ等減スヘシ、原註、袍ニ
准スヘシ、袴ハ切ルヘシ、

鎧直垂

非常ノ節、地合錦、綾、平絹ノ差別有ヘシ、

冠

烏帽子

○蜷川式胤案

謹テ衣服ノ制ヲ奉言上候、抑上古ハ闕ワキアケ腋アキニ表ウエノ袴也、人皇ノ初ヨリ傳リシ服制ニテ、神事ノ嚴禮ナル衣服ハ皆是也、今ニ置キ、新嘗祭、臨時祭等ニ著用セラレシ小忌衣ニテ明也、本名ヲ禪チヤト云、中昔ヨリ縫ユツ腋アキヲ加ヘ用ヒテ文官ノ衣トシ、

闕腋ヲ武官ノ服トシ給ヒ、今ニ於テ如此、推古帝ノ御世ニ、始テ冠ト位ト諸臣ニ賜リ、孝德帝ノ御世ニ、七色十三階ノ冠ヲ製セラレ、後又冠十九階ヲ製セラル、天智帝ノ御世ニ廿六階ノ冠ヲ製シ給フ、

天武帝ノ御世ニ、聖明ノ英斷ヲ以、右數品之冠ヲ廢セラレ、漆塗ノ紗ノ冠ヲ製シ給ヒ、上下ヒトツニ定メ給フ、實ニ輕便ナル御事ニテ、今ニ至リテ此餘風殘レリ、冠ハ右之通りナレトモ、衣服ハ其マ、ナル故ニ、方今、御聖斷ヲ以テ、純粹ノ古制ニ基ツキ、闕腋ハカリニシテ、流弊ノ縫腋竝ニ狩衣及襖子製ノ物ヲ廢セラレ、上一品ヨリ下初位以下ニ至ルマテ、次第ニ袖ノ廣サ竝ニ裾ノ長サヲ縮メラレテ、上下ノ分チヲ定ラレ度奉存候、袍トイフトモ、袖サヘ各別ニ寸法ヲ縮メ候ヘハ、戎服ト用テ同フス、古圖ニモ見ユ、衣服ノ制ハ仕立様ニテ、各國ヲ別ツモノ故ニ、仕立方ヲ先定ラレ、海外ノハテマテモ、是カ本朝ノ制トイフ事ヲ、彼ヨリ唱フル様ニナラサレハ、我國ノ國體竝ニ制度不相立、又衣服ノ製ノ數カ多クテハ、本朝風ト云事カ他國ヨリ見ヘ兼申候事ト奉存候、誠惶誠恐頓首敬白。

四月

蜷川圖書

衣服

朝服

袍原註、縫

腋、缺腋、袖口一尺五寸、腋闊准之、

四幅袴

禮服

布衣

袖口腋闊准袍、

差袴

常服

短掛

襦高袴

軍服

筒袖短掛

小袴

右有位以上、

筒袖

筒袴

右兵士兵卒、

頭髮

總髮冠髻幼時總角

右公卿、

總髮曲髻幼時總角

右諸侯已下庶人迄、

寺僧ノ外剃髮ヲ禁ス、

但臨軍且洋行ノ者斷髮ヲ許ス。

復古記 卷四十一 明治元年二月晦日

續日本紀卷八

元正天皇之條下云

二月壬戌初令天下百姓右襟云々

此文ヲ以テ考レハ、有官ノ人ハ、是迄ニ右襟ニ相成候テ、百姓計リ其マ、ニ相成ルト思ワル、此時ニ上下同様ニ被定候物也、

今赤紐ハ肩ニ付ルコト右有左アリ、大古ハ如此物也、聖德太子眞像、守屋ノ眞像ヲ見ルニ、蟬頭付シ物也、赤紐ノ姿成見ヘス、首紙ハ右面ニハ巾二寸位ニ見ヘ申候、

丈、高位ノ人ハ、足クワ迄タリ、袖ハ一尺一二寸位ニ見ユ、

下官ノ人ノ丈ハ、帶ヨリ少シ下ニ有リテ甚短シ、袖八寸以下七寸位ニ見ユ、身巾ハ高下共一尺二寸位ニ見ユ、袖ノユキハ、貴ハ手先五寸位モ餘ル、下官ノ人ハ手首ニ止ル、此服ヲ神主亦ハ大禮ノ時ニ用ヒラレ度候、何モ麻白也、常ニ用ヒタキ物ハ、此通ニシテ、首紙ニ蟬頭ニテ宜敷候、丈ハ著

丈ニテ可也、常ニハ絹、麻、人ノ高下ニ從フ、神祇式ニ

綿一百九十屯、調布六十七段、三丈四尺、紅花六斤已上青摺衣料

同上

絹十四疋三丈、十疋ハ被料、四疋三丈青摺衣料、

同上

和妙衣廿四疋八疋廣一尺五寸、八疋廣一尺二寸、

此文ヲ以テ見レハ、反物ノ巾ノ廣狹アリ、然共

今ニ小忌ニハ身巾一巾也、大嘗會ノ卯日調進

ノ御衣ニハ今ニ袖一巾ナリ、

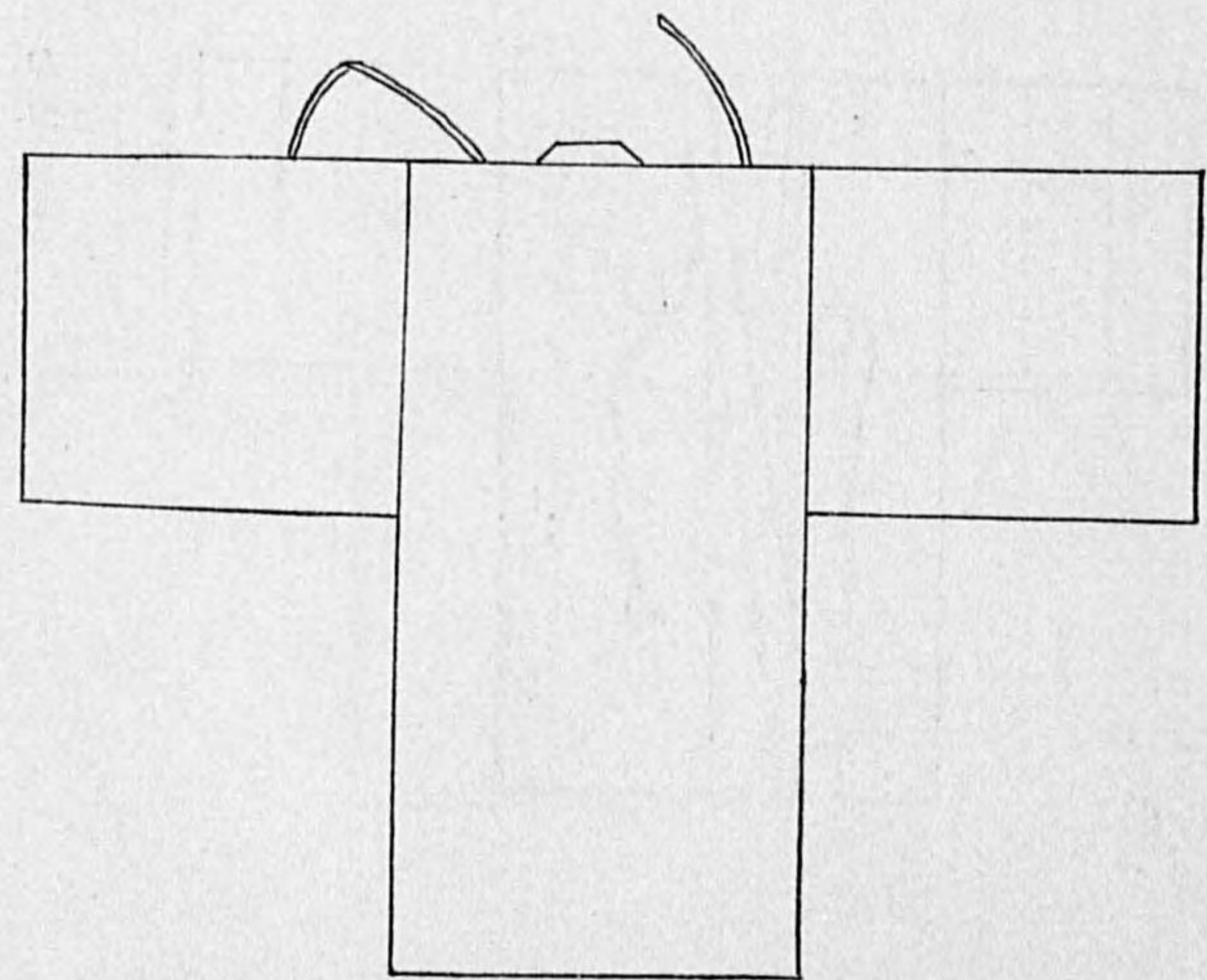
神祇式ニ、葵摺袍、青摺袍表裏別、古ヘ人文開ス、

ワツカニ摺衣位ノ文華開ケシ姿、今ニ傳リテ、青

摺衣ヲ神事ニ用ヒテ古典トス、

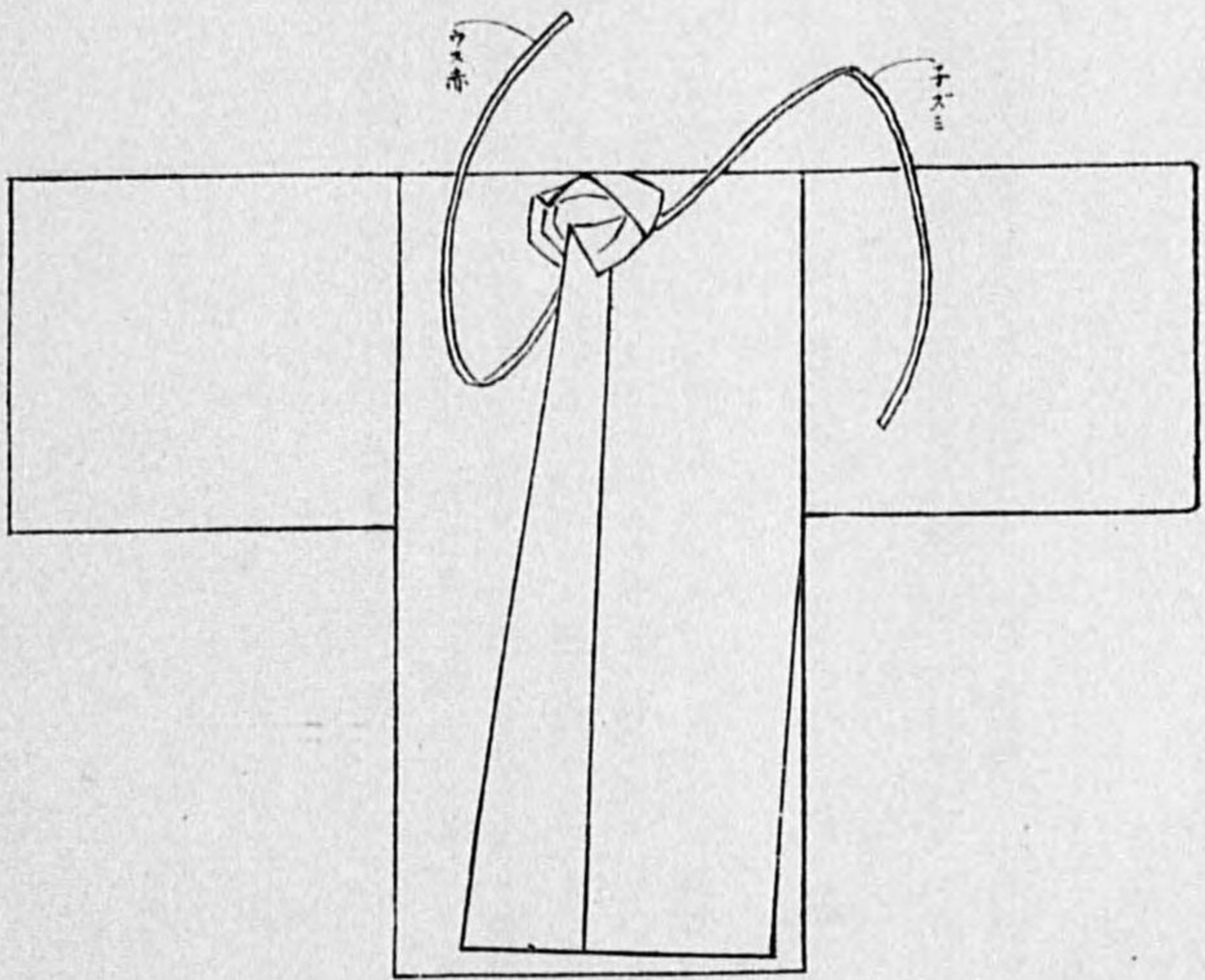
慶應四年夏自造

皇都左寺蠅川卷



同上後面

白單前面



襖子

袖ノ闊サ、位袍ト同シク、三位以上一尺、五位以下八寸、
是ニ奴袴ヲ着用シタルヲ、上下合テ、源平ノ比ヨリ直垂ト號ス、保元ノ比ニハ、襖ニ大口袴、亦ハ襖ニ奴袴ノ文字有リテ、上下別々ニ書物ニハ見ユ、
倭名鈔ニ、

襖子唐令諸給時服ニ冬則白襖子一領

延喜彈正式ニ、

凡庶人以上不_レ得_二襖子重著_一

此文ヲ以テ見レハ、下賤ノ者ノ服ニテ、輕便成故軍服ニ用ユルコト明也、

衣服令ニ、

位襖調無關、紺襖、縹襖 兵衛

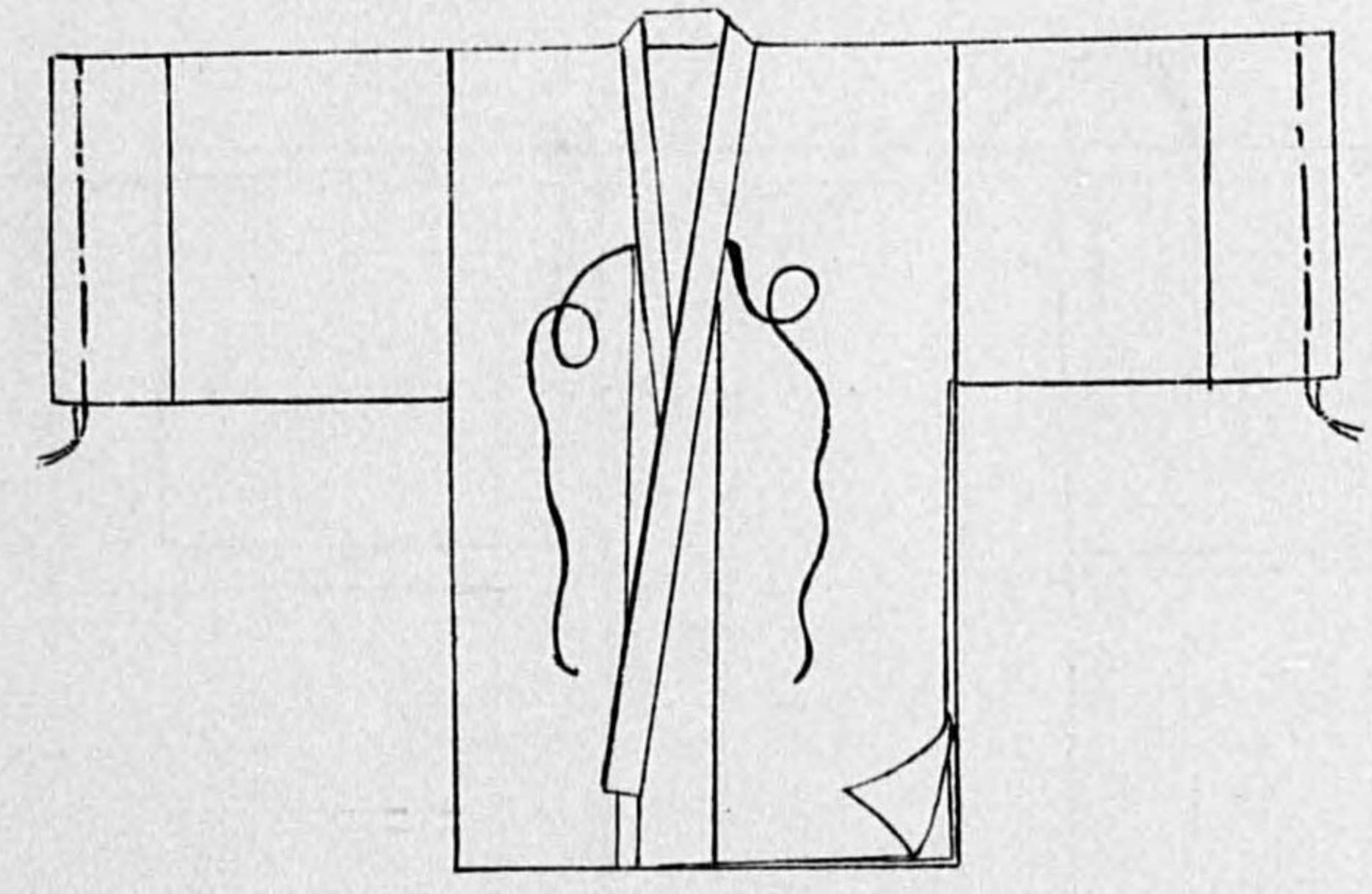
著用、以下衛士桃皮染皂色衫也、

衫トハ、羽袖無キヲ云、延喜式ニ、衫ニモ緒ヲ付ルコト一ヶ處見ユ、

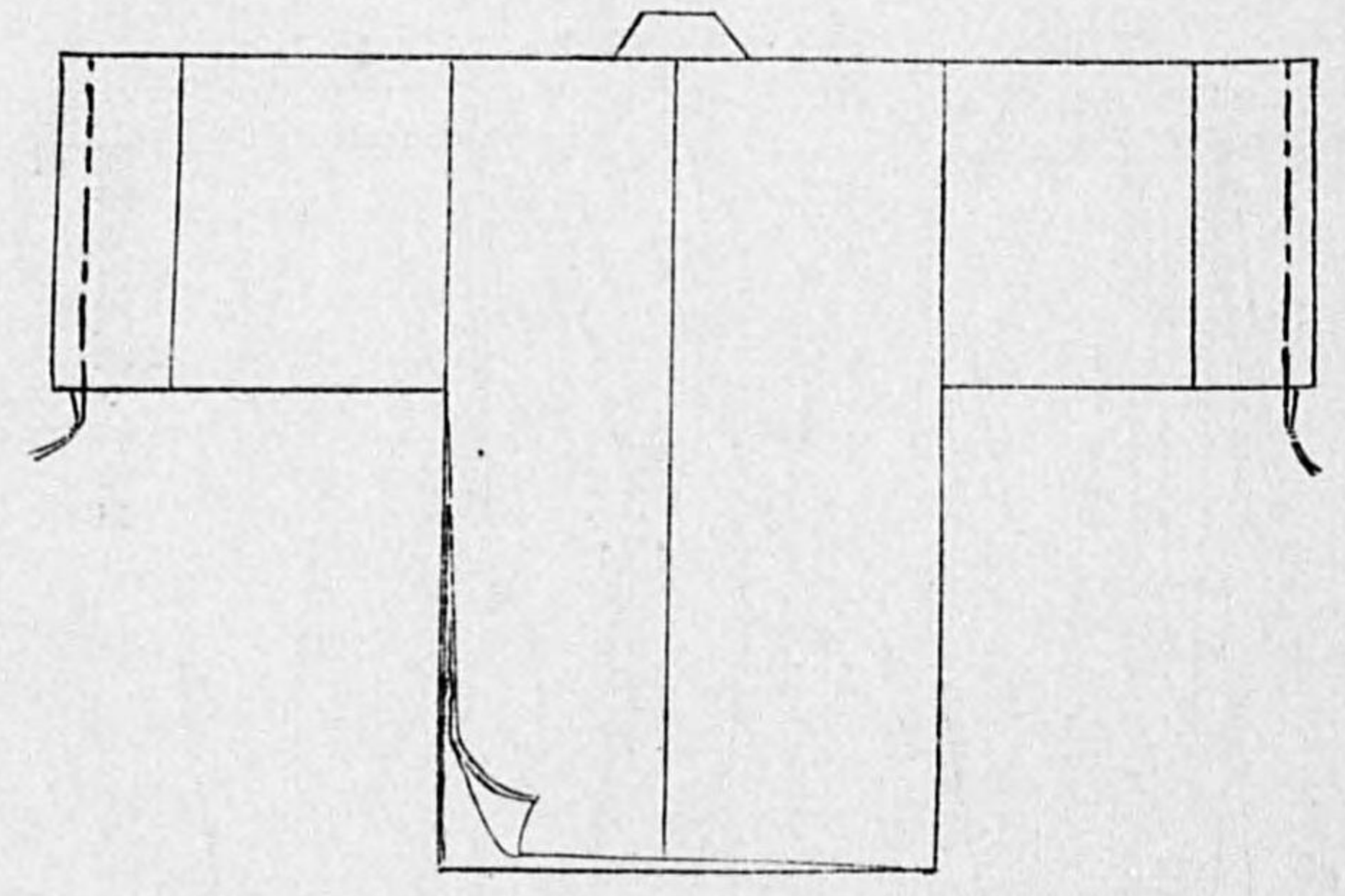
慶應四年六月造ル

皇都左寺蠶川 花押

白單前面
十
子ノ紐白



同上後面



今ノ表袴、襠二枚、下リテ左右ニ縫付ス、予考ルニ、付ザル物ナレハ、一枚ニ事タレリ、二枚有ルニハ如此、左右ヘ一枚ツ、縫付タルト思フ、古圖ニモ凡見エ、襠モ甚短シ、夏ハ單、冬ハ袷、古圖ニモ襠ニ見ユ、

常ニハ絹、麻、人ノ貴賤ニ依フ、

儀式ニ用ル餘ハ、外ノ袴、神事ニハ必麻ニテ用ヒタキコト也、神主ハ、常ニモ御社用ニハ用ヒタキコト也、

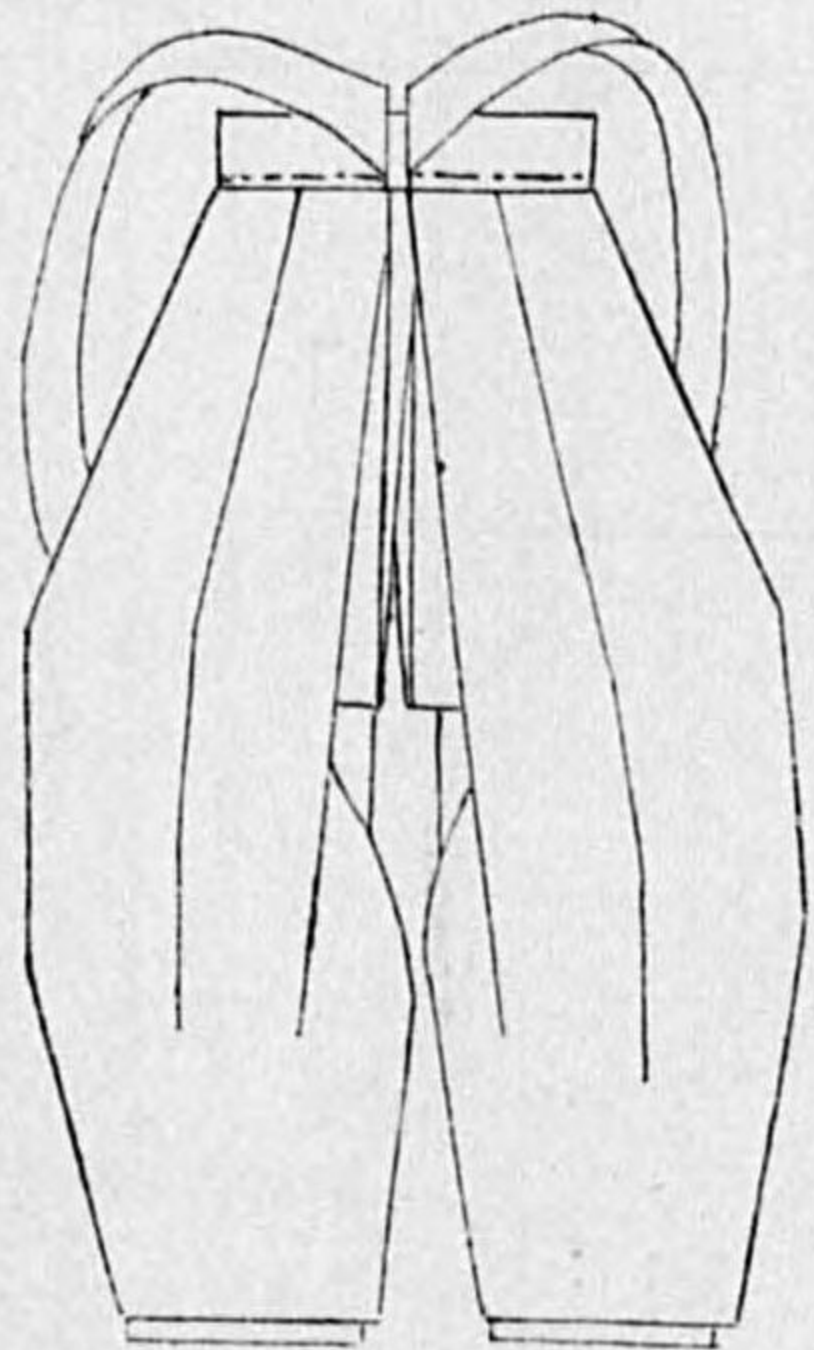
慶應四年五月自造ル

左京東寺蟻川圖書

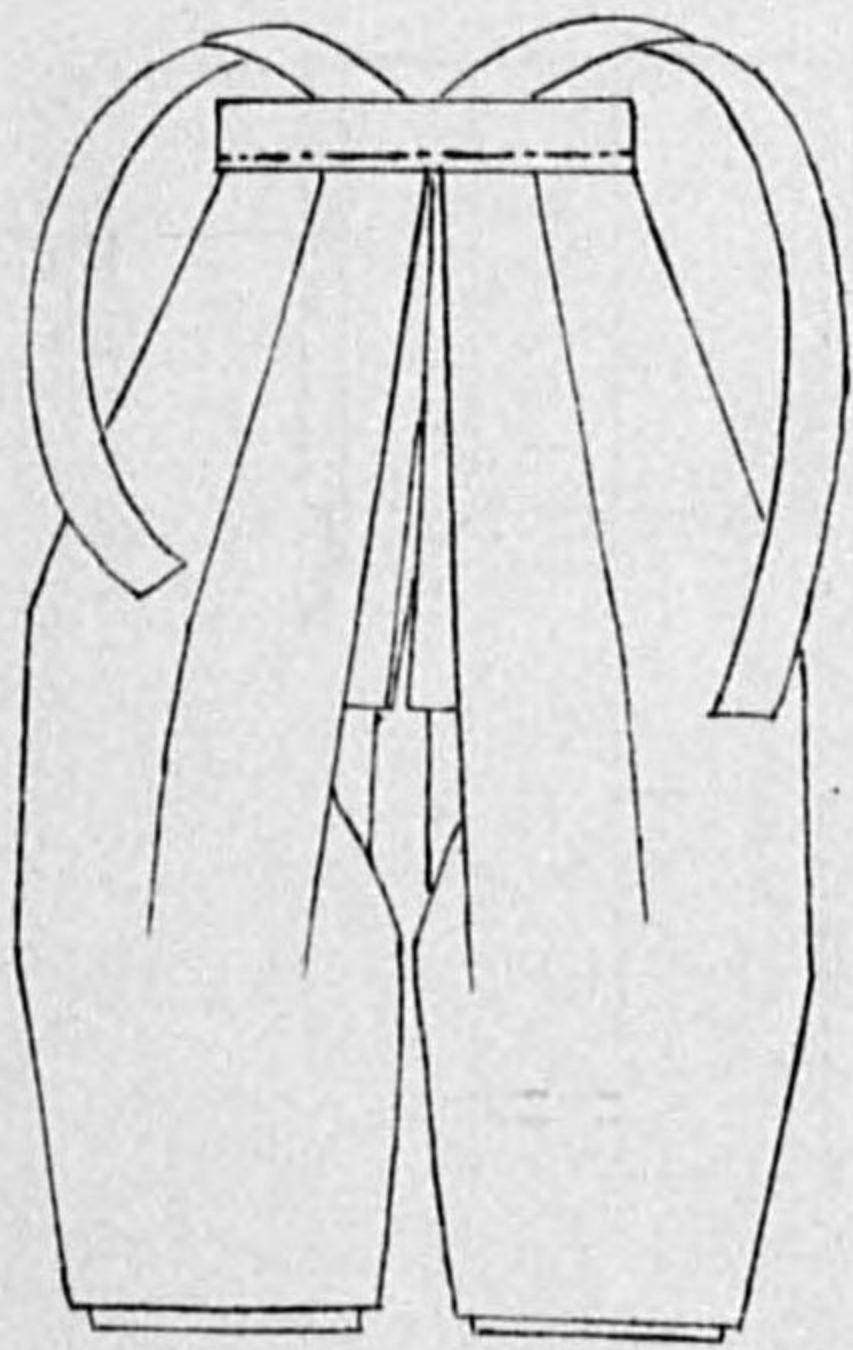
花押

前面

表紐共白裏紅トゲ糸白



後面

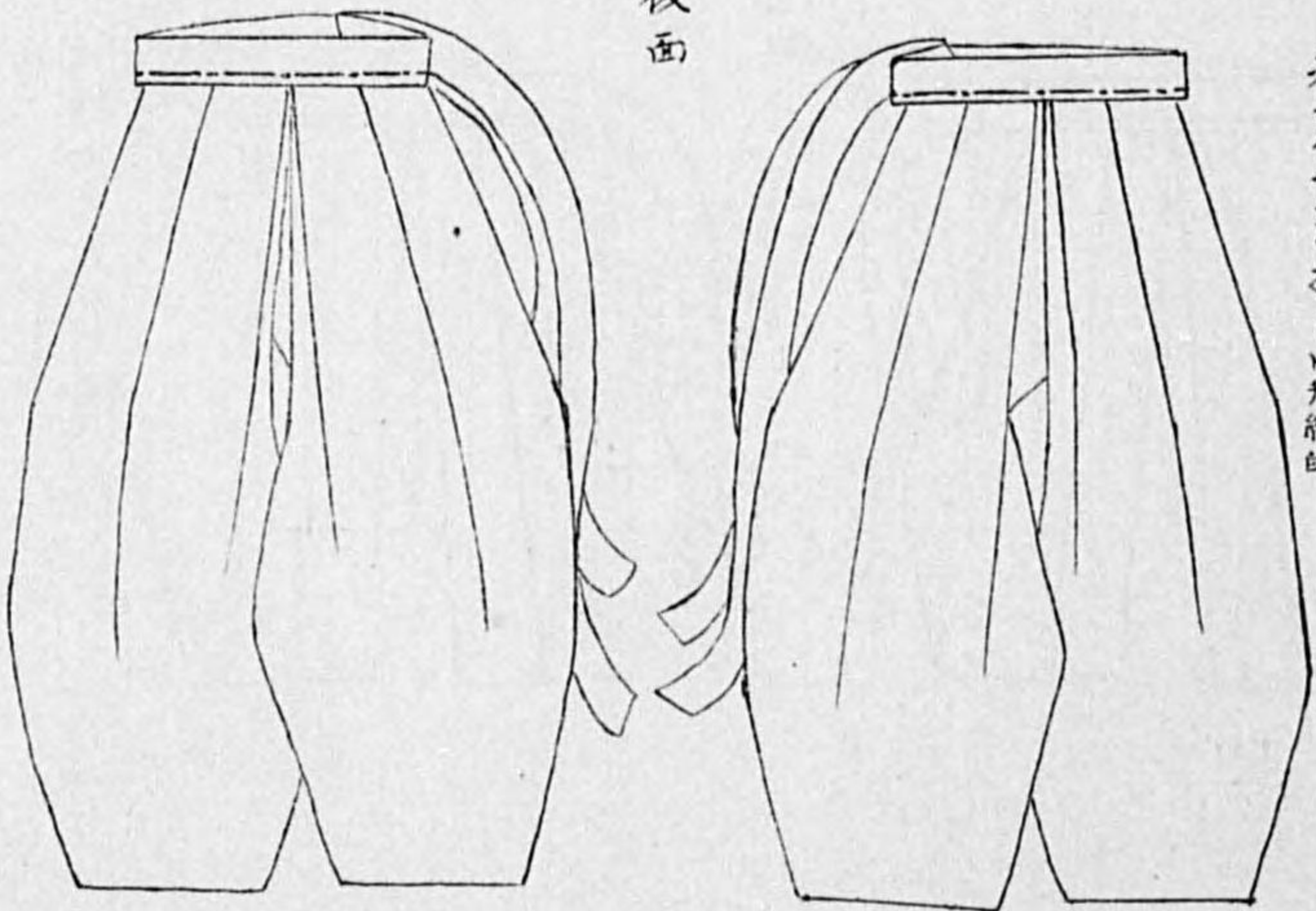


延喜式ニ是ヲ中袴ト云、今ハ誤チテ大口袴ト云、大口ハ袴ノ口闊キ故ニ、古ヘ大口ノ名アリ、今其實存スル物、能狂言ノ大口也、中袴ハ袷ニテ、極寒ノ時表袴ノ下ヘ著ス、今ノ下衣ヲ用ルモ同シ、神祇式ニハ下裙一腰表裏別布三丈腰料一丈

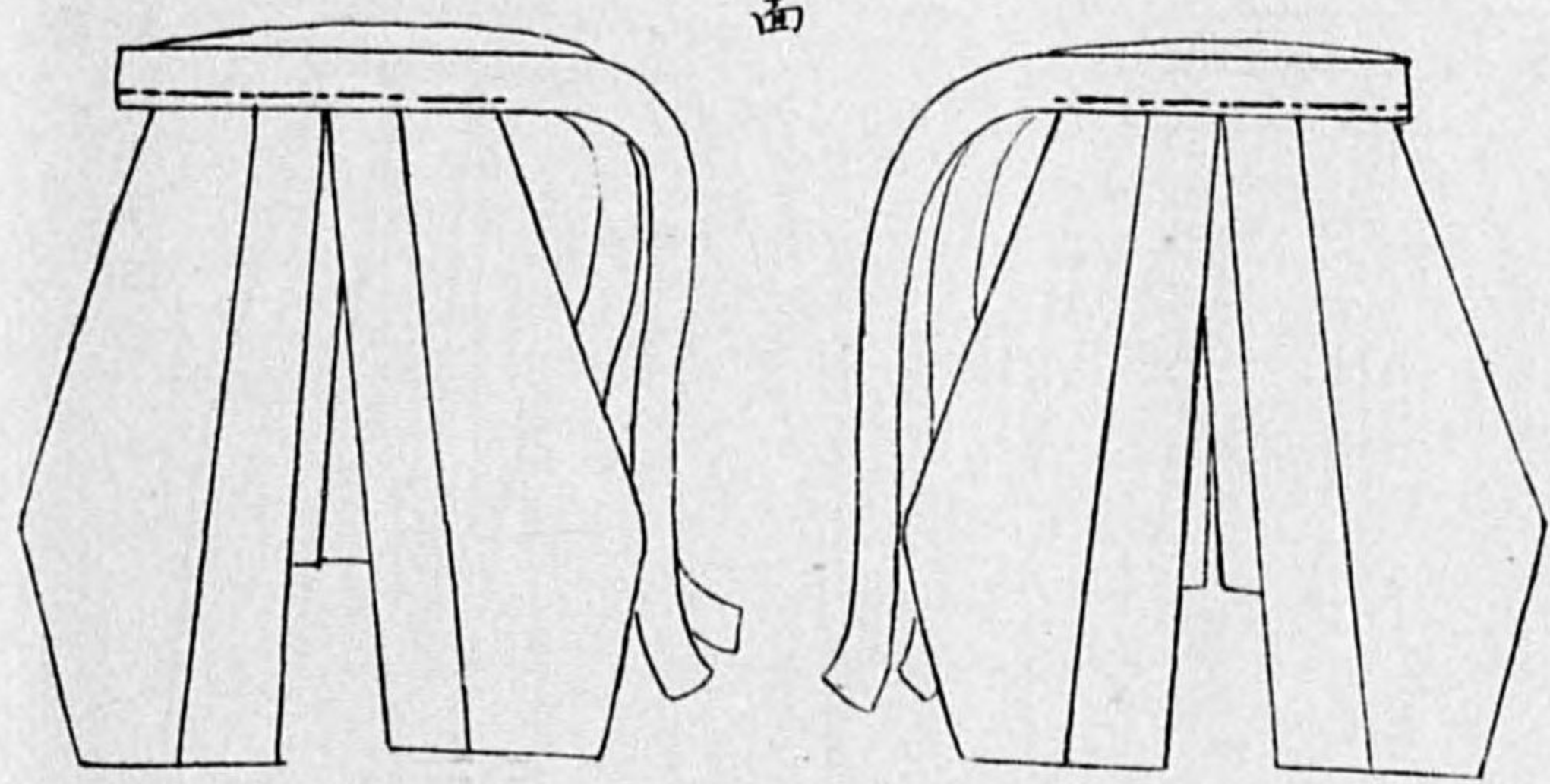
前面

表裏共薄桃色中ノ二チ赤トチ糸白

後面



前面
表紐共赤裏白、糸白



古へ是ヲ禪ト云、丈ノ短キヲ小禪ト云、今ハ誤テ半大口ト云、是下袴也、單へニテ造ル、是今ノ下帶ト云處也、長キハ一尺八寸、短キハ一尺、夏冬用ル、

慶應四年夏自造

皇都 蟻 川 花押

後面

大口袴

義經袴、信玄袴ト云物ヲ見ルニ、此四五年前ニハ、此袴ノ縮ノ如シ、前後巾四巾也、縮ノ下ノヲクビヲ入レタルモアリ、元來、日本ノ古制ハ表袴ナリ、紐一筋ニテハ、人々ニ緒ノ付方替レリ、亦同人ト云へ共、夜ノ重衣ニテ、替レルヨリ便利ヲ主トシテ、常ニハ、袴ノ紐前後二筋ニ制ノ出來シト思ワレ、是今ノ神事ノ時ノ摺袴ヲ以テ證トス、裾モ表袴ト同シク、裏ヲ一寸表へハミ出タシ、是へ小紐ヲ入レテ下括トス、口ノ闊サ今ハ七寸五分、甚古體成ル明也、ワキ付モ絲ニテカマレリ、是ハ表袴ノワキ付ノ上ワキアケノ堺成處少シカガレリ、是ニ習ヒ候物ト思ワル、表ノ袴ノワキノ如ク成ルカ古制也、
表袴ノ亂レ縮ヨリ習ヒシ物也、此マチハ足ノ内モ、スレ候ヨリ、角縮出來候ト存ラレ候、是モ縮下切レノ引カレシ處有ルヨリ、今ノ縮百年前ヨリ新タニ制ノ出來シ事也、著用ノヨキコトハ、當今縮宜敷候、古へノ通太刀短刀ノ時ハ、前後同寸ニテ著用宜敷候へ共、當今ノ大小ヲ差ス時ニハ、今ノ袴ノ通り後ノ長キガ便利也、後ノサガルコト無シ、依テ此へンヲ折中仕リ度コト也。

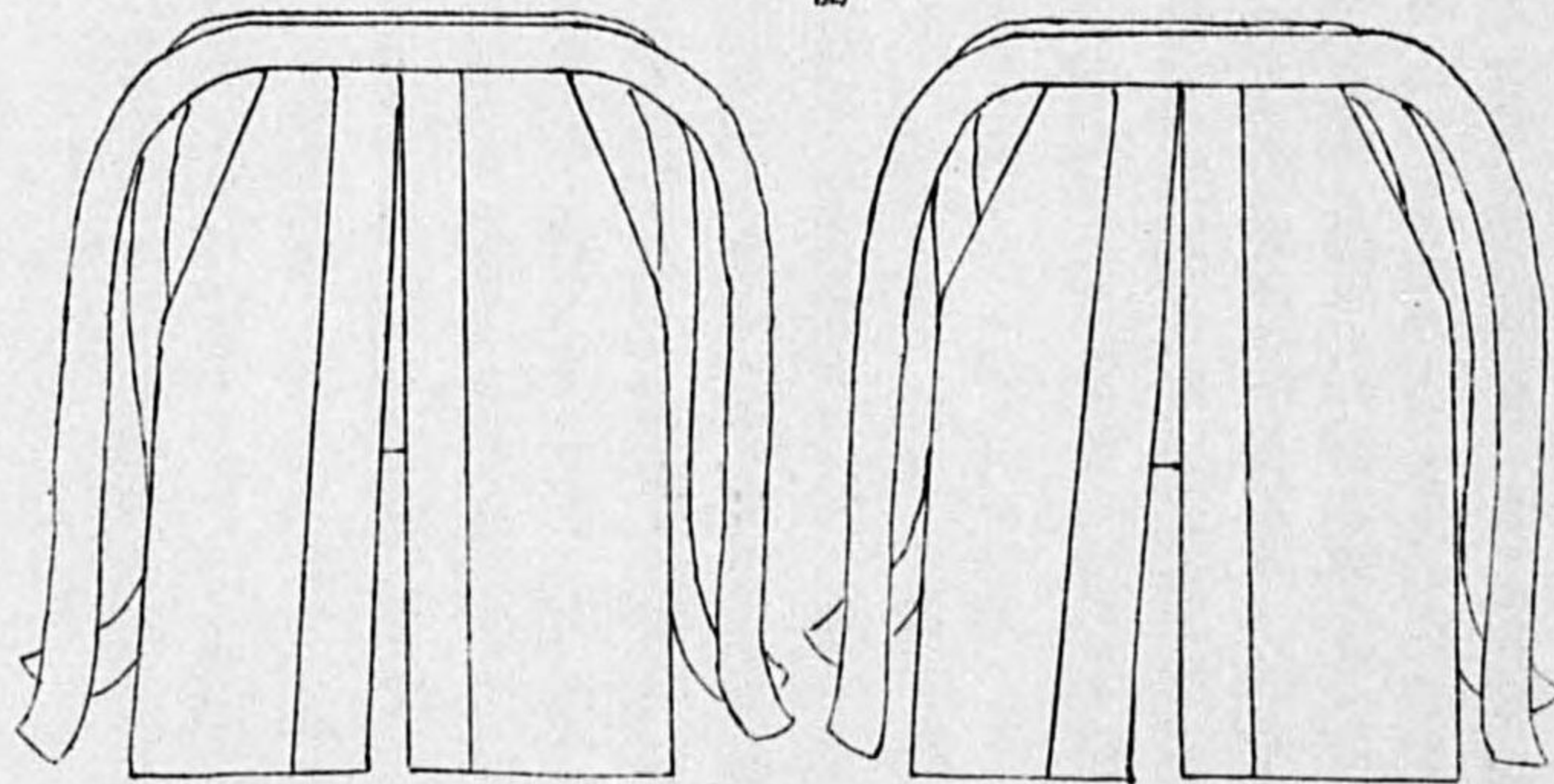
慶應四年秋自造

東寺 蟻 川 花押

制度事務局叢書

前面

表裏共白紐白、糸白



後面

○印度之釋迦ハ登ルヘキ王位ヲ棄捨シ、瓔珞細ウツクシキカウリ襖ノ衣ヲ捨テ、道路ニ落タル糞掃物カスレヌテタルノ小切ヲ拾ヒ、垢穢ヲ洗ヒ濯キテモ、五色ノ殘レルヲ人ノ執著センコトモ難計トヤ思ワレテ、何共知レヌ濁レル染汁ヲ造リ、其染汁ヲ袈裟ト名ツケ、右ノ拾ヒ集メタル小切ヲ染ナシ、是ヲ縫綴リ衣服トナシ、則身ニマトヒテ寒暑ヲ凌キ、且又自ラ其身ヲ降シ、鉢ヲ持テ人ノ餘セル食ヲ乞テ身ヲ養ヒ、朱砂ニ塗レル殿屋ヲ立出テ林下ニ身ヲ安シ、天地ノ理ヲ考ヘ、自ラ教道ヲ建テ、偏ク國中ニ弘通シ、遂ニ我 本朝ニ及ヘリ、方今ノ僧侶ハ其遺教ニウツクシテ、錦繡綾羅ヲ身ニ著シ、慈悲哀愍ノ心モナク、釋迦ノ行業ニ違ヘリ、カ、ル復古ノ折柄ニ御座候ヘハ、右美麗ノ袈裟衣等總テ著用不仕様ニ被止、夏ハ鼠色ノ麻、冬ハ鼠色ノ木綿ニ被定度旨申候學僧兩三人モ有之申候、亦西洋ニテ佛教ヲ學フ輩ハ、其國々ノ衣服ヲ用ヒテ、佛國ノ衣服ハ一節禁制ニテ、心計リヲ移シ、我國體ノ風儀ノ替ヲ事ヲ主ト致シ候趣 本朝ニテモ袈裟ヲ被止テ 我國ノ服ヲ著用サセラレ度旨、或外國學者申聞候、何レモ尤ナル申分ニ御座候、此度禮服 御制度之折柄故乍序奉言上候、恐惶敬白。

四月

蜷川 圖 書

制度事務局叢書

○小河一敏履歷書ニ云、二月廿五日、衣服制度取調掛被仰付、又本人手記ニ云、戊辰ノ春出京ノ砌、衣服制度ノ事、兩總裁ヘ御直面ニテ申述候處、右取調掛被仰付、相掛ハ井上石見、平田大角、蜷川圖書、山田阿波介其餘モ有之候歟、譜記セス、其後追々取調上申候ヘトモ、御採用御施行不相成、己巳之年官制改正之際、右御用掛モ被廢候、但シ取調ノ大略ハ、袍ノ古制ト近制トヲ折衷シテ禮服トシ、狩衣直垂等ヲ折衷シ袖ヲ細クシテ通常ノ禮服トシ、羽織袴ノ袖ト裾トヲ細クシテ平服トスル等ナリ。

○案スルニ、孝弟等モ、取調掛ヲ命セラレテ建議セシナルヘシ、然ルニ、別ニ見ル所ナキヲ以テ月未ニ收ム。

○毛利廣封、書ヲ上リ、癸丑以來外交論ノ沿革得失ヲ陳シ、一定ノ國是ヲ守リ、萬國ト竝立セ

ンコトヲ請フ。

臣廣封謹テ奉言上候、先般、越前宰相一同建言之儀、癸丑已降、天下之勢屢變遷、遂ニ今日之御時體ト相成候テハ、目下之御處置、右建言之處ニ著落仕候外無御坐ト奉存、連署奉言上候、抑既往ヲ推究仕候處、幕府一旦其術ヲ失ヒ候テヨリ、御國是屢變換開鎖之論一定不仕、天下是カ爲ニ肝腦塗地候者不可枚舉悲歎之至ニ奉存候、然處、臣廣封父子追々陳述仕候通、癸丑已來、偏ニ 皇威御更張、國是御一定ヲ奉企望、只管 叙慮ニ奉基、名義條理相立候様ニト、不顧微力、藩屏之任一途心懸罷在候内、戊午下田條約被差許候ニ付テハ、即チ開國ニ御一定ト奉存、一藩方向相立居候處、壬戌ニ至リ、父子上京親ク奉伺候得ハ、和宮御東下一條ヲ奉始 叙旨專ラ鎖國ニ被爲在候御事奉拜承、殊ニ癸亥ニ至リ、大樹家上洛、奉 勅攘斥之布告相成候ニ付、彌以艱難危急ハ臣子之分ニ付 天恩之萬一ヲ奉報度ト決心仕、人民ヲ鼓舞激勵シ、身ヲ以テ自先シ候處、臣廣封父子之微誠貫徹不仕、遂ニ孤立之姿ト相成 闕下ニ拜趨テ不得仕次第ニ立至リ候得共、元來、臣廣封父子進退趨舍一己私見ニ出候儀毫釐モ無之、偏ニ 叙慮遵奉之心得ニ御坐候處、幕府布令前後齟齬ヨリシテ、御國是從テ變換シ、臣廣封父子禍難ニ陷溺仕候様相成、此餘ハ社稷ト共ニ灰滅仕候外無之ト覺悟罷在候處、乾綱新張、今日之 御盛時ニ遭遇シ、再生之鴻恩ヲ奉蒙感泣之至ニ奉存候、然處、四境閉塞以來、國外之情態甚迂濶ニ打過候得共、外國交際之儀其他種々被爲盡 廷議候御様子略傳承仕リ、今般上京、親シク先年來之御行懸等精細相窺候得ハ、既ニ開港 勅許海外各國ヘ御布告被爲有、既ニ御國是御確定、開國之御規模被爲立候御儀、續テ 王政御一新萬機 御親裁之秋ト相成候、付テハ内外之形勢前日之比ニ無之、即チ國家之御安危 皇威之御隆替、辱クモ 御聖德ニ關係仕、今後之御舉措最重大之儀ト奉存候ニ付、外國御交際ハ、宇内公義之係ル所、內國一家之紛擾ヲ以、宇内之公義ヲ害シ候様ニテハ、萬國ニ對シ可愧儀ニ御坐候間、乍恐 神武之御聖業ヲ 御禮認被爲遊、專ラ天下之耳目ヲ一新シ、人心之方嚮ヲ相定メ、確乎不拔之 聖斷ヲ以テ、天下ニ 臨御被爲遊、外ハ宇内萬國ニ竝立シテ不被爲愧、内ハ 列聖之神靈ニ被爲對 御遺憾無之様不堪懇願之至、誠恐誠惶頓首謹言。

二月

長門 少將

内國事務局叢書
毛利元徳家記

○叢書、元徳家記、竝ニ日ヲ失ス、加藤明實家記晦日ノ條ニ云、去廿七日、太政官代ヨリ松浦肥前守御呼出ニテ、別紙長州建白書寫一通被相渡候趣、京極佐渡守ヨリ廻達有之ト、之ニ據レハ、其上書セシハ、蓋シ二十七日以前ニアリ。

○土佐藩土石田忠郷^英等、書ヲ上リ、鹽飽、小豆二島^{並ニ讃岐ニ屬ス}鎮撫ノ狀ヲ陳シ、朝命ヲ得テ之ヲ管守シ、且伊豆、佐渡ノ諸島ヲ安輯センコトヲ請フ。

微賤之私共

不願恐謹テ奉願候、今般 大政御一新御仁徳被爲施 皇國無罪之域ニ被遊候 御仁意、於私共モ深奉感戴候、就テハ徳川支配之島々、元來貧地ニテ、生活之爲ニ而已終身日夜困苦罷在候上、徳川之暴政苛酷ニ苦ミ難澁仕候儀見聞仕、實ニ嘆敷奉存候、既ニ先達テ、四國近海鹽飽七島之居民、私怨ニ依テ紛擾争鬪及、民家ヲ放火シ、即死怪我人夥敷有之、打捨置候ハ、如何成行候モ難計、早速同所へ罷越、惡徒ヲ捕、窮民ヲ救、人心鎮定致候段、於播州、四條殿下へ御達申上候通ニ御坐候、鹽飽スラ如此ニ御坐候得ハ、況テ佐渡ヶ島、新島、三宅島、八丈島ハ流人モ多ク罷在、兼テ人氣モ不穩、此節柄別テ貧窮ニ迫リ擾亂仕候儀、眼前ニ御坐候間、此度 御仁政之趣拜承爲仕候ハ、如解倒懸奉存感泣ニ不堪儀必然ニ御坐候、私共、先年有故テ彼地へ罷越、土風民情モ相辨罷在候間、島々へ渡リ 御仁政之難有御趣意ヲ速ニ布告仕、窮民ヲ救、暴惡ヲ禁、民心ヲ鎮定仕、厚キ御趣意爲奉感佩度、且又島々ニ徳川之命ヲ受、航海術習練致候者モ有之候間、猶以來屈強之者ヲ撰ミ、傳習爲致、追々海軍へ御收用被仰付候ハ、兵備充實 御國威皇張被遊候基トモ相成可申ト奉存候、即今逆徒御征伐萬民塗炭之苦ヲ被爲救候ニ付、一方御心配被遊候折柄、微賤之私共ト雖、一日片時モ束手安居罷在候儀、誠ニ以恐多奉存、單思盡力忠誠ヲ抽、御國恩萬分之一ヲモ奉報度赤心ニ御坐候間、右島々取締被 仰付被下候様奉懇願候、誠惶謹言

土州海援隊

辰二月

石田英吉

長岡謙吉

勝間桂三郎

島田源八郎

佐々木多門

石田英吉
長岡謙吉
勝間桂三郎
島田源八郎
佐々木多門

參與

御役所

内國事務局叢書

○先般、鹽飽七島之居民紛擾仕候ニ付、私共鎮撫致候儀、播州ニオイテ 四條殿下へ御届仕置候、右居民 朝廷之海軍へ御收用被遊被下度段奉願置候處、讃岐國小豆島モ鹽飽同様鎮撫仕罷在候間、右兩島共鎮撫之 命令被下置候様奉願候、以上。

土州海援隊

辰二月

長岡謙吉

石田英吉

石田英吉

參與

御役所

內國事務局叢書

○二書上申ノ日、及ヒ批紙詳ナラス、案スルニ、本月九日、備前藩鹽飽、小豆島等ヲ土佐藩ニ交付スルノ上申書アリ、云、土州ヨリ掛合有之、右三島ノ儀ハ土佐守取調所ニ付、同藩へ受取申度由ニ候間、夫々引渡シ仕候ト、此文ニ據レハ當時未タ朝廷ヨリ判然取締ノ命アラサリシニ似タリ、伊豆、佐渡ニ島ノ如キハ別ニ見ル所ナシ。

○本多忠鵬、病ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシメ、本田忠鵬家記前田利同モ亦老臣ヲシテ兵ヲ率テ京ニ至ラシム、

私儀今度 御沙汰之趣ニ付、人數召連上京可仕處、先達テ御届申上候通、持病之痔疾不相勝候ニ付、先重臣へ人數相添、上京申付心得ニ御座候處、少々宛快方ニ趣候ニ付、押テ在所出立可仕、且既ニ用意向相務候程之族言ナリ、ニ付、重臣爲指登候之儀相控候處、又々前症再發仕、何分旅行難相成、發途延引罷成深ク奉恐入候、先重臣へ人數相添爲指登申候、相應之御用被 仰付被下候様奉願候、勿論少モ快方之上ハ速ニ上京可仕候、何卒前條之次第厚 御憐察、方今上京延引之儀御猶豫被成下候之様奉願候、以上。

二月

前田 稠松

前田利同家記

一 壹人 家老

一 貳人 隊長

一 壹人 司令師

一 貳人 番頭

一 貳人 軍目

一五拾三人 戰士
一五拾人 兵糧方

一八拾五人 銃隊

一拾三人 右附屬打方

一三挺 大砲

一拾人 右附屬打方

右上京人數如斯御座候、以上。

二月

前田稠松内

磯野新九郎

前田利同家記

復古記 卷四十一 終

總閱

一等編修官 臣長 松 幹

纂修兼校勘

一等編修官 臣長 茨

四等編修官 臣四 屋 恒 之

原纂

十二等出仕 臣石 津 發 三 郎

校錄

六等掌記 臣澤 渡 廣 孝

八等掌記 臣 松浦辰男
 繕寫
 一等繕寫 臣 小川長和
 二等繕寫 臣 小島春
 二等繕寫 臣 藤園賢意

復古記 卷四十二

明治元年戊辰三月朔日ニ起リ三日ニ至ル

○三月

朔日、鍋島齊正ヲ以テ議定ト爲シ、史官毛受洪及ヒ長岡護美ヲ參與ト爲シ、參與田中輔、坊城俊章及ヒ洪ヲ以テ辨事ヲ兼シメ、參與荒川良知ヲ罷ム、尋テ齊正、護美ニ軍防事務局輔ヲ兼シム。

議定職被 仰出候事。

三月

肥前前中將

官中
鍋島直正事蹟記

徵士參與職辨事被 仰付候事。

慶應四年辰三月

總裁 朱印

毛受鹿之助

職務進退
毛受洪履歷書

長岡良之助

參與職被 仰付候事。

六二八
辦事局叢書
細川護久家記

各通

坊城侍從
田中國之輔

參與辨事被 仰出候事。

慶應四年辰三月

總裁 朱印

坊務進退履歷書
坊城俊章履歷書

○輔ノ宣旨ハ、參與ノ上、徴士ノ字アリ。

荒川甚作

官中日記
德川義宜家記

參與職被 免候事。

○附二月二十六日申請書

謹テ奉言上候、弊臣荒川甚作事 先般參與職奉 命罷在候處、先頃ヨリ病氣不相勝、急速全愈可仕様體無御座候付、方今之御時勢、出勤遷延相成候儀ハ恐悚之至候間、右職 御免被成下候様仕度、付テハ右跡撰擢仕候處、弊臣中村修之進事同様之者ニ御座候付、替トシテ奉職候様仕度、此段奉伏願候、誠惶誠恐頓首敬白。

二月

大納言慶勝上

內國事務局叢書

○二日達書

肥前前中將

議定職軍防事務局輔被 仰付候事。

慶應四年辰三月

總裁 朱印

官中日記
鍋島直正事蹟記

○同上

長岡良之助

參與職軍防事務局輔被 仰付候事。

慶應四年辰三月

總裁 朱印

○暗殺ノ禁ヲ申ス。

○附護久家譜ニ云、三月二日、護美軍防事務局輔拜命、且是マテ精勤格別ノ 思召ヲ以テ、左京亮從五位下ニ任叙セラル。

近來於所々暗殺之者有之候、付テハ一同布告ニモ及置候得トモ、今以相止不申、重疊難相濟次第ニ付、彌以嚴重取締方被仰付答ニ候、於諸藩右様心得違之者ハ有之間敷候得共、即今何方モ大勢詰込居候儀ニ付、精々糺方行届候様被 仰付候事。

三月一日

本文取締方之儀ハ、裁判所へモ被 仰付置候付、承合取計可被申候事。

刑法局

別本官中日記
毛利元徳家記

○加藤明實、扈蹕中錦旗ノ守衛ヲ罷メント請フ、是日、伊東長壽ヲ以テ之ニ代へ、赤穂藩ノ姫路守兵ヲ罷ム、柳澤保申、大阪ニ赴キテ、安治川口ノ守兵ヲ督セント請ヒ、他田政禮、疾ヲ以テ歸藩セント請フ、竝ニ之ヲ聽ス。政禮明日、途ニ上ル、

今般 御出輦ニ付 内侍所御守衛供奉被 仰付候ニ付テハ、兼テ弊藩へ御預相成候日之御門 御旗、能登守留守中之處、
外方へ御預相成候様此段奉願上候、以上。

二月晦日

加藤能登守家來

西村均兵衛

加藤明實家記

○ 日之御門 御旗御守衛被 免候事。

加藤能登守へ

加藤明實家記

○ 日之御門 御旗御守衛被 仰付候事。

伊藤播磨守へ

伊東長壽家記

森美作守

右姫路表人數差出長陣ニ相成候條、早速引取休息可致旨 御沙汰候事。

三月朔日

森忠儀家記

○ 攝州安治川口御警衛、兼テ被 仰付置候處、今般 御親征、來ル五日 御出輦被 仰出候ニ付、私儀出坂仕、御警衛向尙又
嚴重申付度、且時々奉窺 天機度奉存候ニ付、暫滯坂仕度此段奉伺候、以上。

三月朔日

柳澤甲斐守

○ 批紙

可爲窺之通事。

柳澤保申家記

○ 私儀追々御届申上候通、病症ニテ永々引籠居奉恐入候、精々治療相盡候得共、逆モ急々快復難仕旨、衆醫申聞候、就テハ至
テ少人數ニ御坐候得共、家來之者殘置、一ト先歸邑仕療養相加度奉存候、御時節柄甚以奉恐入候得共、前條之次第御憐察被
成下、御暇被下候様可然御執成モ被下候ハ、難有仕合ニ奉存候、此段御内慮奉願上候、以上。

二月廿九日

池田丹波守

辨事局記

○ 本日批紙

病氣ニ付内願之通御暇賜候事。

池田政禮家記

○ 興福寺學侶、書ヲ行幸奉行坊城俊政ニ上リ、使役ニ供センコトヲ請フ、是日、命シテ御服櫃
ヲ護衛セシム。

○ 二月二十四日申請書

口上書

今般 御親征被 仰出、不日 行幸可被爲 在之旨奉拜承候、不取敢、乍恐 天氣御機嫌奉窺上候、就テハ微力之義ニ候
得共、相應之御用向何卒被 仰付候様奉願上候、此段宜御聞濟之程伏テ奉願上候、以上。

二月

興福寺

學侶 中

御奉行

坊城頭右中辨殿

興福寺記

○興福寺記ニ云、過日相願候ニ付、行幸、御親服御韓櫃御守衛之義、興福寺へ被、仰付之旨、三月朔日、坊城頭辨殿ヨリ御達有之、勘解由小路へ供奉人數書差上候事。

○軍防事務局督嘉彰親王、昨日ノ變、親兵ニ出テシヲ以テ、書ヲ上リ罪ヲ乞フ。

御親兵中、昨三十日、不都合之儀出來、全ク嘉彰始不行届恐入候、仍テ奉待、御沙汰候事。

三月一日

軍防局

官中日記

總裁局

○批紙ヲ供ス、案スルニ、三枝翁、朱雀操、嘗テ鷲尾隆聚ニ從フ、二月二十七日、隆聚所部ノ兵ヲ親兵ト爲スニ及ヒ、二人モ亦其中ニ在リ。

○池田茂政、播磨、美作、備中諸藩以下歸順ノ狀ヲ奏ス。

一 播磨	丹波長門守	證書	一通	目録	一通
一 同國	一 柳對馬守	證書	一通	添書	一通
一 同國	小笠原幸松丸	領地目録	一通	領地目録	一通
一 同國	池田彈正	證書	一通	領地目録	一通
一 同國	池田右近將監	證書	一通	領地目録	一通
一 同國	池田保之助	添書	一通	領地目録	一通
一 同國	松平備中守	證書	一通	領地目録	一通
一 同國	松平信濃守	證書	一通	領地目録	一通

一 同國	池田鎗三郎	添書	一通	領地目録	一通
一 同國	八木但馬守	證書	一通		
一 同國	本徳寺	書付	五通	朱印寫	一通
一 美作	土井大炊頭	證書	一通	同領内延生寺朱印寫	一通
一 同國	土屋采女正	證書	一通	高人別帳	一通
一 同國	土岐隼人正	證書	一通	高人別書	一通
一 同國	内藤金一郎	證書	一通	高人別書	一通
一 備中	花房近江守	證書	一通	高物成書	一通
一 同國	池田福次郎	證書	一通		
一 同國	吉備津社家 藤井權頭	證書	一通	高物成書	一通
				款願書	一通
				朱印寫	一通
				物成書	一通

二月

備前少將

○證書、領地目録類、章政家記之ヲ戴セス、三草藩士ノ申請書ハ、丹羽氏中家記ニ據リ、左ニ補録ス、案スルニ、此時氏中江戸ニ在リ、家臣ノ藩ニアリシモノ此事ヲ申請セシナリ。

口上

私共儀、去ル廿一日、以制紙御請書奉差上候通、勤 王之外別心無御座一同承服仕候、右ニ付、不取敢、纜之人數ニテモ差出可申管之處、何分陣屋住人少之儀ニテ奉恐入候、右等之處御差合被成下候様仕度、依之、聊之品ニ御座候得共 王師御用途之内へ御差加被成下候ハ、雖有仕合奉存候、以上。

慶應四戊辰年正月

丹羽長門守内
播州三草

雄城紋右衛門
雄城左太郎
上田角太夫
山本覺兵衛
植山又十郎

○別紙

目錄

一米百俵 一炭貳百五拾俵

以上

○三月五日批紙

獻納之品不被爲請、長門守上京歸順之實効相立候様可致盡力候事。

○氏中家記ニ云、備前藩へ差出候口上書へ、御附紙有之、辨事傳達所ヨリ下ル。

丹羽氏中家記

○鍋島直彬京ニ至ル、板倉勝己、疾ヲ以テ老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。鍋島直彬、板倉勝己家記

○東山道先鋒總督岩倉具定、下諏訪驛信濃ニ抵ル。東山道總督府日記

二日、車駕啓行ノ期ヲ延フルヲ布告ス。

來五日 御親征 行幸御延引、日限追テ被 仰出候事。

三月 二日

有栖川宮家記
毛利元德家記

○參與久保田秀雄ヲ罷ム。

○久保田秀雄履歷書ニ云、戊辰三月二日參與職被免。

○英國公使明日參朝スルヲ以テ、薩摩、紀伊以下諸藩ニ命シテ、禁門及ヒ道路ヲ警守セシム、

明三日、英國公使參 朝被 仰付候條、此内以來度々被 仰出之旨、更ニ左之件々等篤度相心得、彌以不取締無之様可致嚴重 御沙汰候事、

一 公使旅宿知恩院新門前通、繩手通、三條通、堺町通行之事、

一 往來筋、巳之刻ヨリ旅宿へ引取迄諸人通行留之事、

但左右横道木戸締切之事、

一 往來筋住居町家其外共家子召仕之外、他人一切滯留被差留候事、

但諸藩士等、兼テ止宿之者ハ格別ニ候得共、萬一其者共致暴行候節ハ、其主人之落度ニモ被 仰付候條、於引請精々可致吟味候事、

一同斷住居之者 公用ハ勿論私用タリ共、難差延用向出來、他へ往來之節ハ、町役方其他向々へ申出、免許ヲ請ケ可致通行事、

但脇方ヨリ、前文居住之者へ同斷之節ハ、木戸木戸守衛之藩々へ相達免許ヲ請ケ、同斷、尤總テ用辨之事ニ付、多人數通行ハ不相成候事、右之通宜可相心得候事、

三月

毛利元徳家記
官中日記

各通

薩州 藝州 長州

明三日午刻、英國公使參 内ニ付、日御門内外警固可致旨 御沙汰候事。

三月二日

島津忠義、淺野長
勳、毛利元徳家記

○日御門内外、藝藩ハ月華門外ニ作り、長藩ハ日華門外ニ作ル。

右境町御門内ヨリ日御門迄、

紀伊中納言

右英國公使參 朝當日、往來筋前書之通、藩々引請更ニ被 仰出候條、一手持ハ格別、相持之部ハ申談、兼テ 御沙汰之旨、篤ト相心得嚴重取締可致候事。

三月

徳川茂承家記

○案スルニ、書中所謂前書ノ通云々ニ據レハ、紀伊一藩ニ達セシモノニ非サルニ似タリ、蓋シ一藩數藩ニ通シテ之ヲ用ヒシナラン。

本莊伯耆守
京極飛驒守
木下備中守
加藤出雲守

右、境町南詰ヨリ日御門迄、

右、英國公使參 内當日、往來筋前書之通、藩々引請更ニ被 仰出候條、一手持ハ格別、相持之部ハ申談、兼テ 御沙汰之旨、篤ト相心得嚴重取締可致候事。

三月

内閣事務局叢書
京極高厚家記

池田丹波守
池田相模守

右、知恩院新門前通繩手通角迄、

右、英國公使參 朝、往來筋前書之通、藩々引請更ニ被 仰出候條、一手持ハ格別、相持之部ハ申談、兼テ 御沙汰之旨、篤ト相心得嚴重取締可致候事。

三月

池田徳定家記

○前田利惣家記ニ云、三月三日、英國公使參朝ニ付、御警衛持場嚴重取締被仰渡相勤。

○内閣事務局叢書中、加賀、白杵二藩、本日公使參朝警衛奉命ノ請書アリ、而シテ達書見ル所ナシ。

○立花種恭、藩兵ヲ以テ宗家ノ隊伍ニ附シ、征役ニ從ハント請フ、之ヲ聽ス。

今般官軍 御東下ニ付テハ、出雲守ヘモ御陣ヘ參集仕候様、蒙 御沙汰難有仕合奉存候、就テハ速ニ一應 御下知此所恐アシ、可申管之處、弊家之義ハ右様出陣等之節ハ、往古ヨリ、同姓立花飛彈守、備之内ヘ相加リ同様出勢仕來候家筋ニ御座候ヘハ、於當時モ舊來之通、一同出勢之義奉願候、然ル上ハ、出雲守當今之應分限御奉公相勤度志願ニ御座候、若別段之人數出シ被 仰付候テモ、領知替以來、小高之家來共四方ニ散在相成居候ヘハ、假令出勢仕候テモ、實備之御用辨ハ進モ難相立ニ付、何卒御賢察被成下、前顯之通被 仰付被下候様、宜御執奏奉願候、以上。

立花出雲守内

庵原覺兵衛

辰二月廿八日

辨事

御役所

立花種恭家記

○種恭家記ニ云、右願書三月二日辨事御役所ヨリ御呼出ニテ願之通被仰出候事。

○九鬼隆義、疾ニ罹リ、入覲スルコト能ハサルヲ以テ、米ヲ獻シテ、軍資ニ供セント請フ、之ヲ聽ス。

○朔日申請書

今般爲 御親征、來ル五日、大坂迄 龍駕ヲ被爲 遷候段被 仰出候、然處、私儀病氣少ニテモ快方候ハ、押テモ馳登相應之御用奉同度志願ニ候得共、何分ニモ兼テ御届申上候通、今以同篇ニテ上京不仕、甚以恐懼殘念之至奉存候、且又先頃攝津國元代官地取締被 仰付、責テハ此儀ナリトモ盡力仕度存居候處、右地之内モ、大坂兵庫表裁判所ニテ御取計相濟候條被 仰出候、左候テハ、假令不快タリトモ、此節柄何之御用ニモ不相立候間、乍聊 御親征御用途萬々分之一端迄ニ、米千石獻上仕度奉存候、葦爾小藩之微忠御憐察被下候得ハ難有仕合奉存候、此段御執 奏之程偏ニ奉願候、以上。

三月

九鬼長門守

九鬼隆義家記

○達書

今度就 御親征行幸、米千石獻上仕度旨神妙之至ニ候、行幸來ル五日御延引候間、上納等之儀ハ追テ

九鬼長門守

御沙汰候事。

三月二日

九鬼隆義家記

○二十二日再達書

書面獻米大坂會計局出張所ヘ相納可申事。

三月

會計裁判所

九鬼隆義家記

○四月八日上申書

記、

米千石 代金三千兩

九鬼隆義家記

右之通上納仕候、以上。

○隆義家記ニ云、三月廿二日御親征ニ付、獻米大坂何ノ地ヘ運送可然哉同上候處、右之通被仰出候ニ付、四月八日大坂會計事務出張所ヘ上納。

○松平定安、失火ノ際、參朝等ノ事宜ヲ稟請ス。

一非常出火之節、公卿御門ヨリ西御唐御門ヘ參入、御假建所ヨリ參 内奉伺 天氣候テ宜御座候哉、

但シ主人著服之儀、自然陣羽織火事裝束ニテ參 内仕、其儘奉伺 天氣候テ不苦儀ニ可有御座哉、尤供之者モ、火事裝

束或胸服裁付相用候テモ不苦候哉、

一右同斷之節、九口御門内馬上不苦事ニ候哉、且供連之内重役等馬上之者、下馬如何相心得宜御座候哉、

但時宜ニヨリ、手廻銃隊等、九門内へ召連候テモ不苦儀ニ御座候哉、

一右同斷之節、九口御門内高張提燈相用宜御座候哉、

但高張ハ、御唐御門外ニ殘シ置候テモ宜御座候哉、

一右同斷、馬上馳付候ニ付、御堂上方へ御行逢申上候共、禮節不仕引取候砌ハ、平月之通相心得候テ宜御座候哉、

但家來馬上之者、自然同様相心得不苦候哉、

一出火之節、参 内可仕御方切、東加茂川、西堀川、南二條、北鞍馬口ト相心得奉窺 天氣候心得ニテ宜御座候哉、

但格別延焼ニ不至、速ニ鎮火ニ相成候得ハ、不及其儀心得ニテ宜御座候哉、

一大地震、大風雷等之節奉伺 天氣候心得ニテ宜御座候哉、

一非常ニ付参 内且退出之節、参與衆へ進退之儀御届申上候テ宜御座候哉、

右之廉々、豫奉伺、兼テ御差圖奉願置候様申付之候、以上。

出雲少將留守居
津川六郎右衛門

三月

○批紙

第一條 伺之通ニテ宜候、

第二條 主人ハ九門内乘込不苦候、重役ハ九門外ニテ下馬之事、銃隊ハ九門外ニ可留置候事、

第三、第四、第五、第六條 伺之通ニテ宜候、

第七條 進退之儀、林和靖間詰へ可被届候事。

辨事局記

○奥羽鎮撫總督九條道孝、副總督澤爲量、京師ヲ發ス、仙臺、薩摩、筑前、長門四藩兵之ニ屬シ、天童藩之方前導タリ、紀伊、安藝、筑前、出雲四藩ヲシテ汽船ヲ出サシム。

○九條道孝事蹟ニ云、三月二日京師進發下阪、同月十一日天保山沖乗船。

○二月十三日達書

仙臺 中將

仙臺藩記

今般、奥羽鎮撫使爲警衛、其藩詰合之兵隊百人附添被 仰付候事。

筑前 宰相

右、今般奥羽鎮撫使守衛被 仰付候條、銃隊二百人附屬致シ候様 御沙汰候事。

二月廿四日

黒田長知家記

但、日限之儀ハ追テ可相達候。

○案スルニ、家記ニ、二十八日ニ至リ、百人ヲ減スルノ再命アリ、下條所謂百五十餘人ハ、夫卒ヲ併セテ之ヲ算セシナリ。

薩州

右、奥羽鎮撫使、三月一日發途相成候ニ付、銃隊百人附屬致候様可致旨 御沙汰候事。

二月廿七日

島津忠義家記

長州

復古記 卷四十二 明治元年三月二日

六四一

右、奥羽爲鎮撫親附之兵引連被差越候條 御沙汰ニ相成候處、御詮議之旨有之、親附之兵召連候儀ハ被差止、尙鎮撫使三月朔日發途相成候ニ付、銃隊百人附屬致候様可致旨 御沙汰候事。

二月廿七日

毛利元徳家記

各通

薩州 長州

奥羽鎮撫副督參謀へ致附屬、大坂ヨリ乘船可致候事。

二月廿七日

島津忠義家記
毛利元徳家記

兼テ勤 王之旨趣被 聞食之處、今度奥羽兩國鎮撫使發向被 仰出候ニ付、右可致先導之旨

織田左近將監
御沙汰候事。

三月二日

官中日記
織田信敏家記

○五日再達書

織田富久之助

此度奥羽先導被 仰付候間、早々出張可致候事。

但、人數百人餘、

三月

軍防局
織田信敏家記

○富久之助ハ左近將監ノ子ナリ、時ニ入觀シテ京師ニアリ。

各通

紀伊中納言
出雲少將

右、今般奥羽鎮撫總督被差下候ニ付、其藩持合之蒸氣艦壹艘御用候條、來廿五日迄、兵庫港へ廻著候様 御沙汰候事。

二月十三日

徳川茂承家記
松平定安家記

但、廻著之上、早々太政官代軍務掛へ届出候様被 仰付候事。

安藝少將

右、今般 御親征ニ付、其藩持之蒸氣船御用相成候間、差出候様被 仰出置候所、奥羽鎮撫使大坂ヨリ御乘船相成候條、日限ハ追テ可申達、其旨相心得候様御沙汰候事。

二月廿五日

淺野長勳家記

三月二日、奥羽鎮撫使京都發途、貳百五拾人計直ニ大坂ヨリ乘船ニ相成候間、其藩蒸氣船早々廻船可有之候様 御沙汰候事。

二月廿九日

淺野長勳家記

但、賄萬端仙臺ヨリ可差出候事。

○黒田長知家記ニ云、三月二日、總督九條左大臣道孝公、副總督澤三将、參謀醍醐少將、奥羽鎮撫トシテ京都ヲ發シ、同十一日、浪華ヲ發纜シ給フ、藩ノ司令大野忠右衛門貞固、軍監杉山新五右衛門友善等百五十人餘、薩長二藩ノ兵ト共ニ其守衛タリ。

○紀伊藩上申書
九條殿、醍醐殿、澤殿御三方トモ、大阪表就御發艦、同所幸橋中納言屋敷へ御立寄之上、同屋敷下ヨリ川船ニ御乘込、於安治川沖ニニツホール蒸氣艦へ御乗移、昨十一日午半刻之頃御出艦相成候旨、同所詰役人共ヨリ申越候、因テ此段奉申上候、以上。

三月十二日

紀伊中納言内

水野 十大夫

内國事務局叢書

○筑前藩申請書

此節 御親征 御用被 仰付候美濃守手船環瀛丸、奥羽鎮撫使 御用ニ御遣方相成候旨、於大阪表、去七日天満町會所ニテ御達ニ相成候旨、同表詰合ノ者ヨリ申越候、然ニ右船ハ、於爰元拜借之儀奉伺 御許容被爲在候儀ニ付、如何之都合ニ御座候哉ト大ニ懸念仕、早速軍務局御懸へ御引合仕候處、大阪表ヨリハ何タル御懸合モ無御座、美濃守人數モ、同様滯阪爲仕置候様御談御座候ニ付、早速大阪詰ノ者へ申遣候得共、右飛脚之者懸違ヒ、又々大阪表ニテ前文御達之末、京都ヨリ御指圖無御座候テハ御請難申上段、一應相伺ヒタル由之處、右ハ彼御方ヨリ御届被爲在候旨、且根元 朝廷御用ニ御遣方相成候儀ニ候得ハ、聊無懸念指出候様トノ御談ニ付、美濃守人數乗セ組、昨十日、鎮撫使御船御一同出船爲仕候段申越候、此段御届仕候、以上。

三月十一日

黑田美濃守内

井上 六之丞

黑田長知家記

○文中、所謂七日ノ達書、家記之ヲ佚ス。

○紀伊藩申請書ニ通

此度被 仰出候紀伊中納言所持之蒸氣船、來ル廿五日迄、兵庫港へ可相廻答ニ御坐候、付テハ船將初航海熟練之者無御坐候付、御人數御乗組之儀ニ付、萬々一之儀等御座候テハ深恐入候付、何卒航海熟練之向御人撰之上、御乗組セ御座候様仕度旨、國許役人共ヨリ申來候付此段奉願上候、已上。

二月廿三日

紀伊中納言内

西 郷 圖 書

中島三郎右衛門

○批紙

急速之儀ニ付、御人無之候間、是迄乗組之人數精撰致爲乗組可差出候事。

徳川茂承家記

○
一 蒸氣船相用候石炭用意無御座候ニ付、兵庫港ニテ御下渡被成下候様奉願候、
一 右へ乗組之者、食料、諸雜費用意可仕哉、御下相成候哉、奉伺候事。

○批紙

第一條 精々其藩ニテ手當可有之候事、

第二條 食料、諸雜費用意可有之候事。

徳川茂承家記

○仙臺藩上申書

今般奥羽爲御鎮撫使 澤三位様 醍醐少將様被遊 御下向候ニ付、爲御警衛人數百人差出候様被仰渡候ニ付、右人數組、左ニ御届申上候、
一 隊長壹人上下七人 一人數取締役壹人上下四人 一 游擊隊貳拾人下六人
但、右貳拾人ハ御駕籠廻リ御守衛仕候、御軍裝之節ハ甲冑著、平日ハ平服ニテ御供爲仕候、

復古記 卷四十二 明治元年三月二日

六四五

- 一 兵器方、勘定方兼役人貳人上下四人
- 一 小銃隊貳隊
- 一 小人目附壹人
- 一 彈藥箱四荷
- 一 旗壹本
- 一 長持貳棹

二月

仙臺中將内
松崎 仲太夫
内國事務局叢書

○本條、上申ノ日ヲ失ス。

○二月十三日出雲藩申請書

今般、奥羽御鎮撫御總督被差下候ニ付、私所持之蒸氣船一艘御用ニ付、來ル廿五日迄ニ、兵庫港へ廻著仕候様 御沙汰之趣難有仕合奉畏候、何卒御用相勤度奉存候得共、蒸氣鑛船適破損所出來、舊冬長崎へ差遣置候處、此節修復出來歸帆之程如何可有御座哉、一應國元相尋不申候テハ、如何様トモ御請難申上、右ハ往返日數モ有之、御日限モ被爲在候儀、甚以心痛至極奉存候、此度之御用途ハ如何體ニモ仕相勤度奉存候得共、右様之次第如何相心得候テ宜有御座哉、有形奉伺候間御差圖奉願候、以上。

二月

出雲 少將

追啓、木船之分ハ先般此表人數糧米爲運轉、敦賀港へ相廻シ歸帆之砌海上ニテ損所出來、宮津港へ乘入修復罷在候處、彼表鎮撫使ヨリ御糺シ之儀有之由ニテ、滯船罷在候様御談相成、當時彼港へ滯船罷在候仕合、尤右木船御糺シ之儀御免ニ相成候テモ、古船殊ニ器械等數々損シ有之、御用立候程千萬無覺束、別テ此度ハ大切之御用途、萬一之儀有之候テハ甚以奉恐入候儀、如何仕候テ宜敷可有御座哉、是亦可然御差圖被下置候様仕度奉存候、以上。

○定安家記ニ云、即日伺書差出候處、廿日、期限後レ候テモ不苦候間、修復出來次第兵庫港へ乘廻候様御差圖有之ト、然

松平定安家記

レトモ鎮撫總督啓行ノ時、修繕未タ成ラスシテ、遂ニ此命ヲ奉スルコト能ハス。

○天童藩申請書二通

今般、奥羽鎮撫使御下向ニ付、兼テ勤 王之趣旨被 聞食先導被 仰付候義難有仕合奉存候、依之、猶心得方左ニ奉伺候、一神武不殺之御武威ニ體シ、率濱 聖徳ヲ奉戴仕候様可心掛候得共、猶御總督之御下知ニ隨ヒ可申候事、一左近將監病氣、富久之助在京之儀ニ付、重臣之者申付先導可仕候事、但時宜ニ寄御届申上、歸國先導可相勤候得共、先重臣可申付候事、一奥羽先導之旨蒙 御沙汰候段、先祖信長ニ對シ、家之面目冥加至極難有仕合奉存候、然ル處、奥ハ無雙之大國、地理情體難探得甚以心配仕候、羽ハ居國之義ニ付、村山郡二城十三陣專務ニ仕、其他力之及處御總督之御指揮ニ隨ヒ、精々盡力先導可仕候事、一右御用ニ付差下シ候重臣、道中 禁裏御用之繪符相用不苦哉之事、右ハ被 仰付候御趣意萬一不得適所候テハ奉恐入候間、未左近將監へハ不申達候得共、急務之義ニ付、私共ヨリ奉伺候様富久之助申付候。

三月五日

織田富久之助家來
津田 勘解由
吉田 大八

○批紙

繪符相用不苦候得共、道中宿驛ニ於テ、聊權威ケ間敷振舞無之様可相心得候事、外都テ伺之通、

織田信敏家記

今般、御先導被 仰付候處、左近將監ニハ病氣在邑中、富久之助義在京中ニ付、不取敢、重臣吉田大八へ名代申付候、此段御届奉申上候、以上。

三月

織田富久之助家來

吉田 縫 殿

織田信敏家記

○本條、日ヲ失ス、蓋シ前書同日ナルヘシ。

○大久保忠禮、堀田正倫等、四十三人、連署上疏シテ、德川慶喜ノ爲ニ哀ヲ請フ、批シテ之ヲ大總督ニ上ラシム、忠禮等遂ニ上ルヲ果サス。

謹テ奉言上候、私共儀、先祖以來德川家臣屬ニハ有之候得共、普天率土王臣王土之儀ニ有之、況ヤ累代過分之官位爵秩頂戴罷在、奉蒙莫大之 天恩候得共、今般御政事御一新之折柄、萬分之裨補モ無之恐惶戰慄罷在候、然ルニ、去ル正月三日、不料モ德川氏當主入 朝之折柄、先驅之者共行違ヨリ意外之及戰爭、近畿之地ニ於テ礮煙ヲ動シ候段承知仕、一同驚愕失措罷在候處、終ニ此度奉蒙 御宸怒御追討被 仰出候段、實ニ當主不束ヨリ生候事、今更辨疏可仕様モ無之候得共、元來當主儀ハ、先年來 先朝非常之寵眷ヲモ奉蒙、決テ貳心無之段ハ天地神明モ照覽被爲在、億兆人庶モ承知仕候儀ニ御座候、乍然一時號令不嚴處ヨリ、右等之不始末ニ及候段ハ重々奉恐入、坂城モ急速退去、江戸歸城後モ恐惶謹慎罷在、先祖墳墓之佛寺ニ閉居候次第、私共德川氏恩意ヲ受罷在候身ニ取候テハ、實ニ片刻モ坐視傍觀罷在候ニ不忍、何卒 天地覆載之御仁慈ヲ以、寬宥之御處置被 仰出候様仕度奉願候、乍然、私共德川氏ニ附屬罷在候身分ニテ、今般之儀如何様ニモ諫爭抑止可致答之處、隔地罷在其儀ニ不及段、多罪之身ヲ以歎訴仕候段、非分ヲ不願奉恐入候得共、何分ニモ前文中上候當主謹慎恐惶之儀モ有之、且ハ德川氏祖先奉對 朝廷、恭順之道ヲ盡シ亂ヲ戡シ治ヲ致シ、奉安 宸襟候微動ヲ 思食不被爲捨、何卒格外之惶敬白。

御恩興ヲ以、寬恕之御沙汰被成下候ハ、獨德川氏再生之 御恩澤而已ナラス、關東諸州百萬之生靈鋒鏑之難ヲモ相免レ盛代御復古之御盛意ニモ可被爲叶哉、乍恐螻蛄織芥之微衷御酌取被下置、幾重ニモ御執奏之儀泣血流涕奉哀懇願候、恐惶敬白。

- | | | | | |
|--------|--------|-------|-------|---------|
| 二月 | 大久保加賀守 | 堀田相模守 | 松平伊賀守 | 内藤紀伊守 |
| 土岐隼人正 | 鳥居丹波守 | 酒井紀伊守 | 水野日向守 | 本多能登守 |
| 堀田攝津守 | 保科彈正忠 | 内藤長壽磨 | 柳澤伊勢守 | 柳澤彰太郎 |
| 土屋采女正 | 阿部美作守 | 土井大炊頭 | 秋元但馬守 | 水野眞次郎 |
| 久世隱岐守 | 安藤理三郎 | 板倉甲斐守 | 黒田筑後守 | 大岡主膳正 |
| 水野肥前守 | 内藤志摩守 | 大給縫殿頭 | 酒井下野守 | 大久保中務少輔 |
| 加納嘉元次郎 | 久松大藏少輔 | 米倉丹後守 | 酒井銚次郎 | 米津伊勢守 |
| 山口長次郎 | 田沼玄蕃頭 | 堀 右京亮 | 有馬兵庫頭 | 瀧脇丹後守 |
| 内田主殿頭 | 稻葉備後守 | 井上辰若丸 | 井上 宮内 | |

辨事局 堀田正倫家記

○批紙

反狀明白ニ付 御親征迄モ被 仰出、關東征伐トシテ大總督進軍相成居候付、本文歎願之旨趣其筋へ可申出候事。

辨事局 松平忠禮家記

○堀田正倫家記ニ云、二月十六日、德川氏ノ臣加藤弘藏、正倫ノ重臣等ヲ城中ニ招キ、之ニ謂テ曰、東國諸藩主、若シ德川氏ノ恩ヲ忘レスハ、蓋ソ西上シテ哀訴シ、德川氏ノ罪ヲ謝シ憐ヲ乞ハサルト、正倫大ニ之ヲ然リトシ、是ニ於テ東國諸藩ノ重臣ヲ邸ニ會議シ、乃チ書ヲ作り連署シ、先ツ重臣數人ヲ遣リ西上セシム、正倫ノ重臣書ヲ齎ラシ京ニ入ル、三月二日、諸

藩ノ重臣數人ト同ク、之ヲ太政官ニ上リ哀訴ス、時ニ大總督既ニ東發アリシヲ、以テ命アリ、之ヲ督府ニ上ラシム、蓋シ正倫等東國ニ在リ、上國ノ形勢ヲ詳ニセサルニ因リテ、遂ニ此舉ニ至リシヲ以テ、直ニ東歸シテ當時ノ事體ヲ告ケタリ、後遂ニ上ルコトヲ果サス。

○十七日上申書

今般、主人共、歎願書へ御附札ヲ以御差圖被成下候ニ付、大御總督御陣前迄可罷出旨申上候處、右ハ當御事體不相辦進達仕候ニ付、御時節柄之御事情、主人共へ篤ト申聞度候間、御陣前へ罷出候儀ハ一ト先見合候様仕候、此段御届申上候、以上。

三月十七日

大久保加賀守家來

正木權太夫

堀田相模守家來

依田七郎

松平伊賀守家來

赤座壽兵衛

堀田攝津守家來

木村健次郎

内國事務局叢書

○附錄 岩城平藩上申書

先達テ、徳川慶喜爲謝罪、元帝鷹菊三席之諸侯申合、歎願書重臣ヲ以奉差上候處、主人理三郎儀加連有之候、然ル處、理三郎儀追々勤王之道勉勵仕候心得ニテ、先般家族鈴之丞へ重臣加茂下左内差添、美濃國采地へ爲差登候砌、東海道於荒井宿

大總督様へ勤 王無二之誓詞奉差上候處 正親町中將様ヨリ格別之奉蒙 御感賞、其段急速理三郎方へ申遣候處、厚奉感佩、病氣未タ全快モ不仕候得共、押テ上京可仕ト、既ニ去月廿九日發途罷在候、隠居鶴翁儀モ在所奥州磐城平へ罷越 御鎮撫使様奉窺 御指揮候心得ニテ、去ル五日出立仕候、右之趣共以早便申越候間、於 御當地、大久保加賀守校重臣大久保彌右衛門、堀田相模守校重臣倉次甚太夫へ對話之上、右歎願書中理三郎名前除連仕候ニ付、此段御届申上候、以上。

三月十四日

安藤理三郎家來

野々山甚右衛門

内國事務局叢書

○附錄 飯野藩上申書二通

口上覺、

今度帝鑑席於江戸表ニ從席上徳川氏當主謝罪ニ付、歎願可申上段相談有之、右同所ニテハ、御當地之御模様柄モ委敷相分リ不申事故、任相談諸家ニ統重臣上京可致段申合相成、彈正忠重役之儀ハ從早春上京ニ付、詰合之重役ヲ以諸事申合、都合無之取計可申段申付越候處、於當表申談モ無之、差急歎願書大久保加賀守校、松平伊賀守校、堀田相模守校、堀田攝津守校重役ヲ以被差出候旨追テ承之、尤御模様ニ寄追々相勤可申段承之、依テ彈正忠義ハ除名ニ相成居候事ニ心得罷在候處、去ル十一日又々 總督宮様へ歎願書可差出段相談有之候ニ付、除名之儀席上之方へ申述候處、先般之歎願書ニ連名ニテ、今度之願ニ相洩候儀甚不都合之段申聞、初テ承之驚入、殊ニ彈正忠ニモ近々上京之趣申越、當方ヨリモ御當地之御模様柄屢申下シ、追々承知ニ付、江戸表ヨリモ歎願之儀ハ見合、除名ニ取計可申段申付越、旁以斷ニ及、今般歎願之儀ハ除名仕候、先般差出候歎願連名ハ、全以申合不行届一向心得不申、甚不都合之儀奉恐入候得共、彈正忠義ハ除名相成候様、格別之御憐愍御執成被爲成下度此段御斷奉申上置候、以上。

保科彈正忠留守居

三月十五日

西池虎之助

同家來

谷 幡

縫 藏
辨事局叢書
辨事局記

口上覺、

別紙口上書ニ申上候儀、甚不都合之段ハ私共ヨリ御斷申上置候趣、席上之方へモ斷ニ及置候間、此段御許容被成下度奉懇願候、以上。

三月十五日

保科彈正忠留主居

西池虎之助

同家來

谷 幡 縫 藏

○十七日批紙

連名歎願書ハ於當地御請込不相成ニ付、前日被差下候得共、最前連名不都合之次第ハ被 聞食置候事。 辨事局記

○附 泉藩上申書

先達テ、徳川慶喜爲謝罪三席ノ諸侯申合、歎願書差出候處 御附札ヲ以被 仰出候趣恐人奉存候、能登守儀、元ヨリ深奉重朝廷、實ハ續有之候重臣上京爲仕置候儀ニ御坐候、右ニ付、於 御當地、大久保加賀守校衆へ對談之上、右歎願書中能登守除名仕候、此段御届奉申上候、以上。

本多能登守家來

三月十七日

平野 廉介

辨事局叢書

○藤堂高潔、京ニ至ル。藤堂高潔家記、

○北陸道先鋒總督高倉永祐、金澤加賀ニ抵ル。北陸道先鋒記

○是ヨリ先、徳川慶喜大師東下スルヲ聞キ、其臣隸ヲ戒飭シテ、罪戾ヲ犯スコト勿ラシム、是日又之ヲ申諭ス。

○二月二十八日諭告書

京都ヨリ御軍勢御差向相成、既ニ東海道筋へ御先鋒御發行之由ニ相聞候、然共素ヨリ 朝廷へ對シ深ク 謹慎罷在候儀ニ付、此上如何様之御沙汰有之候共、恭順勤 王之素志相貫候様可致ニ付、萬一官軍へ對シ輕舉暴動致シ候モノ有之候テハ 天朝へ對シ恐入候而已ナラス、夫カ爲誠意モ不相立、萬民塗炭ニ陥候様可相成候間、心得違無之彌謹慎罷在候様可致候、忠義之志ニ出候共、相達(ス服カ)ル趣ニ差悖候テハ爲ニ不相成候間、能々此主意ヲ體認シ、決テ暴動無之様、堅相守可申候。

徳川家達家記

大 目 附 へ

此度從京都表御軍勢御差向ニ相成、既東海道筋へ御先鋒發行之由相聞候、然共素ヨリ 朝廷へ被爲對、深ク御謹慎被爲在候儀ニ付、此上如何様之御沙汰有之共、御恭順被爲在、勤 王之御素志相貫候様被遊候思召ニ付、萬一官軍へ對シ輕舉暴動致候者有之テハ、天朝へ對シ恐入候而已ナラス、夫カ爲ニ御誠意モ不相達、萬民塗炭ニ落入候様可相成候間、心得違無之様

彌一同謹慎罷在候様可致、忠義之志ニ出候共、相達候趣ニ差悖候テハ御爲不相成候間、能々御主意之趣體認イタシ、決テ妄動無之様、相守可申旨仰出候、右之趣向々へ可被相觸候。

二月

○春嶽私記、二月二十二日ノ條ニ、此書ヲ載セテ云、私云、追考ニ今日於江戸表被仰出ト、案スルニ、此書首ニ大目付ヘト掲ケ、文體モ亦其當ヲ得タルニ似タリ、前書ハ家記編輯ノ際更改セシモノニ似タリ、故ニ之ヲ併録ス、銜日ノ異同ニ至リテハ孰レカ是ナルヲ知ラス。

○本日再諒書

此程相觸候通、從京都御軍勢御差向相成、實以奉恐入候儀ニ付、只管恭順謹慎 御沙汰相待候事ニ付 官軍ヘ對シ決テ粗忽之舉動有之間敷候、右ハ 天朝ヘ對シ恐入候儀ハ申迄モ無之、且府下百萬生靈ヲ塗炭ニ陥入候様相成候儀ニ付、實以不忍次第候、縱令忠義之志ニ出候共、此旨ニ相悖候モノハ予カ意ニ背キ候モノニテ、予カ身ニ双ヲ加フルモ同様之儀ニ付、此旨篤ト相辨へ心得違無之様可致モノ也。

徳川家達家記

三日、上巳、外國公使朝見スルヲ以テ、參賀ヲ停ム。

○二日達書

明三日外國人參 内ニ付不及參 賀候事。

三月

辦事局叢書

○英國公使スル、ハルリー、エス、パークス、及ヒ書記官朝參ス、勅諭奏對、略前儀ノ如シ、又前日途上ノ變ヲ宣慰ス、是日、佛、蘭二國公使モ亦禁内ニ參同ス。

三月三日、英國公使ハルリー、パークス、書記ミットホールド參 朝 一皇帝陛下自カラ勅スル前ノ如シ、

英公使曰、我本國帝王陛下安全也 天皇陛下御尋問ノ件々且御懇親ノ 勅意、余欣然トシテ本國政府ニ可奉通達也、夫

外國交際ノ儀ハ 貴國御政體ノ立ニ隨テ、益堅固ナルベキ事ニシテ、此節 貴國ニ於テ全國一般ノ御政體ヲ被爲立、萬國ノ公法ヲ基根ト被爲遊シ故、追々外國交際盛ナルヘキ義必然ト奉存也、

皇帝陛下又勅曰、去ル三十日、貴公使參朝途中不慮之儀出來、禮式延引遺憾之至ニ候、今日改テ參朝満足ニ存候、

英公使曰、先日參 内之途中暴發ニ出會セシ所、今日 天皇陛下ヨリ難有御諭言ヲ蒙リ、且其場ニ於テハ 天皇陛下臣人ノ助力ヲ受ケ難有奉感佩、尙今日ノ厚キ御待遇ヲ以テ、過日ノ不幸ハ奉忘除候也、

右之通ニテ相濟退出セリ。

太政官日記

○本日回達書

自佛公使、各國一同、總裁内外國致談判度趣申出候ニ付、今午半刻、佛、蘭公使參 内、英公使 御對面之後、應接之筈ニ相成候事。

有栖川宮家記

○外務省記ニ云、戊辰春三月、英、佛、蘭三公使參内ノ節、於御所、三條公、岩倉公、中山公、徳大寺公、越前公、東久世公、宇和島公及小松、木戸、後藤、五代、伊藤等列席應接如左、

各公使曰、兵庫開港後、居留地未タ成就セサルニヨリ、以後條約濟外國人民ヲシテ、兵庫神戸ノ間、何ノ地ヲ不論シテ、雜居セシムルコトヲ許ス、如何ト問フ、

列坐中ヨリ答テ曰、兵庫、神戸中雜居ノ義ハ難差許、然レ共、生田川ト宇治野川トヲ堺トシテ其間ニ居留スルコトヲ許スヘシ、各國公使此事ヲ許諾ス。

○春嶽私記ニ云、英國公使入 朝ノ儀畢リ、佛、蘭ノ公使モ 會シテ開港等ノ諸件 有之、暮時前相濟散 朝。

○嵯峨實愛手記ニ云、總裁内外國掛等、各國公使ト有談判、刑法ノ事ヲ談スル由ナリ、外國事務局筆記ニ、於虎之間各

國公使等有談判ト、案スルニ、手記所謂刑法ハ、蓋晦日犯人ノ處分ヲ謂フナリ。

○今日、蘭人參内被仰出候ニ付テハ、途中警衛之儀嚴重可致之旨御沙汰候事。

三月三日

辨事

加州
筑州

重臣中

黑田長知家記

○前田慶寧家記ニ云、三日、和蘭公使入朝ス、本藩ノ兵士道途ヲ警衛ス。

○案スルニ、佛公使警護ノ薩藩モ亦同ク此令アリシナルヘシ、家記之ヲ佚ス、但小濱藩以下ノ申請書ヲ下ニ附録ス、時ニ四藩モ亦佛公使ノ護衛タリ。

○附小濱以下四藩申請書

今度佛國人參 朝立其他通行之砌、辻々御警衛四藩へ被 仰付、一藩ヨリ人數三拾人宛指出、辻々相固可申様御達御座候處、遠方へ罷越候節ハ、四藩ノ小人數ニテハ、辻モ行届兼心配仕候、右ニ付、一ト辻ニ凡拾人程之人數差置不申テハ、難相成様奉存候、左候時ハ、十二辻相固候寄外可仕様モ無御座候間、出先之模様ニ寄、小路之辻ハ相除キ、人通り多キ辻々へ、其見計ヲ以申合、臨機之取計仕相固候様仕度、四藩申合此段奉伺候、以上。

三月二日

酒井右京大夫内
福永准之助
安藤飛騨守内
津守源之丞

内國事務局叢書
酒井忠祿家記

○忠祿家記ニ云、右之伺書、外國事務局へ差出候處、伺之通可相心得旨御達有之ト、本文牧野豐前守谷大膳亮ノ名ヲ署セス、蓋之ヲ略スルナリ。

○一柳頼明、其父頼紹勤王ノ素志ヲ陳シテ、親征ニ從ハント請フ、又水野勝知ノ老臣、勝知ノ召命ヲ罷メ、藩ニ赴キ、時ニ勝知江戶ニ在リ王事ニ服セシメント請フ、批シテ其歸藩ヲ許シ、後命ヲ俟シム。

父因幡守儀、兼テ尊攘之志、雖有モ達 天聰、亥歲大和 行幸之供奉被 仰付有之候處、形勢俄ニ相變其儀被爲止、爾來憂慮積年遂痼鬱之症相發、在今日未離病辜仕合御坐候、然處、此度 王政御一新之折柄、又候 御親征被 仰出候ニ付テハ、押テ出馬可仕處、何分疲勞強不能其儀深奉恐入、因テ微弱之私ヲ以奉伺 天氣、續テ寡單之人數御用ニモ相立間敷候得共、供奉御人數之内へ御差加奉願度含御坐候處、最早御人數御揃相成候趣傳承仕、此上達テ奉願候モ奉恐入候得共、聊因幡守素志相達候様仕度奉存候間、何卒以格別之 御垂愍、供奉御加勢成共被 仰付被下候得ハ、冥加至極難有仕合奉存候、此段不得止奉歎願候、以上。

三月三日

一柳弦次郎
内國事務局叢書
一柳頼明家記

○批紙ヲ佚ス、且此後屢蹕ノ事見ル所ナシ。

奉歎願

日向守儀

勤 王之志願ニ付、近々江府出立可仕候得共、今度奥羽筋へ御鎮撫使御下向被爲 在候趣ニ付、小家誠ニ寡人數微力ニ候得共、御先鋒之列ニ被召加候歟、又ハ在所最寄人馬繼立御用、或ハ御下向御警衛方等被 仰付被下候様仕度奉存候、右奉願候通被 仰付候ハ、日向守儀上京ニ不及、在所へ爲取締罷越、夫々御用向用意可仕旨被 仰出候ハ、猶協力同心仕可奉盡忠節候、前書之件々御垂憐被成下、何卒奉歎願候通、被 仰付被成下候ハ難有仕合奉存候、此段奉願候、以上。

水野日向守重臣

鈴木半之丞

差添

佐藤伴右衛門

○批紙

日向守上京ニ不及、追テ何分之指揮被 仰出候事。

辨事局記

○本書、月日ヲ署セス、上申ノ日モ亦詳ナラス、辨事局記、本日ニ收ム、姑ク之ニ從フ。

○佛、英、蘭三國公使、將ニ京師ヲ辭セントス、加賀以下諸藩ニ命シテ、之ヲ護送セシム。

○二日達書

薩州

右、佛國公使警衛向引請被 仰付置候ニ付、下坂之節、中途警衛向ハ勿論、手當掛候儀一切取計無不都合様、大坂迄可致護送被 仰付候事、

但、下坂日限追テ可達候事。

三月

島津忠義家記

○同上

右、蘭國公使警衛向等引受被 仰付置候ニ付、下坂之節中途警衛向ハ勿論、手當相懸候儀、一切取計大坂迄可致護送候事。但、下坂日限追テ可相達候事。

三月

黒田長知家記

各通

金澤中納言

紀伊中納言

筑前宰相

安藝新少將

宇和島少將

辨事

官中日記、徳川茂承以下各家家記

明四日卯上刻、佛公使下坂ニ付、相國寺門前へ刻限無運々可差出事。

騎馬警衛 五匹

三月三日

○本文、安藝藩ハ三匹、宇和島藩ハ二匹ニ作ル、又官中日記ニ、薩摩藩五匹、肥後、長門、阿波、久留米四藩各三匹、柳河藩二匹ノ文アリテ達書ヲ載セス、諸家記モ亦見ル所ナシ。

各通

京極佐渡守

明四日卯上刻、佛公使下坂ニ付、相國寺門前ヨリ寺町、五條橋、伏見街道筋警衛人數可差出候事、
但、場所人數等ハ、別紙之輩ト申合可差出事。

三月三日

○別紙

九 鬼 大 隅 守
關 伊 勢 守
安 藤 飛 驒 守
仙 石 讚 岐 守
木 下 備 中 守
森 下 備 中 守
水 野 大 炊 頭 守
脇 坂 淡 路 守
伊 東 播 磨 守

辨 事

京 極 佐 渡 守
九 鬼 大 隅 守
關 伊 勢 守
安 藤 飛 驒 守
仙 石 讚 岐 守
木 下 備 中 守

右之通、壹人宛被相觸候間、御順達ニハ不及候事。

○

明四日、英國公使下坂ニ付、巡邏人數寅刻ニ揃、伏見表マテ途中嚴重巡邏可致事。

三月三日

○

加 州

德川茂承家記
池田德定家記

森 對 馬 守
水 野 大 炊 頭 守
脇 坂 淡 路 守
伊 東 播 磨 守
官中日記、京極高徳、伊
東長壽家記、新宮藩記

紀 伊 中 納 言
池 田 丹 波 守
池 田 相 模 守
稻 葉 右 京 亮
本 多 肥 後 守
一 柳 因 幡 守
京 極 飛 驒 守
木 下 備 中 守
加 藤 出 雲 守

明四日、蘭國公使下坂ニ付、警衛人數寅ノ刻ニ相揃、途中嚴重警衛可致候事。

三月三日

但、通船之儀可然取計可有之候事。

筑前 黒田長知家記

○本日本溝藩へ達書

明四日、蘭國公使下坂付、巡邏人數寅之刻相揃、伏見表迄途中嚴重巡邏可致事。

分部光謙家記

○案スルニ、四日ノ實事ニ據レハ、肥後、阿波二藩、英公使ヲ大阪ニ護送ス、而シテ達書ヲ佚ス、其他モ亦一々事實ト符合セス。

○附大溝藩請書二通

今般、蘭國公使下坂ニ付、伏見表ヨリ巡邏人數差出候様、御達書之趣奉畏候得共、若狹守家來共之儀ハ、兼テ雲母坂御守衛一際嚴重更ニ蒙御沙汰、其上當時官軍爲御用、鳥井本ヨリ醒ケ井迄驛々取締被 仰付、夫々漸ク手配等仕候上、今又柏原驛持場増被 仰付、精之限盡國力、最早在京者勿論在家人數共、唯今ニテハ、少分之儀モ差出方無御座、深心配仕候、委細ハ先達テ總人數積リ以書付御届申上候得共、此上出格之以 御憐愍、右御役之儀ハ何分ニモ被成下 御免候様、不取敢必至奉歎願候、以上。

分部若狹守家來

三月三日

藏田 琢 磨

辨事

御役所

○

此度、蘭國公使下坂ニ付、伏見表迄巡邏差出警衛可仕様、今曉御御達書之御旨趣奉謹承候、然ル處、若狹守家來共之儀ハ、別紙奉申上候仕合ニ付、乍残念差當御請奉申上兼、不得止、即刻必至歎願仕候處、其旨東久世様へ言上可仕候様、乍憚於當御局御挨拶相成候ニ付、則不取敢御本殿へ參上相伺候處、御留守中ニ被爲在否御左右之程モ被伺兼、彼是心配而已居候テハ、追々遅刻相成重々奉恐入候間、進退無是非今一應歎願書進達仕候得ハ、更ニ蒙 御沙汰彌可奉畏次第ニ御座候得共、在京少人數之儀ハ、先般依御差圖都テ引拂候間、何卒此上出格之以 御憐愍、即時之處雲母坂御守衛所ヨリ差略仕、先右御用向兎哉角爲相勤候儀ハ、難相叶儀ニ御座候哉、尤御場所柄之儀ハ一際嚴重爲仕候得共、萬一前件被成下御採用候共、是又呼寄候往來ニモ手間取、段々遅刻相成候ニ付、尙更心痛仕候得共、何分急速之御場合ニ付、此段不願恐謹テ御内慮奉伺候、以上。

分部若狹守家來

三月四日

藏田 琢 磨

辨事

御役所

分部光謙家記

○光謙家記ニ云、三日、右御免願書差出候處、即刻御指令ニテ、如何様ニモ差繰相勤候様御口達ニ付、四日早朝、再ヒ書面ヲ以テ相伺候處、即刻御指令ニテ、右願書ハ御留置被成、願之趣ハ免候段口達有之、但シ右御指令拜承仕候刻限ニハ、最早公使下坂モ相濟候仕合ニ御座候。

○板倉勝殷、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。板倉種家記

復古記 卷四十二 終

總 閱

一等編修官	臣	長	松	幹
纂修兼校勘				
四等編修官	臣	四	屋	恒
二等協修官	臣	中	村	鼎
原纂				五
十二等出仕	臣	石	津	發
校錄				三
六等掌記	臣	澤	渡	廣
八等掌記	臣	松	浦	辰
繕寫				男
一等繕寫	臣	小	川	長
二等繕寫	臣	小	島	春
二等繕寫	臣	藤	園	賢
				意

復古記 卷四十三

明治元年戊辰三月四日ニ起リ五日ニ至ル

〇三月

四日、蜂須賀茂詔ヲ以テ議定兼刑法事務局輔ト爲シ、荒尾成章駿河〇因ヲ參與兼刑法事務局判事ト爲シ、神祇事務局判事平田鐵胤ヲ内國事務局判事ト爲シ、參與田宮篤輝ヲ以テ内國事務局判事ヲ兼ネ、外國事務局判事寺島宗則ニ制度事務局判事ヲ兼シム。

議定職刑法事務局輔被 仰出候事。

阿波 少將

職務進退
蜂須賀茂詔家記録

〇茂詔家記五日トス。

荒尾 駿河

職務進退
池田輝知家記録

徵士參與刑法事務局判事被 仰付候事。

三月

〇輝知家記五日トス。

復古記 卷四十三 明治元年三月四日

六六五

○ 神祇事務局判事被免、内國事務局判事被 仰付候事。

平田大角

三月

但、學制之儀、是迄之通無油斷心掛可申候事。

職務進退
平田鐵胤履歷書

○ 進退録但書ナシ。

田宮如雲

徵士參與職内國事務局判事被 仰付候事。

慶應四辰年三月

總 裁 朱 印

職務進退
田宮如雲事蹟

○ 副達

田宮如雲

京都裁判所之可爲附屬被 仰付候事。

三月

田宮如雲事蹟

○ 如雲事蹟竝ニ日ヲ失ス。

寺島陶藏

當分制度事務局判事被 仰付候事。

但、外國事務局判事如元候事。

三月

職務進退録

○ 久留米藩ニ命シテ、神戸ヲ警守セシム、尋テ柳河、大洲ニ藩ヲシテ神戸、西宮ヲ守衛セシメ、久留米藩ヲ罷ム。

久留米中將

右、攝州神戸御警衛被 仰付候間、兵士三百人差出、薩摩少將人數ト申合勉勵候様 御沙汰候事。

有馬頼成家記

○ 三月四日

立花飛驒守

右、天保山御警衛被 仰付置候處被免、神戸御警衛被 仰付候間、薩州人數ト申合可致勉勵旨 御沙汰候事。

立花鑑寛家記

但、神戸之儀ハ、外國人入込之場所柄ニ付、別テ無油斷可致取締候事。

○ 鑑寛家記ニ云、右ニ付差出候人數、銃隊二百二十六人、役付六人、夫卒六十七人。

久留米中將

右、西宮、神戸等御警衛被 仰付置候處被免候條 御沙汰候事。

有馬頼成家記

○ 三月七日

此度西宮 御警衛蒙 御沙汰候段奉畏候、右御請申上候、以上。

三月 七日

加藤遠江守
内國事務局叢書

○本條達書ヲ伏ス、故ニ奉命書ヲ以テ暫ク之ヲ補フ。

○是ヨリ先、藤堂高邦ヲ召ス、是日、京ニ至ル、命シテ宇治關門ヲ警守セシム。

藤堂佐渡守

宇治關門御用有之候間、早々上京可致旨 御沙汰候事。

二月 廿五日

藤堂高邦家記

藤堂佐渡守

宇治關門御警衛被 仰付候條、可致嚴重 御沙汰候事。

三月 五日

藤堂高邦家記

○高邦家記ニ云、御召ニ付、三月朔日久居表發足、同月四日京著ス。

○京極高典ノ請ヲ許シテ、市中取締ヲ罷メ、松平義勇ヲ以テ之ニ代フ。

私儀

此度不存寄、當市中取締被 仰付難有仕合ニ奉存候、依テ微力之及候程ハ盡力仕度素願ニ御座候得共、何分右御役ハ失費人遣不少、小身ニハ過分之儀ニテ、忽藩中扶助モ難仕次第ニ可至ト、甚當惑心痛罷在候、右ニ付テハ厚キ 朝命之儀ニハ候得共、逆モ力ニ不能候ニ付、深恐縮遺憾ニ奉存候得共、御免之儀奉願上候。

三月 朔日

京極下總守

○本日達書

京極壽吉家記

先般市中取締之儀、被 仰付置候得共、微力ニシテ不克其任之旨願之趣有之、取締之儀被 免候事。

京極下總守

三月

官中
京極壽吉家記

○壽吉家記、日ヲ失ス。

松平範次郎

京都市中取締被 仰付候事。

三月

官中
松平義生家記

但取扱振之儀ハ、裁判所之下知ヲ可受事。

○義生家記、松平範次郎ヲ高須藩ニ作り、但書ナク且五日トス

○池田茂政、淺野茂勳、各書ヲ上リ、舊松山ノ封地及ヒ河邊川以西ノ地ヲ管スルコト、竝ニ其舊ニ仍ラント請フ、之ヲ聽ス。

備中國之義、先達テ川邊川東西ヲ以、藝備二藩へ取調被 仰付、其後關伊勢守、蒔田相模守へ改被 仰付奉畏候、然ル處、松山之義ハ、城地竝家來共弊藩へ御預ニ相成居申候上ハ、御裁許被 仰付候迄、川之東西ニ不抱、土地人民一圓弊藩へ御預被 成下候様奉願上候、左モ無御座候テハ、民心疑惑仕、鎮撫方行届兼、甚以苦心仕候間、何卒右之邊更ニ蒙 御沙汰、其旨領内

へ布告仕、民心安堵爲仕度奉存候、此段只管奉願上候様、備前守申付越候、以上。

二月十四日

備前少將留守居

澤井宇兵衛

池田章政家記
岡山藩記

○再申書

山陽道取調之義、先達テ、夫々藩々へ改被 仰付候趣奉畏候處、過日備中山表之義奉伺候後、猶又人情目擊熱察仕候處、漸今日ニ至、僅ニ歸向モ相定居申候趣ニハ候へ共、所々差出置候人數等引揚候ハ、如何様之及動搖候モ難計情體、既ニ相見候向モ有之、自然左様之義御坐候テハ、御不都合之次第重々奉恐入候付、是迄取調掛之所々、最初之御運ヒヲ以、其儘被仰付置候様、出先之者ヨリ申越候、尤此段藝州ニ於テモ同様之義ト奉存候間、申合御不都合無之様、精々盡力仕度奉存候、此段早々御聞届被成下候様仕度旨、備前守ヨリ申付越候、以上。

備前少將内

澤井宇兵衛

岡山藩記

二月十八日

○本日批紙

松山領之義ハ、追テ何分之義被 仰出候迄ハ、土地人民共一圓其藩へ被預置候條、鎮撫方行届候様可致心配事。

池田章政家記

○家記、藩記、批紙ヲ前書ノ後ニ附ス、而シテ家記ハ後書ヲ佚ス、案スルニ、前書ヲ上リ未タ命ヲ得ス、因テ復々後請アリ、故ニ批紙ヲ後ニ收ム。

山陽道取調之儀、池田備前守竝私へ被 仰付候處、播磨、美作、備中、備後、夫々藩々へ改メ取調被 仰付申渡可引渡旨奉畏、早速出先之者共へ申遣候處奉謹承候、尤備中、備後之儀ハ、兼テ被 仰付候趣ヲ以、一應取調相濟、別紙二月十三日ノ上御届仕候通ニ御座候得共、最初人數差出候處ニテハ、人心洶々之折柄、歸向不定之勢相見候處、御趣意得ト申聞、漸ク鎮定ニ至リ申候付、取調懸リテ差置、只今人數引揚候テハ、尙又疑惑ヲ生シ、如何様之御不都合筋出來モ難計ト、出先之者共ヨリ案勞申越候、其段ハ備前オイトモ同様之儀ト奉存候間、最初被 仰付候運合ヲ以、河邊川以西ハ、暫時之間、其儘私へ被 仰付置被下候得ハ、只今迄之手續ヲ以、備前申值鎮撫筋等飽迄盡力可仕ト奉存候付、早々御聞届被下候様仕度奉存候、此段申上候、以上。

二月十八日

安藝新少將

○本日批紙

願之通被 仰付候事。

辨事局記

○附十六日備前藩上申書

元松山領備中國下道郡久代村百姓共、年貢米之儀ニ付、彼是騷立候様子ニ付、不取敢、郡方之者差遣シ取調爲致候處、百姓共多數、竹槍等ヲ携、嘯聚致候得共、一先鎮靜之上、藝州出張役人へモ及掛合置引取申候、其後兎角徒黨ヲ建、沸騰ノ模様相聞候得共、川西ハ藝州鎮撫ノ事故、其儘ニ致置候處、今般松山領之儀ニ付、御附紙之次第モ有之候ニ付、右徒黨張本召捕吟味可仕ト相考、去ル六日、捕手之者同村へ差向、尤多數連印致居申様子ニ付、動搖之程モ難計、右爲手當兵隊操出置、徒黨之内五六人取押候處、是ヨリ先、連印之内重立候者十數人、同國玉島藝州出張所へ、出願之儀有之罷越居申候趣ニ付、懸リ之者同所へ差向、藝州役人へ、右ノ者共相渡シ吳候様及應接居申内、脱走仕候旨、藝州役人共ヨリ申出、不都合之儀ニ有之候得共、右之群ヲ離レ罷越居申、二人之者ハ受取居申候、就テハ、右徒黨之者共、趣意曲直ハ不分明候得共、自然何方へ出訴可仕モ難計候間、其節ハ一同御下ケ渡被下度、左候得ハ精々遂吟味候上ニテ、猶又相伺候儀モ可有御座ト奉存候、右ハ當節

柄兵隊繰出候儀ニ付、旁以御届申上置候様、國許ヨリ申付越候、以上。

池田備前守内

澤井宇兵衛

辨事局記

三月

○永井直諒、永井直哉、谷衛滋、公事或ハ疾ヲ以テシ、竝ニ歸藩ヲ乞フ、是日、皆之ヲ聽ス。直諒ハ

ニ上リ、直哉、衛滋ハ六日、

私儀御當地火役蒙 仰、滯 京相勤罷在候、且又今般 御親征 行幸被爲遊候ニ付テハ、御留守中御警衛被 仰付奉畏候、然ル處、河州牧方驛被遊 御一泊候趣粗承知仕候、同所之儀ハ私御領御預所ニ御座候間、罷越御守衛奉申上度、尙又大阪表御留泊中、在所程近之儀ニ御座候得ハ、臨時御用之節、家來共而已ニテ、自然不都合之儀御座候テハ奉恐入候ニ付、一先歸邑還幸迄滞城、夫是指揮仕度奉存候、右御間濟被成下候上ハ、御留守中御警衛向竝火役之儀ハ、重役之者へ嚴重申付置度、此段奉願候、以上。

二月 晦日

永井日向守

永井直諒家記

○再請書

今般 御親征 行幸御延日被 仰出候趣奉承知候、然ル處、兼テ蒙 御沙汰罷在候西宮ヨリ山崎關門迄之間、別テ樞要之地ニ付、守城始夫々取締等、家來共へ嚴重申付置候得共、何分私儀在所表へハ未タ初入不仕、土地不案内之儀ニ御座候ニ付、一先ッ歸邑仕候テ、夫是見分之上指揮仕置度、且又御道筋牧方驛之儀モ、猶以不都合之儀無之様、精々申付度奉存候、依之、廿日之御暇被成下候様奉願上候、御間濟被成下候上ハ、當御地火役之儀ハ、在邑中重役之者へ嚴重ニ申付置度奉存候、彌

行幸御日限被 仰出候上ハ、猶奉窺御指圖次第、兼テ奉願上置候通、牧方驛へ罷出、御守衛仕度、此段奉願上候、以上。

三月 四日

永井日向守

内國事務局叢書
永井直諒家記

○直諒家記ニ、御口達ニテ伺之通トアリ。

大和國 御料所之内、私領分最寄支配被 仰付被下置間敷哉之旨、鎮臺久我大納言殿へ伺書差出候處、伺之通被 仰付候段被仰渡候趣、在所家來共ヨリ申越候間、御届奉申上候、右ニ付、爲取締一應歸邑仕度奉存候間、暫時御暇奉願候、取締相立候上ハ速ニ上京可仕候、此段不苦儀ニ御座候ハ、宜御執成奉願候、以上。

二月 廿六日

永井信濃守

○本日批紙

可爲願之通候事。

永井直哉家記

○直哉家記ニ云、前條之儀御達有之候而已ニテ、未タ實地御引渡無之折柄、和州全國之舊代官地竝諸藩預地共、總テ鎮臺ニテ管轄被致候體裁ニ相成申候。

私儀

先月上旬ヨリ、齒痛罷在候上、持病之積氣差發、其後時候ニ相障リ療養相加へ候處、少シハ快ク御座候得共、兎角寒熱往來難罷仕候、在所之儀ハ隣國、旁以暫時歸邑養生仕度奉願上候、少シモ快方御座候得ハ、急速上京可仕候、當地佛國人警衛人數之儀ハ、重臣之者へ猶嚴重相心得候様申付置候間、右願之通、一先御暇被下置候様、此段宜御執 奏偏ニ奉願上候、以上。

三月 四日

谷 大膳亮

○批紙
願之通。

辦事局記
谷衛滋家記

○伊達宗徳、松山平定ニ就キシヲ以テ、其兵ヲ班ヘスヲ稟ス。

兼テ豫州松山御征伐ニ付、應援之兵差出候様御沙汰御座候ニ付、國許へ兵員相備置申候處、去月廿七日、先鋒之面々松山表へ討入候様相聞申候間、早速松山境大洲領郡中迄、兵士差出申候處、彼方伏罪開城致候趣ニ付、隊長之者松山城へ罷越、土州出兵之隊長へ及示談候處、領内一回鎮靜ニ相違無之趣ニ付、最早應援之廉モ無之候間、過ル六日、人數爲引揚申候、此段以使者御届申上候、以上。

二月

宇和島侍從

伊達宗徳家記

○土屋寅直、松平頼繩、播磨守○常陸府中藩主、食封二萬石、後石岡ト改稱ス、阿部正恒、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ京ニ至ヲシム。内國事務局叢書、阿部正恒家記

内國事務局叢書

○英國公使ヲ襲撃セシ兇徒、三枝眞洞、和○大朱雀貞固、山ヲ梟首ニ處シ、其黨三人ヲ流ス、尋テ外交ノ朝旨ヲ海内ニ告諭シ、横逆ヲ外人ニ加フルコト勿ラシム。

申渡、

浪人

三枝眞洞

其方儀、此度入京被 仰付候英吉利公使、參内之途中、同類申合抜刀切懸リ手疵ヲ負セ、御新政之砌、外國御交際ヲ妨ケ、亂

行ニオヨヒ、朝廷ヲ輕候次第、重疊不届之至ニ付、苗字大小御取揚、斬罪之上梟首被 仰付之。

以上

梟日數三日

三月

刑法事務局

外國事務局筆記

棄札案

斬罪

浪人

三枝眞洞

眞洞

此モノ、入京ヲ免サル、外國公使參 内之砌、亂行ヲ働キ、朝廷ヲ奉輕ンシ候所業、重科タルニヨツテ、如此梟首申付之者也。

右壹紙

浪人

朱雀操事

操

此者、入京ヲ免サレシ外國公使參 内之砌、亂行ヲ働キ、既ニ死ストイヘトモ、朝廷ヲ奉輕ンシ候所業、重科タルニヨツテ、如此梟首申付之者也。

右壹紙

外國事務局筆記



英人へ及亂妨候儀、今朝栗田口（マ）ヲイテ斬罪、無故障相濟、同人竝操首級共、梟首取計置申候事。

三月四日

外國事務局筆記

○案スルニ、本書蓋シ刑法事務局ノ報文ニ係ル。

川上邦之助

松林織之助

大村貞助

右ノ者共、去二月卅日、英國公使參 朝之節、狂暴之所業ヲ企候者共ヨリ及示談候砌、條理辨別取押置候趣ニハ候へ共、至重之大典沮廢致シ候儀、乍存知政府へモ不訴出、始終私情ヲ以 皇國之災害ヲ釀成致シ候義、誠以不輕罪科候間、永ク遠流被 仰付候事。

三月五日

官中日記
外務省記

○七日松江藩へ達書

松平出羽守

別紙之通被 仰付候間、其旨可相心得候事。

○別紙

川上國（マ）之助

大村貞助

松林織之助

右三人、今度隱岐國流罪被 仰付候間、護送方之儀手配イタシ、用意調次第、裁判所へ可申出候事。

内國內事務局記

三月

○案スルニ、九月ニ至リ、三人皆赦ニ遇テ歸ル。

○刑政局奏案

英人へ亂妨イタシ候者

右者、此度入京被 仰付候英吉利人參 内之途中、同類申合、拔刀切懸リ手疵ヲ負セ候次第、御新政之砌、外國御交際ヲ妨、亂行之及振舞候始末、屹ト御重典ニ 不被處候テハ 朝威モ立兼、外國へ被對候テモ相濟申間敷、右ニ付、即日參 内モ被差延、大不敬ヲ犯候筋ニモ罷成、途中劫囚之者、律條ニオイテ上ヲ犯候造意、不輕儀ヲ以死罪ニ相定、増テ此節之儀外國御交際迄被設候砌、右之振舞重疊不屆者ニ付、顯戮斬罪之上、梟示可被 仰付哉。

但梟示ハ、日數二日程モ可被懸置哉、尤申渡之節、苗字大小御取揚被 仰付、平人ニ落サレ戮ニ可被就哉、且又同類之首級モ、右一同梟首可被 仰付哉ト奉存候事。

刑法事務局

○翁以下ノ口供書、諸書見ル所ナキヲ以テ、之ヲ司法省ニ質セシニ、一モ存スルモノナク、唯刑政局一通ノ奏案アルノミ、即チ本書是ナリ、然レトモ其實ニ上申セシヤ否ハ詳ナラトス云、案スルニ、翁等二人ノ處刑、之ニ據リシモノニ似タリ、故ニ收録シテ參考ニ供ス。

○附北畠治房撰三枝翁履歷ニ云、此人本管郡山藩下添下郡椎木村一向宗淨蓮寺住侶淨尙也、其性澹泊ニシテ、平素物ニ拘泥セス、然シテ一視一聞會テ不遺、頗強記、初儒業ヲ平群郡東安堵村醫生今村宗伯ニ受、側ラ詩賦作文ヲ嗜ム、十八九才ニ暨ンテ、伴林光平ノ門ニ入り、歌學ニ汲々タルコト殆五七年、又書法ヲヨクシ、藤本鐵石ニ南畫ノ法ヲ受ケ、兀堂或ハ真洞真道人ト號ス、又芳滿、祥滿ト名ク、國訓共ニ與志麻呂、專ラ武技擊劔ヲ嗜ミ、篆刻ニ精シ、同人夙憂國慨世之志念厚ク、嗜昔逆焰熾盛之際、勤 王奔走之時、青木精一郎又市川芳丸ト變稱シ、文久三癸亥秋御親征御布令之期、南山稱兵之一舉ニ當

リ、故寺ヲ脱走シ、四郎治房ノ通稱ト俱ニ五條ニ赴ク、十里ノ行程、翌十七日申牌彼地ニ達ス、義軍已ニ鈴木源内ノ邸宅襲撃ノ最中、敵邸之門前ニオイテ中山盟主ニ謁シ、爾來同人馬廻リ近侍ヲツトム、同ク廿五日ノ夜中、軍高取城ヲ襲撃ノ途中、戸毛村ニオイテ、伴林六郎ニ向ヒ、慨然トシテ云、嗟呼、如斯無謀無算之行軍、奚ソ得勝算乎ト、其儘脱隊行衛ヲシラス、爾後因州ニ赴キ、國學生某氏年平ノ家ヲ主トシ、陽ニ文事ヲ弄シ、陰ニ同士ヲ募ル、丁卯秋、有故浪華薩摩願教寺ニ歸寓、同冬鷺尾家高野山ニ發向之頃、依事故、水戸藩香川敬三同寺ニ來會、夫ヨリ野山ニ赴キ、曾テ爲探索京攝間ニ出、翌辰正月四日野山ニ復報シ、爾來輻重方副長ヲツトム、同月十日、鷺尾家浪華ニ發向之時、義徒五百六十人ト野山之本營ニ留守、翌二月中旬、總勢凱旋ノ時、同輻重ヲ掌リ、歸京解職、同家南一番隊ニ加リ、同月廿七日、右隊御親兵ニ被爲徵ノ時、衆ト俱ニ二條城ニ參リ、同廿九日晦日、朱雀操ト、初テ參朝ノ英人ヲ狙撃ニ及ヒ、終ニ三月四日於栗田口被處死刑候、是同人國事ニ關スル頭末之槩略也。

○朱雀操履歷書見ル所ナシ。

○英國公使へ書翰二通

以手紙致啓上候、然ハ過日於伏見驛、東久世少將ヨリ、亂妨人餘類三人之者、同罪ニ可申付様御話申置候處、刑法局ニ於テ、右三人之モノ、嚴シク遂吟味候處、別冊口書之通、右惡業之企致承知候故、朋友之親ヲ以、手ヲ盡切諫ニ及候旨ニハ無相違候得共、右之次第全ク政府ニ届出モ不致、甚以不行届之至ニ付、生涯孤島遠流之刑ハ、我國法ニオイテ死刑ヲ除ク之外、至極之重科ニ有之候、就テハ一應御相談之上、右之刑法ヲ可相行筈之處、所置失當、彼是手拔ニ相成候段、重疊我政府之過失ニテ、貴國ニ對シ如何ニモ申譯無之候ニ付、拙者共ヨリ右御詫申入度如斯御坐候、以上。

辰 三月 七日

英國公使

岩倉前中將
三條大納言

サアハルリーハークスケシビ

閣下

外務省記

○外務省記ニ云、別冊口書見ヘス、尙取調ヘシト。

以手紙致啓上候、然ハ於京師、去ル晦日參内之中途、及暴行候三枝翁、朱雀操斬罪ニ處シ梟首ニ及候、罪狀之文意、公使ヲ輕シ候場合ニ相成、必竟外國交際不取馴トハ乍申、第一日本政府之不行届ヨリ生候次第、別テ失敬之至ニ候、就テハ別紙開港地ヘ之布告書ハ、通行之儀其儘差置候得共、入京被仰付候トノ云々迄、消除キ布告イタシ置、爾來右様失敬之文意、屹ト無之様可致候間、此節之儀ハ御海容可被下候、御出帆後相成候間、以書面此段御詫申進度如此御坐候、以上。

辰 三月 九日

英國公使

サアハルリエスパークスケシビ

閣下

外務省記

○以上二書、謝狀ニ係ル、但シ公使駁議ノ事、別ニ見ル所ナシ。

○附外國事務局輔書翰

以手紙致啓上候、然ハ貴國之公使參内之中途、及暴行候三枝翁罪狀之儀、過日入御覽候紙面、今日市中へ普ク相觸、尙町内會所毎ニ張紙イタシ候様申渡置候間、此段爲御心得如是御坐候、以上。

三月 十日

伊達少將
東久世前少將

英國公使代

ミットホルト

閣下

外務省記

○十一日復書

御尊翰拜讀仕候、然ハ浪人三枝翁罪狀之儀、今日市中ヘアマチク御張出シ之趣委細承知仕候、右之趣書面ニ相認、公使ヘ差送可申候、然處先日 朝廷ヨリ公使ヘ御約束相成候ニハ、長崎竝神戸ヘモ御張出之由候得共、是等ハ如何ニ御座候哉、爲念得貴意度、御報旁如此御座候、早々以上。

ミットホルト

伊達少將

東久世前少將

閣下

外務省記

○書中、神戸、長崎云々ノ答辨ハ、十四日ノ書束中ニ見ユ。

○七日布告書

今般 王政御一新ニ付、朝廷之御條理ヲ追ヒ、外國御交際之儀被 仰出、諸事於 朝廷直ニ御取扱被爲成、萬國之公法ヲ以、條約御履行被爲在候ニ付テハ、全國之人民 叡旨ヲ奉戴シ、心得違無之様被 仰付候、自今以後猥ニ外國人ヲ殺害シ、或ハ不心得之所業等致候モノハ、朝命ニ悖リ、御國難ヲ釀成候而已ナラス、一旦御交際被 仰出候各國ニ對シ、皇國之御威信モ不相立次第、甚以不屈至極之儀ニ付、其罪之輕重ニ隨ヒ、士列之者ト雖モ、至當之典刑ニ被處候條、銘々奉 朝命、猥ニ暴行之所業無之様被 仰出候事。

三月

黒田長知家記
春獄私記

○佛、英、蘭三國公使京師ヲ辭ス、加賀、薩摩以下諸藩之ヲ衛送ス。

○外國事務局筆記ニ云、四日各國公使下坂也、又云、五日佛國公使ヘ大和錦拾五卷被下、公使下坂ニ付、神戸運上所ヘ陸奥陽之助、寺島陶藏等之名宛ニテ爲持遣ス。

○案スルニ、英、蘭二國公使モ亦宜々同一ノ贈遺アルヘシ、而シテ見ル所ナシ。

○諸藩上申書

被爲 召候佛國公使、明日卯上刻、相國寺出立、今出川、寺町通、五條橋ヨリ伏見街道通行伏見著、直様當朝川下仕度申出候間、此段御届申上候、以上。

薩摩少將内

三月三日

内田仲之助

辨事局記

○案スルニ、前日ノ達書ニ據レハ、佛公使ヲ大阪ニ護送セシハ薩摩藩ナリ、而シテ家記、上申書ヲ佚ス。

○

佛人歸阪、今朝六ツ時過相國寺出立仕候ニ付、道筋警衛仕、伏見表ニテ乗船仕候ヲ見請、警衛之人數引取申候、此段御届申上候、以上。

酒井右京大夫家來

三月四日

佐橋邦衛

辨事局記

○

○ 今四日卯上刻、佛公使下阪云々。昨日ノ達書中略 右之通被 仰付御達ニ相成候、面々申合、今寅上刻ヨリ人數差出、伏見驛迄相送、唯今引取來候ニ付、此段御届申上候。

三月四日

京極佐渡守内

多賀越中

辦事局記

○ 佛公使爲警衛、人數差出、藤森迄警衛無滞相濟、只今引取申候、此段御届奉申上候、以上。

三月四日

水野大炊頭家來

早見友藏

辦事局記

○ 佛國人今朝下阪仕候ニ付、伏見迄警衛之人數只今罷歸、相國寺屯所引拂申候、此段御届申上候、以上。

三月四日

谷大膳亮

辦事局記

○ 英國公使、一昨四日知恩院旅宿發足仕候ニ付、兼テ御達之通、四藩申談警衛仕、伏見表ヨリ淀舟ニ乗組、昨曉八時過大阪八軒家へ著、上陸爲致候筈之處、天保山沖へ碇泊之軍艦へ、直ニ乗移申度段申出候付、四藩申談、俄ニ及其手配、幸越中守手船國許ヨリ相廻居候付、公使以下大阪戎島ヨリ乗組セ、昨晝九時分、同所出船仕候段、護送役長之者ヨリ申越候、此段御届仕候、以上。

細川越中守内

三月六日

池邊悰右衛門

辦事局記

○ 八日上申書

英國公使、去ル四日知恩院旅宿發足仕候ニ付、兼テ御達之通、四藩申談警衛仕、伏見表ヨリ淀舟ニ乗組、同五日曉八時過大阪八軒家へ著、上陸爲致候筈之處、天保山沖へ碇泊之軍艦へ、直ニ乗移申度段申出候ニ付、四藩申談、俄及其手配、細川越中守手船國許ヨリ相廻居候ニ付、公使以下大阪戎島ヨリ乗組セ、同日同所出船仕候段、彼地ヨリ申越候、此段御届仕候、以上。

三月

蜂須賀淡路守内

伴剛太夫

辦事局記

○ 文中所謂四藩、肥後、阿波二藩ノ外考ル所ナシ。

○ 蘭人途中警衛無滞相勤、一昨四日夕、大阪表到著仕、公使宿館迄相送、人數引取申候、此段御届申上候、以上。

三月六日

加賀宰相中將内

恒川新左衛門

辦事局記

○ 前田慶寧家記ニ云、四日、我兵士、筑前藩兵ト共ニ、和蘭公使ヲ大阪ニ護送ス。

○ 黒田長知家記、此事ヲ佚ス。

○ 南禪寺へ止宿罷在候蘭人、昨四日朝出立歸阪仕候付、伏見迄警衛之人數差遣シ、御用向無滞相濟申候、依之、同寺近傍屯兵

所、並市中巡邏共人數引上ケ申候、此段御届申上候、以上。

三月五日

美作中將留守居

奧村牧夫

辨事局記

○ 昨日、和蘭國公使歸阪ニ付、伏見迄護送仕、警衛御用向無滯相濟候ニ付、南禪寺近傍屯兵所人數引上ケ申候、此段御届申上候、以上。

三月五日

前田稠松内

磯野新九郎

前田利同家記

○ 昨日、和蘭國公使歸阪ニ付、伏見迄護送仕、警衛御用向無滯相濟候ニ付、此段御届奉申上候、以上。

三月五日

久松内膳正内

長島專左衛門

久松定弘家記

○ 昨日、和蘭公使歸阪ニ付、伏見迄護送仕候、警衛御用向無滯相濟候ニ付、南禪寺近傍へ出張罷在候人數引揚申候、此段御届申上候、以上。

植村駿河守家來

三月五日

村田丈四郎

植村家壺家記

○ 附尾張藩以下上申書五通

英吉利人、今四日午上刻、知恩院發途相成申候、依之御届申上候。

三月四日

徳川元千代内

尾崎將曹

辨事局記

○ 英人爲取締差出置候人數、昨日下阪仕候ニ付、爲引取申候、此段御届申上候、以上。

三月五日

池田相模守

辨事局記

○ 今般、英國公使上京、知恩院下宿相成候ニ付、同所近傍へ屯所取設、警衛人數差出候様被仰付、則出張罷在候處、昨四日、英國人下阪ニ付、紀州藩隊長へ爲打合之上、出張人數爲引拂申候、此段御届奉申上候、以上。

三月五日

本庄伯耆守家來

森田重兵衛

辨事局記

○ 佛人下阪ニ付、兼テ御届申上候警衛人數、昨四日引揚申候、此段御届申上候、以上。

牧野豊前守家來

三月五日

伏木熊吉

辨事局記

○英國公使下阪ニ付、知恩院ニ相詰候紀伊中納言人數、昨日同所爲引取候間、此段奉申上候、以上。

紀伊中納言内

小林六左衛門

辨事局記

三月六日

○牧野貞利、黒田直養、徳川氏ニ請ヒ、江戸ヨリ其藩ニ歸ル。牧野貞利、黒田直養家記

五日、是ヨリ先、丸龜、大洲以下十四藩ニ命シテ、吏人ノ民政ニ通セシモノヲ選舉セシム、是ニ至リ、之ヲ諸道ニ分遣シ、所在ノ郡邑新ニ官地ニ屬セシモノヲ巡按シ、府庫ヲ檢シ、民瘼ヲ恤ス。

○二月二十日達書

今般 王政御一新ニ付テハ、是迄天料ト稱候地所、悉皆御領ト相成候間、下民之情實悉被 聞食度候間、紛擾之時節、或強盜或ハ暴客之爲ニ被惱候箇所モ有之哉之趣、深被惱 宸襟候得共、國事御多端之折柄、自然 御仁心モ行届兼候間、内々爲監察諸道へ被遣候、於藩々得 御趣意、正直ニシテ郡村之吏務ニ長シ候者、兩三輩急々撰擧可差出候事、

但代官之情實、村民之苦情、竝收納租税金穀之有無取調之儀、被 仰付候事、

京極高德家記
市橋長義家記

京極佐渡守

小出伊勢守

加藤能登守

市橋下總守

辨

事

二月二十日

右家來之内三人 太政官差急 御用ニ付、當分御雇被 仰付候ニ付、差出候人名、明日午刻迄可申出候事。

京極高德以下各家家記

○市橋長義家記ニ云、二月二十日、今午刻重臣御呼出シ御達ニ付、重臣淺井藏人、留守居役大津忠右衛門差添出頭、諸家重臣揃之上、於鶴之間、内國事務總督徳大寺大納言殿直達、其節出頭重臣姓名、

京極佐渡守重臣

多賀越中

加藤遠江守重臣

大橋播磨

脇坂淡路守重臣

井口金右衛門

秋月右京亮重臣

坂田少部

牧野豊前守重臣

川手内膳

朽木近江守重臣

朽木木工允
 加藤能登守重臣
 菅直記
 木下備中守重臣
 小川九十九
 小出伊勢守重臣
 太田發之進
 森對馬守重臣
 今村文右衛門
 九鬼大隅守重臣
 松田藤之丞
 谷大膳亮重臣
 布施三平

右當方共都合拾三家ナリ。

○案スルニ、分遣人名中、戸田忠至ノ家臣アリ、長義家記、之ヲ佚スルニ非サレハ、後ニ命セラレシナルヘシ、又長義家記ニ據レハ、加藤泰秋、脇坂安斐、牧野誠成、朽木爲綱、秋月種股、九鬼隆備、谷衛滋、森俊滋、同ク此命アリシナリ、今並ニ達書ヲ佚スルヲ以テ、其事ノ家記ニ散見セシモノヲ後ニ抄録ス、泰秋、誠成、爲綱、種股、俊滋ハ全ク之ヲ佚ス。

○安斐家記ニ云、二月十九日^{恐クハ、二}家來之内三人、太政官差急御用ニ付、當分御雇被 仰付。
 ○寧隆家記ニ云、二月廿日、御用ニ付、租稅相心得候者差出候様御達ニ付、一人申付上京爲致候。

○衛滋家記ニ云、二月廿日、家來之内貳人 太政官差急御用ニ付、當分御雇被 仰付候段御達ニ付申付、同廿七日京著。
 ○二月二十五日足守藩へ達書

其方家來之内、郡村事務關係之者、太政官へ御用ニ付、當分御雇被 仰付候條、至急可差出旨 御沙汰候事。
 二月 太 政 官

木下利恭家記

○加藤明實家記ニ云、二月晦日、御雇ノ家臣、德野耕平、川島爲三郎御呼出ニ付、留守居差添、太政官代へ罷出候處、内國掛辻將曹、青山小三郎、會計掛小原仁兵衛、及出席、左之通口達有之、徳川領初總テ 天料ト相成郡村、其藩各方へ取調被 仰付候間、其村々當時金穀何程殘有之候哉、收納之穀其土地ニ隨ヒ拂立候歟、又ハ大坂、京師等へ引取候儀共、都合宜敷ニ應シ取計候様被 仰出候、尤其邊之所ハ町人共へ申付置候間、其者共御引連有之、便利宜敷様取計可被成候、猶委細之儀ハ、國々郡村割合、兩三日中御達可申候、就テハ鎮撫總督、東海道、東山道へ御越有之、御方々へ御窺之上、御執計可被成被 申渡。

○長義家記ニ云、二月三十日、御雇ノ家臣、西岡喜津治、三保正太郎、田村曾八右衛門、太政官へ罷出、於松之間、内國事務辻將曹、青山小三郎、會計事務小原仁兵衛出坐、今般御雇被 仰付候、御用向之義ハ、諸道へ被差遣、鎮撫使並裁判所之方へ罷越相伺ヒ、金穀共其所々ニテ御入用引殘之分、早々京師へ差送り可申、尤近日之内諸道へ御割付、竝日限等被 仰出候間、用意致置候様内達有之、

但其節、掛リ町人壹人ツ、被差添候旨モ被申間、諸藩御雇人何レモ被召呼、同様被相達候事。

三月五日、御雇ノ家臣三保正太郎、京極佐渡守家來福田又助、朽木近江守家來竹内三郎助三人一同呼出ニテ、内國懸リ青山小三郎ヲ以、北陸道筋爲取調被差遣候旨達シ、

但鎮撫使金澤表ニ被爲入候間、夫迄罷越候様可仕、尤明後七日出立可致處、會計局ヨリ御差添之仁モ有之、用意出來兼候

二付、來ル十日頃、出立心得罷在候様被申聞候。
一會計事務小原仁兵衛ヲ以、御印鑑竝宿々村々へ之御達御判書被相渡。

右之者爲租稅取調方御用、北陸道令通行候、仍テ宿々村々人馬無滞可差出者也。

辰 三月

北陸道宿々村々

役人中

一北陸道筋取調被差添町人

竹内三郎助
三保正太郎
福田又助
會計裁判所

林彦市
井上與助
中村伊助
渡邊伊左衛門
烏丸四條上ル所
上嵯峨
大津御用達

右被遣候間、諸事申談可取計旨達有之、同所ニテ及面會候事。

三月十七日、西岡喜津治御呼出ニ付罷出候處、此迄内達之通、來ル十九日ヨリ、東海道筋へ罷越候様被相達、左之御書取御
渡、
覺、

一道中竝滞留中食料等之儀、且人馬賃錢之儀ハ御渡相成候事、
但京都會計局ニハ請取可申事、

一先觸之儀ハ京都裁判所へ可願事、

一鑑札之儀ハ御下ケ相成候事、

一道中繪符認方之儀ハ御用ト可相認事、

一兩掛駕竝提灯、法被等之分ハ、自分ニテ相辨へ可申事、

但提燈ハ自分紋之事、

一諸道出役御割付人名、左之通被 仰出候、

尤去ル十五日御割付相成候得共、少々相違ニ付、尙又今日改テ被 仰出候事。

東海道筋

東山道筋

秋月右京亮家來
岩村虎雄
脇坂淡路守家來
根來忠兵衛
市橋下總守家來
西岡喜津治
小出伊勢守家來
人羅安右衛門
木下備中守家來
更井軍次兵衛

山陰道筋

六九二
谷 大膳亮家來
田口盛右衛門

森 對馬守家來
小西定十郎

小出伊勢守家來
山内孫右衛門

山城國

牧野豊前守家來

木戸益藏

加藤能登守家來

德野耕平

大和國

牧野豊前守家來

森河大次郎

加藤能登守家來

川島爲三郎

河内國

加藤遠江守家來

和泉國

龜田文左衛門

九鬼大隅守家來

中 新平

脇坂淡路守家來

三澤精之進

木下備中守家來

角田喜助

攝津國

木下備中守家來

鳥羽宗郎

谷 大膳亮家來

添田唯平

森 對馬守家來

小牧半十郎

小出伊勢守家來

甲田次郎右衛門

戸田大和守家來

山陽道筋

西海道

筑前、筑後、豊後

六九四
新恒藏

肥前、肥後

九鬼大隅守家來
 近藤團次
 朽木近江守家來
 居間良助
 加藤遠江守家來
 岡本儀助
 脇坂淡路守家來
 本莊利之助
 市橋長義家記
 內國事務局叢書

○附三月朔日西大路藩申請書

今般諸道へ御遣相成候蒙 御内命候ニ付、不取敢、用意仕候義モ御座候間、心得方之義、左之通奉伺候、

- 一金穀差出並書狀等差上候節、御名宛之義奉伺候、
- 一鎮撫使移御所置ニテ、米穀御預ケニ相成候箇所之外ニ、未タ御手入無之村方モ取調可仕哉、
- 一諸藩へ御預ケ之箇所ハ、其藩々ニテ取調仕置可申、此分モ其藩々ヨリ金穀差出候様可申付哉、
- 一諸道へ御遣相成候ニ付テハ、役名之義奉伺候、

- 一御用鑑札之義御下ケニ相成候様奉願候、
- 一道中繪符板認方之義ハ如何可仕候哉、
- 一道中人足賃錢之義如何可仕哉、
- 一道中休泊旅籠之義ハ被下ニ可相成哉、自分賄ニ可仕哉、
- 一兩掛 駕 挑灯 法被
- 右等之品御下ケニ可相成義御座候哉、自分ニテ用意仕候節ハ、印之義如何可仕候哉、
- 右之趣早々御差圖被成下候様仕度奉伺候、以上。

市橋下總守家來
 西岡喜津治
 三保正太郎
 田村曾八右衛門

○七日批紙

- 第一條 會計局判事名宛ニテ指出可申事、
- 第二條 鎮撫使御所置ニテ、御預ケ相成候箇所ハ勿論、其餘御手入無之村方之内、舊幕領並家來領分等ニテ、何方ヨリモ取
 締無之場所ハ臨時取調可申事、
- 第三條 諸藩へ御預ケ之箇所ハ、其藩々ヨリ取調、會計局へ伺可申出管ニ候間、此分ハ金穀差登候様之差圖ニ及不申候事、
- 第四條 役名之義ハ追テ御沙汰之事、
- 第五條 鑑札之義ハ御下ケニ相成候事、
- 第六條 御用ト認可申事、

第七條 人足賃錢之義ハ、兼テ御定之通相拂往來可致事、

但御雇中ハ道中宿錢之義ハ被下ニ相成候事、

第九條 此ケ條自分ニテ賄可申事、

但雜用之義ハ御下ケニ可相成候事、

印之義ハ勝手次第之事。

市橋長義家記

○蜂須賀茂韶、親征ノ扈蹕タラシコトヲ請フ、從衛既ニ具ルヲ以テ、姑ク京師ヲ留守セシム。

過日上京後、喪中謹慎之折柄、御廟議之御一端ヲモ不奉伺候得共、杞憂之餘、不取敢、愚昧之管見言上仕候所、彌浪華 行幸被遊候趣被 仰出謹テ奉畏候、勿論深 御廟議ヲ被爲盡候上 宸斷ヲ以、多恐モ斯迄 聖躬ヲ被爲勞 御親征被遊御儀ニ可被爲在候得ハ、最早可奉橫議儀ニモ無御座、隨テ微臣忌明モ仕候事故、家督御禮奉申上候上ハ、何卒供奉之列ニ御指加被 仰付度奉存候、尤供奉之諸藩、疾御治定ニモ相成居候事ニハ可被爲在候得共、何分ニモ此度之御盛舉 闕下ニ滞在空敷坐臥罷在候テハ、實以遺憾之至、臣子之至情默止難仕、只管奉懇願候間、宜敷 御諒察被成下、同列ニ御指加被 仰付被下候様、幾重ニモ奉願候、以上。

二月廿九日

阿波少將

○本日批紙

供奉之諸藩御治定相成居候ニ付、難被及 御沙汰、尤追テ被召加候儀モ可有之哉ニ付、先滯京御留守中可致守衛被 仰出候事。

辨事局記

○毛利元周ノ退老ノ請ヲ聽シ、養子元懋ヲシテ其封ヲ襲カシム。

○朔日申請書

隱居奉願候覺、

長門宰相内證分

毛利左京亮

無高

辰四十二歲

毛利宗五郎

辰二十歲

私儀、兼テ持病之留飲、時々衄血有之、加之頻々痲痺、近來別テ相募候ニ付、種々療養仕候得共、一體年來持病之儀ニ御座候得ハ、所詮全快出勤可仕體無御座、未隱居相願候年輪ニハ無御座候得共、即今之御時勢上京等モ難得仕、空々罷在候之段深奉恐入候、依之、隱居被 仰付、家督無相違、同氏宗五郎へ被下置候様奉願候間、此段宜御執奏可被下候、以上。

慶應四戊辰年二月廿八日

毛利左京亮兩判

毛利元敏家記

○毛利左京亮事、久々所勞罷在、即今之御時勢上京モ難仕深奉恐入候間、隱居被 仰付、家督無相違、同氏宗五郎へ被下置候様奉願度申出候、於私モ同様奉願候、此段 御執奏所仰御座候。

二月廿八日

長門宰相

毛利元敏家記

○本日達書

毛利左京亮

從來多病隱居願之趣、尤ニ相聞候間、被 聞食候、就テハ同氏宗五郎へ、家督無相違被下置旨被 仰出候事。

慶應四戊辰三月五日

御印

復古記 卷四十三 明治元年三月五日

六九七

長門宰相

末家毛利左京亮、從來多病隱居願之趣、尤ニ相聞候間被 問食候、就テハ同氏宗五郎へ、家督無相違被 下置旨被 仰出候、仍爲心得申達候事。

○脇坂安斐、藩事ヲ以テ歸封ヲ請ヒ、堀直賀、封疆會津ニ隣スルヲ以テ、先ツ歸リテ民心ヲ鎮

○朔日安斐申請書

播、攝入交之場所、人民動搖イタシ候付、爲鎮撫人數差出候様、過日被 仰付候付、則出張爲致候處、右等之邊ヨリ城下近邊、何トナク人心不穩、就テハ一ト先歸邑、夫々鎮撫方申付度、暫時御暇被下置度、尤牧方邊警衛人數之義ハ、京師ニ殘置申候、且亦御用之節ハ速ニ上京可付候間、此段奉伺候、已上。

三月

○本日批紙

願之通御暇被免候事。

脇坂安斐家記

○

私儀

兼テ被爲 召候處、舊冬以來申上置候通、病氣ニテ追々遅延罷在候處、當今形勢不容易ニ付、乍病中押テ上京仕度、夫々用意モ仕、來ル廿八日發途之心組罷在候處、在所ヨリ以急飛申越候ニハ、今般賊徒 御征伐ニ付テハ、人心不穩折柄、北陸道

御鎮撫使御下向ニモ相成候ニ付テハ、種々浮說等申唱、不容易次第相成、爲夫領内人心居合不申、致動搖候趣申越、心痛當惑至極奉存、此上自然如何様之事情ニ可押移哉モ難計、殊ニ領内之儀ハ、會津最寄之儀、其上居所間近ニハ桑名預所等モ多分有之、當今之御時勢、何様之變動ニ可相成哉モ難計奉存、然處、私留守中ニテハ別テ取締方モ不行届、萬一心得違之取計方等御坐候テハ、奉對 朝廷不相濟儀ト深奉恐入、就テハ切迫之場合片時モ猶豫仕兼、一先在所へ罷越、取締向等嚴重申付置、且領内人心居合方等迄、精々申諭之上、早速上京可仕候間、前顯之次第 御憐察之上、御聞置被成下候様、此段奉願上候、以上。

二月廿五日

堀 左京亮

内國事務局叢書
堀直弘家記

○本日批紙

願之通御暇被 免候事。

堀直弘家記

○案スルニ、批紙、書意ヲ誤解スルニ似タリ。

○板倉勝尙、嚮ニ朝會ノ命ヲ奉シ、又奥羽應援ノ令アリシヲ以テ、書ヲ上リ、入觀歸藩ノ決ヲ稟ス。時ニ江戸ニ在リ是日、批シテ入朝セシム、勝尙遂ニ朝スルヲ果サス。

王政御復古大政御一新ニ付、迅速上京可仕候様御沙汰之趣、謹テ奉畏候、就右上京可仕之處、昨年來足痛ニテ難澁仕候處、猶又舊臘ヨリ時候ニ相障、療養仕候得共、冤角相勝不申、長途之旅行難仕、不得止、出立及遅々甚奉恐入候、然ル處、爲 御追討 官軍御進發ニ付テハ、奥羽之諸藩申合應援之御沙汰ニ付、不取敢、在所表へ其手配申遣シ置候得共、元來人少之弊藩ニテ大ニ心痛仕候處、御親征ニ付、軍旅用意仕 御沙汰次第奉 命可馳參旨ヲモ被 仰出候御書附之趣謹テ奉畏候、最早追々切迫之御場合ニ付、歸邑仕 官軍方御指揮可奉待哉、舊冬已來不快罷在候得共、斯ル御時勢ニ付、押テ早々上京可仕

哉、兩様之儀奉伺候間、可然 御沙汰被成下候様、此段奉懇願候、以上。

三月朔日

板倉 甲斐守

内國事務局
板倉勝達家記

○本日批紙

氣分快方候ハ一先上京可致事。

板倉勝達家記

○老臣申請書

奥羽之諸藩申合應援之 御沙汰其後被 仰出候御儀等御座候處、甚切迫之御場合ニ付、在邑仕 官軍方御指揮可奉待哉、且病氣ニ罷在候得共、押テ上京可仕哉、奉伺候處、氣分快方ニ候ハ、一ト先上京可致之旨御附札之趣、謹テ承知奉畏候、右ニ付、私儀急速罷下リ、甲斐守病氣快方ニ御座候得ハ、上京可仕様申達候ニ付、一ト先歸府仕度、此段奉伺候、以上。

板倉 甲斐守家老

三月七日

澀川 教之助

板倉勝達家記

○本條、批紙ヲ伏ス、勝達家記ニ云、澀川教之助、三月十日京都出立、同十八日江戸ニ著ス、然ルニ、甲斐守、既ニ當月四日出立、福島ニ赴ク、依テ福島ニ歸リ、御附紙ヲ以テ御達ノ旨、甲斐守ヘ申傳フ。

○再申書

甲斐守進退奉伺候處、病氣快候ハ、一先上京仕候様、先達テ以 御附札被 仰出候ニ付、其段爲申達、家來共早速罷下候處、著府已前、奥州筋當今之形勢ニ乘、浮浪之徒多立廻不穩趣ニ付、進退伺中ニハ御座候得共、事至急之義ニモ有之、機會不取失様、不取敢、在所表ヘ一先立歸罷越、家來共ヘ嚴重手配申付置、直様歸府 御沙汰奉相待候心得ニテ、在所表ヘ罷越候處、前條一先上京仕候様蒙 御沙汰、難有承知奉畏候、右ニ付、急速在所表發途上京仕候心得ニ御座候處、不圖、從仙臺表、

以急使、會津御征討之從 御總督様 通御之節、城内 御本陣應援等之儀、精々手配仕候様、別紙之通被 仰付候ニ付、最前於京地伺之上ニモ御座候間、上京仕候段如書附奉申上候處、猶又別紙之通以 御附札 御沙汰御座候間、右別紙兩通寫相添、此段奉申上候、以上。

板倉 甲斐守内

永島 利助

四月十二日

○別紙二通

板倉 甲斐守

今般、會津征討應援之手當、精々可有之、且又其藩通行之節ハ、城内可爲本陣事。

鎮撫 總督

三月廿四日

○ 先達テ、甲斐守ヘ上京可仕旨、從 朝廷御沙汰御座候處、折節病氣罷在、追々延引仕候ニ付、爲名代重役之者爲差登、別紙三月朔日ソ之通相伺候處、御附札ニテ上京可仕旨被 仰出候、然ル處、此度會津御征討之應援手當可仕、且又當藩 御通御書ヲ指ス、之節、當城可爲 御本陣旨、以御書付被 仰付奉畏候、此節病氣快方ニ相成、且追々上京仕候様被 仰出候ニ付、應援手當御宿城之儀ハ、家來共ヘ申付置、來ル廿八日在所發足仕候、此段御届宜申上旨、甲斐守申付越候。

板倉 甲斐守内

松原 作右衛門

淺井 貞之丞

三月廿六日

御附札寫 此度上京之處、一先見合、會津征討之應援致シ、奏功之上、上京可有之候事。

辦事局記

○小笠原長國、大坂ニ抵リ、書ヲ裁判所總督醍醐忠順ニ上リ、屏居シテ罪ヲ待ツ、又之ヲ朝廷ニ稟ス、是日、批シテ京ニ入り後命ヲ俟シム。

○總督ニ上ル書

佐渡守儀、舊冬以來、從 朝廷被爲 召候末、御當地迄參著仕候處、追々被 仰渡候次第有之、甚以奉恐入候、依之、差扣罷在候儀ニ御座候、以上。

二月廿八日

小笠原佐渡守家來

山田勘右衛門

小笠原長國家記

○舊冬佐渡守儀、御用被爲在候ニ付、上京仕候様被 仰出候砌、持病ノ疝積ニ付、快方次第、早速上京可仕旨奉申上置候處、猶又舊臘更被爲 召候付、其段申遣候處、追々快方仕候付、押テ上京仕候積之處、別段奉歎願度次第御座候付、旁差急手續仕候由、然ル處、去月十八日、被 仰渡之趣急便ヲ以申遣候處、船中行違ニ罷成、同廿七日、大坂表迄參著之上、右 御沙汰之趣奉拜承之、重疊奉恐入候、依之、上京之儀ハ差扣罷在候、此段奉申上候、以上。

三月二日

小笠原佐渡守家來

山田勘右衛門

辦事局叢書
小笠原長國家記

○本日批紙
上京謹慎罷居、謝罪之實効相立候ハ、何分之儀可被 仰出候事。

小笠原長國家記

○佐渡守儀 御沙汰之末、昨十一日大坂表出船、今十二日、千本通、一條東へ入、大超寺へ旅宿謹慎罷在候、此段御届奉申上候、以上。

三月十二日

小笠原佐渡守家來

山田勘右衛門

小笠原長國家記

○稻垣長行ノ老臣京ニ在ルモノ、龜山藩ニ因リテ書ヲ上リ、其主ノ爲ニ哀ヲ乞フ、是日、批シテ長行ヲシテ歸順ノ實ヲ舉ケ、後命ヲ俟シム。

去月廿五日、於四日市驛、勢州龜山藩取次ヲ以テ、橋本少將枝、柳原侍從枝へ、別紙之通歎願書奉差上候處、御落手被成下、主人儀 御不審之筋御座候間、家來之者一同、追テ 御沙汰御座候迄謹慎罷在候様、且歎願之趣ハ、神妙之旨被 仰渡、難有仕合奉存候、然處、歎願之趣被爲遂 奏聞、家來之者早々上京可仕旨、去朔日被 仰渡候段、龜山藩ヨリ通達ニ付、直様同道、同七日京著仕候、歎願書之通、主人並家來之者一同悔悟仕、皇國之御爲、誠忠盡力可仕赤心ニ御座候間、格別之 以 御憐愍 御宥免之 御沙汰被成下度、難堪痛心猶亦奉歎願候、誠惶謹言。

稻垣平右衛門家來

山本唯右衛門

門野豐右衛門

門野但見

二月廿二日

○別紙

去三日、徳川慶喜上洛、先供人數伏見表迄相登候處、如何之譯柄ヨリ事起候哉、異變之儀出來、遂ニ戰爭罷成候處、主人稻垣平右衛門人數モ食料米警固、於大坂表去朔日被申付、不得止罷登、其節伏見表ニ止宿罷在候處、右異變大小砲之響ニ相驚、著具等モ用意不仕、殊更食料米警固之儀ニ付、直様淀表へ引退、食料米之方心配罷在候處、戰爭之人數追々敗走、平右衛門人數へ入交リ候ニ付、大小彈丸飛激、少人數之儀、何分危急之場ニ至リ候處、役々ヨリ因差圖聊相支、食料米追々繰下ケ候儀ニ御座候、然處此度、徳川慶喜御追討被 仰付候段、御高札之趣始テ奉傳承、重々奉恐入候次第ニ落入、後悔仕候得共、實以不得止場合ニテ、奉對 朝廷異心等毛頭無御座、右之次第主人承知仕候ハ、恐入早速御詔可奉申上儀ト奉存候得共、在江戸ニ付、彼是相延、在邑家來共、一同不安恐懼痛心深奉恐入候、勿論主人儀、奉對 朝廷、異存ハ決テ有御座間敷、皇國之御爲、誠忠盡力仕候儀ト奉存候間、不願恐此段只管奉歎願候、何卒寛大之 御仁恵ヲ以、赤心悔悟之處 御洞察御聞濟被成下度、仍テ家來一同ヨリ不取敢奉歎願候、誠惶謹言。

正月廿四日

稻垣平右衛門家來

山本唯右衛門

門野豊右衛門

門野但見

稻垣長敬家記

○志州鳥羽藩三人、宗十郎家來同道上京仕候段、先達テ御届申上候處、右三人之者ヨリ、別紙歎願書差出度旨申候間ニ付、進退仕候間、宜御執成被下置候様奉願上候、以上。

二月廿二日

石川宗十郎家來

堀池重右衛門

○本日批紙

稻垣平右衛門家來三人上京歎願之趣、尤之旨趣ニ候得共、主人歸邑歸順之道相立實行ヲ舉候上、寛宥之 御沙汰モ可有之候間、三人之儀先御用無之候ニ付、可致歸國被 仰付候事。 石川成徳家記 稻垣長敬家記

○松平頼英、本多助成、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。頼英ハ兵士一小隊ヲ附ス○松平頼英家記、内國事務局叢書

○大總督熾仁親王駿府城ニ入ル。先鋒總督橋本實梁、副總督柳原前光來會ス。東征紀略

復古記 卷四十三 終

一等編修官	長松	幹
四等編修官	四屋	恒之
二等協修	中村	鼎五
十二等出仕	石津	發三郎
六等掌記	澤渡	廣孝
八等掌記	松浦	辰男
一等繕寫	小川	長和
二等繕寫	小島	春
二等繕寫	藤園	賢意

檢閱

一等編修官	重野安繹
一等編修官	川田剛
三等編修官	藤野正啓
監事	三浦安

復古記 卷四十四

明治元年戊辰三月六日ニ起リ八日ニ至ル

○三月

六日、九州鎮撫總督澤宣嘉ニ命シテ、西海道ヲ統轄セシム、因テ薩摩、肥後以下ノ諸藩ニ令シ、舊代官地檢査等ノ事、之ヲ總督ニ申セシム。

九州一圓御委任之義御願之趣承候、先般從 朝廷差向民情爲鎮定、最寄之藩々へ代官地所取締被 仰付候得共、實地諸藩之方向御點檢之上、夫々御改候テ宜候間、御改可被仰越候、尤九州之義ハ總テ御委任ニ相成候事。 内國事務局記

○案スルニ、内國局記達留中、此書ヲ載セテ其名ヲ署セス、蓋シ澤宣嘉ニ令セシニ係ルコト疑ナシ、但、書中御願之趣云云ハ、別ニ見ル所ナシ。

各通 薩摩少將

細川越中守

奥平大膳大夫

黒田甲斐守

中川修理大夫

久留島伊豫守

九州取締之義、鎮撫使へ御委任ニ相成候間、先般御沙汰有之候元代官地所取調之上、鎮撫使へ可申出候、此段爲心得申達候事。

○鳥津忠義家記、五日トス。

○七日達書

各通 筑前宰相

肥前前中將

黒田下野守

長崎並九州等、今般鎮撫使へ御委任ニ相成候間、爲心得申達候事。

三月

○鍋島直大家記、八日トス。

○十二日達書

秋月長門守

九州取締之儀、長崎裁判所へ御委任ニ相成候間、預り地高辻帳等取締、長崎へ指出伺事等、總テ同所へ可申出候事。

内國事務局記

○十七日達書

薩摩少將

日向國元郡代窪田治部右衛門支配地、昨年、伊東左京大夫、秋月長門守、内藤備後守へ舊幕府ヨリ預ケ候趣、右ハ其儘三藩ニテ差配可有之筈ニ候、此旨可相心得候、但内藤備後守義ハ、順逆向背不分明之廉モ候ハ、其藩ニテ、地面取締向差配有之義勿論之事ニ候、右等之邊、長崎裁判所へ申出、萬事可受管轄候事。

内國事務局記

○十八日達書

各通 薩摩少將

奥平大膳大夫

中川修理大夫

黒田甲斐守

久留島伊豫守

御領所御用向爲取扱役人、兩三人ツ、爲致在京候様、去月五日、相達置候へトモ、西海道之義ハ、長崎裁判所へ引受相成候ニ付、同等都テ同所へ可申出、仍テ右取扱役人出京ニ不及候事。

内國事務局記

○十七日達書

肥前侍從

太政官ヨリ諸達布令等、一切九州鎮撫使へ其藩ヨリ可被申入候事。

内國事務局記

三月

○肥前藩申請書

演説覺、

太政官代ヨリ諸御達御布令等、一切九州鎮撫使へ申入候様被 仰付候、付テハ海路之節ハ、於津々浦々、増舸子等手當仕候様之儀モ可有御座、將又陸路ニテ人馬之繼立等、遅々不仕様、兼テ鎮撫使御用之小旗被相渡置、其段海陸共御觸達相成居候様有御座度候。

肥前侍從内

百武作右衛門

三月廿二日

復古記 卷四十四 明治元年三月六日

○鍋島直大家記、此事ヲ佚ス、批紙モ亦詳ナラス。

○附澤宣嘉書翰二通

當地ハ餘程暖氣相催、菜花桃花滿畝ニ有之候、上國ハ如何哉、益御安靜可被爲在ト令恐賀候、誠過日發途之前ハ、每事御面
勵相伺恐入候、風波之都合モ有之、且甲部ニテ佛公使應接之事件モ有之、彼是遷延、漸本月十四日夕著崎、十五日朝揚陸、其
後事務多忙ニハ候得共、先以無異消光仕候條、乍恐御安意願上候、當地著後庶務取調候處、舊來之大弊痼結之廉、一洗不仕
候テハ、下民難澁之儀不勘候ニ付、夫々所分仕候、何分役名之者多分有之候場所ニテ、自ラ弊モ多分有之、御遙察願入候、委
曲ハ三四郎ヨリ御聞取給候ハ、御了解之儀ト奉存候、於 貴君モ嘸々御多務之御事ト奉察候、隨分爲國家柱石之御任、御
保護專要奉存候、別書之件々是亦篤ト事情御聞取願入候、何レ其内取調候件々ハ、逐一可及言上候得共、先不取敢事件申上
候、且別段極内密申上置度候事件ハ、從來肥、筑兩藩之儀ハ、別テ當地之人望相背キ居候事有之由ニ付、此度諸藩士會議ノ
者悉ク分散爲致、井上聞太、佐々木三四郎、野村總七、松方助左衛門、楊井謙藏杯、其他正直ニシテ才幹アリ、且人望之歸シ
候者登庸仕、地役人忤急度申付、是迄之墮風ヲ一改革仕候覺悟ニ有之候處、右ニ付肥、筑杯頗ル不平之由ニテ、何カ内密談
モ有之哉之由ニモ承候間、何分 小生心得ハ皇風ヲ八紘ニ及ホシ、萬民塗炭之苦ヲ救ヒ、 聖恩ヲ仰キ候様仕度所存ニテ有
之候付、是迄之弊風通ニテハ逆モ難行届相考候處、前文之様ニ私論モ可被行哉之萌モ有之候間、イツレ 朝廷へ何トカ可
申出ト存候間、其邊情實之處ハ、乍餘所、三四郎へモ御尋給候ハ、御了解ト存候、此段極内々申上候間、宜御推察願入候、
差急大亂書高免願度候也。

二月二十日

三條 殿

内啓

宣

嘉

內國事務局叢書

内啓

此度、佐々木三四郎差出候條、別紙之情實、御聞取願入候、就テハ、

薩人 野村 總七
土人 佐々木三四郎

右、長崎裁判所參謀助役申付候、此儀ニ付内情申上度件々、實ハ諸藩士多分出崎ニ有之候處、衆議之上人材登庸仕候處、右
兩人之處當所之人望モ能々歸シ有之、且隨分急度御役ニ立可申上存候間、右之通先申付置候間、尙又自 朝廷モ徵士ヲ以、
長崎裁判所參謀助役之儀被 仰付給候ハ、都合宜敷、於本人モ一際盡力可仕ト存候、然處、御内聞ニ入申度次第ハ、佐々
木三四郎儀ハ、從來容堂並後藤象次郎杯ト、議論不相合候ニ付、先日ヨリ、度々歸國之事申來リ候由ニ有之候得共、右申付
候ニ付テハ、本人モ可相動覺悟ニ有之、且又外ニ人物モ唯今難有之ト存候間、其邊御含ニテ、今度上京之便ニ、容堂並象次
郎等ヨリ、抑留致シ候モ難計ト深心配仕候條、岩倉殿ニハ、先頃容堂ヲ御控キノ御様子モ拜承仕居候事故、右様抑留イタシ
候様之儀有之候ハ、爲 國家御說破被爲遊給候儀、偏ニ希入存候、何モ御勘考之上、宜御盡力願入候、右様ノ嫌疑モ有之
候間、堀直太郎ヲモ差添差出シ候間、何分之儀宜希入存候、差急大亂書御推覽希入候也。

二月二十日

三條 前中納言 殿

岩倉 前中將 殿

内啓

宣

嘉

內國事務局叢書

○是ヨリ先、高松保實ニ命シテ、其子實村ヲ召還ス、是日、保實ニ付シテ之ヲ幽ス。

御清安令賀候、然ハ東國之儀御細示承候、何分御引戻ニ相成候様ト存候、殊ニ横濱邊へ罷越、暴舉等有之候テハ、不容易大失措ニモ可相成候間、右様、之儀決テ無之様、厚御心配御取計可給候、右邊之處モ御不安心ニモ候ハ、猶更早々御引戻シ無之テハ、實ニ心配之事ニ御座候間、深御厚配之様ト存候、此等之趣、三條亞相始御同席申談御答申入候、尤拜見之書面類ハ、總テ三條家へ差出置候、仍如此也。

辰 二月 十三日

實 愛

高松 三位 殿

高松保實家記

○保實家記ニ云、男正五位實村、去ル戊辰正月十七日夜ヨリ脱走出陣、三月二日歸京、同六日、其廉ヲ以謹慎被 仰付。
○山内豐範、大坂ニ在リ、病ヲ以テ藩ニ歸ラント請フ、之ヲ聽ス。

此度 御親征御沙汰ニ付、上京仕心得ニ罷在候折柄、堺表事件ニ付直様登坂仕候、仍テ速ニ上京仕、奉伺 天機度素志ニ御座候處、發程前ヨリ瘡疾ニ被犯、從來ノ持疾御座候上、初テノ瘡疾猶以逐日疲勞平臥ニ罷在、不遠中、參 朝可仕見付モ無御座、且容堂儀上京ノ儀ニ付、歸國仕療養相加へ申度、當御時節惶懼ノ至ニ御座候得共、不得止奉言上候、御憐察被爲加、宜御評議被 仰付度奉願候、以上。

三月 五日

山内 土 佐 守

山内豐範家記

○本日達書

山内 土 佐 守

内國事務局記

過日上坂、其後登京可伺 天氣之處、依所勞歸國願之通被 仰付候事。

○大總督熾仁親王、三道ノ先鋒總督ニ令シ、本月十五日ヲ期シテ、江戸城ヲ進撃セシム。東征總督記

○東山道先鋒、賊長近藤勇ヲ勝沼驛甲斐山梨郡ニ撃チテ、之ヲ破ル。東征總督記

○諸道ノ兵、賊ト鋒ヲ交ユル、此ヲ始ト爲ス、爾後戰爭大關係ナキモノハ之ヲ略ス。

○田安慶頼、中納言、德川氏三卿ノ一、後藩屏ニ列シテ德川氏ヲ稱ス書ヲ東海道先鋒總督橋本實梁ニ上リ、勤王ノ素志ヲ陳シ、且德川慶喜ノ爲ニ哀ヲ乞フ、是日、命シテ慶喜謝罪ノ實ヲ舉ケ、且緩急ノ際、親子内親王ヲ護衛セシム。

○三月三日哀請書ニ通

今般 王政御復古被仰出、依之、近畿始宗家ニ於傳來仕候地、夫々御鎮撫之御處置故、是迄慶喜相傳仕候攝、播、泉之地モ、右ニ準シ既ニ上知被 仰出、引續甲州采地モ、不日御沙汰モ可有御坐哉之由、陣屋詰之者ヨリ申運傳承敬伏仕候、臣慶頼、兼々謹慎一途 皇國武門之要道ヲ全シ奉報 國恩赤心ニ付、累年無他事弓馬講究罷在候處、不測、宗家當節之場合ニ立至候段、痛恨恐懼今更嘆願愁訴之道無之候得共、抑 朝廷之 御寛大ヲ以、三家共之内、其外ニモ恭順之輩ハ、領地等先々之通被 仰出候趣ニ敬承仕、誠廣大之 天恩、偏ニ國家萬全貴賤安堵 御仁政之基ト奉欣戴、臣慶頼素ヨリ勤 王盡忠之志願ニ付、何卒微衷奉蒙御亮恕、御仁德ヲ以被列武族、主從同心協力必至勉勵奉答 朝恩度、此段御採用相成候様、只管奉懇願候、誠惶謹言。

二月

田安 中 納 言

慶 頼

○謹テ奉言上候、不肖臣慶頼、乍愚昧家定依遺言、無餘儀家茂幼年ニ付政務後見仕、追々成長ニ隨被免、然ル處其後ニ至、右勤

職中不都合之事共有之、奉對 朝廷奉恐入候間、官位一等辭退隱居奉願候處、願之通被 仰出、今年迄久々政務ニ關係不仕、只々謹慎罷在候處、今般慶喜不所存ヨリ事起、奉蒙 朝敵之罪名候段、誠ニ以絶言語奉驚嘆、於慶頼モ深奉恐入候、然ル處、慶喜東歸後無間 靜寬院宮、天璋院殊之外心配被致徳川家政之處、引請相談致吳候様、厚沙汰有之候得共、奉對 天朝深奉恐入候段ヲ以、固辭退仕候處、當今不容易場合、殊ニ兩所ハ女儀事故、深前後之處心痛被致候ニ付、無異儀承諾致候様申聞、尤 御所へハ從 靜寬院宮、假令日々罷出家政向相談仕候共、無念ニ不相成様可申上置旨沙汰有之、不肖臣慶頼、素ヨリ勤王遵奉之志願ニ付、右兩所ハ別段之方々ニモ有之、深憂之折柄、再三厚沙汰被致、實以情愛之程察考仕候得ハ、何分傍觀難忍、不得止一應之請ニ及、乍微力兩所之介添迄ニ、日々罷出居候得共、夫迄共々當今之處於 御所被爲 思召候儀モ難測、深戰慄至極ニ御坐候間、願クハ此上臣慶頼微意不被爲捨、未尺寸之實功モ無之儀ニハ候得共、御場合ニテ於下賜 勅命テハ、彌以廣ク對衆人、發輝ト、主從一致朝廷正大之 御仁政奉仰、右兩所之守衛ハ勿論、天朝へノ御奉公粉骨勉勵仕度、且又慶喜謝罪之儀、今更嘆願懇訴辨解言路無之儀御坐候得共、何卒祖宗以來之儀ヲ被爲思食、寛大之 御仁政之程只管奉仰度、臣慶頼、昨今百尺竿頭一步進之望場合、泣涕奉悲願候、誠恐誠惶頓首謹言。

二月

田安中納言慶頼

東海道先鋒記
徳川慶頼家記

○本日達書

兼テ謹慎一途、且今般 王政復古之折柄、勤 王之素志貫徹致度被願出候段、神妙之至ニ候、然ル上ハ、朝敵慶喜恭順謝罪之儀、其實効屹然相立候様、格外之盡力可有之候、萬一其儀其力ニ難及候節ハ、 靜寬院宮、天璋院兩所選與之輔佐可爲專要候、尤選與ニ付テハ、其方所當今、預メ難定置候間、精々官軍中へ導送可有之候、若又其儀モ力不及候節ハ、何方へニテモ可然御場所へ護送イタシ、嚴重守衛可有之候、右秘要之機事、無油斷可被相心得事。

副將

三月

前 光
總 督
實 梁

田安中納言 安

徳川慶頼家記

○柳原前光輒誌、上申ヲ以テ五日ト爲シ、又七日田安中納言へ申付秘事アリ、之ヲ畧スト、蓋シ此事ヲ指ス。

○徳川氏ノ家臣、淺野氏祐、川勝廣運、備後守官軍東下ヲ以テ、書ヲ佛國公使ニ致シ、横須賀製鏡所造營ノ工ヲ停ム。

以書狀致啓上候、然ハ横須賀製鏡所造營之義ハ、貴國政府之御懇誼ヲ以、追々成功之運ヒ相成候處、不慮之事件差起リ、此程中ヨリ大君謹慎中之折柄、京地ヨリ 官軍下向、既ニ相州箱根ヲモ越候趣ニ有之、萬一横須賀製鏡所へモ可相越哉モ難計、乍併、先年兩國政府之允准ヲ經テ、間隔ナク取極シ製鏡所ナレハ、造營方休業イタシ候理、素ヨリ無之筈ニハ候得共、貴所様モ知ラル、通不容易形勢、實以胸焦心痛之極深ク御推慮有之度、就テハ鎮靜イタシ候迄、暫時製鏡所休業之義取計候様イタシ度、且又自國警衛之義、大君謹慎中ニモ有之、不行届次第モ御座候間、首長始同所ニ被罷在候テ、萬一不慮之義等出來候テハ不容易義ニテ、深ク心配イタシ候義ニ付、休業中横濱表へ罷越被居候得ハ、安心ニモ相成候義ニ付、貴所様モ可然ト被存候ハ、其段首長へ御通達有之候様イタシ度、尤當今之事情且切迫ニオヨヒ候ハ、製鏡所奉行臨機之取計可致旨申付、首長へモ其段申入置候義ニ御座候、右之趣ハ館へ罷出御嘶可致之處、當節國事多之折柄、同僚共人少ニ付、不得止事以書中申進候、前件之始末甚不本意ナレト不惡御承諾之上、ウエルニ君落意致候様御會話有之度、右可得御意如斯御座候、以上。

三月 六日

川勝備後守花押

淺野美作守花押

レオンロツシユ閣下

外務省記

七日、大津裁判所ヲ置キ、議定長谷信篤ヲ以テ總督ト爲ス。議定故ノ如シ、

長谷宰相

職務進退錄
長谷信篤履歷

大津裁判所總督被 仰出、近江、若狹可爲支配候事。

○信篤履歷書、十日ト爲ス、案スルニ、有栖川宮家記、三月一日ノ條ニ、當時ノ官員ヲ載セ、其中ニ大津裁判所兼近江、若狹總督長谷宰相トアリ、而シテ拜任ノ日ハ知ルヘカラス、今職務進退錄ニ從ヒ本日ニ收ム。

○諸藩ニ令シテ、士庶ノ逋逃ヲ禁シ、言路ヲ洞開シ、民情ヲ疏通セシム。

王政御一新之折柄、天下ニ浮浪之者有之候テハ、實ニ不相濟儀ニ付、士分之者ハ不及申農商タリ共、一切脫國不致樣嚴敷取締被 仰付候、畢竟言路鬱塞、政令之不行届ヨリ、自然脫國之者相生シ候事故、無上下 皇國之御爲ハ勿論、主家之爲筋等存込、建言致シ候者ハ、大ニ言路ヲ洞開シ、公正之心ヲ以、其旨趣ヲ十分ニ盡サセ、上下隔絶之患無之様可致候、尙其趣ニ寄リ太政官代ヘモ可申出候様被 仰出候事。

內國事務局叢書
春獄私記

三月七日

○堀親義ノ退老ノ請ヲ聽シ、養子親廣三之丞ヲシテ其封ヲ襲カシム、又酒井忠惇ノ入京ヲ止メ、其官位ヲ褫ク。

私儀病氣上衝其上寒熱頭痛強難儀仕、暫參 朝モ不仕、引籠療養相加ヘ罷在候處、急速全快可仕體無御座、當節柄奉恐入候間、一門堀三之丞儀、養女ヘ嫁養子仕、家名相續爲仕、私儀隱居被 仰付被下候得ハ、重疊難有仕合奉存候、依テ此段奉願候、以上。

上。

二月廿六日

堀左衛門尉

辦事局叢書
堀親廣家記

○

堀左衛門尉

病氣ニ付隱居願之通被 聞召候、就テハ一門三之丞家名相續無相違被 仰付候事。

志

堀親廣家記

慶應四戊辰年三月七日

○按スルニ、本條、內國事務局ノ達書ニ係ル、花押ハ局督徳大寺實則ナリ。

○常萬七千石所持之儘、無相違三之丞ヘ被下置候事。

堀親廣家記

○親廣家記ニ云、三月七日、內國事務總裁總裁、宜ク局督、徳大寺大納言殿ヘ高之儀相同候處、右之通御達相成。

○同苗左衛門尉儀病氣ニ付、今般隱居願之通被 仰付、難有仕合奉存候、就テハ何卒早々在所表ヘ爲引取、養生爲仕度奉存候、此段御聞置被下度奉存候、以上。

三月十日

堀三之丞

堀親廣家記

○親廣家記ニ、親義二十日上途ノ上申書アリ、之ヲ略ス。

復古記 卷四十四 明治元年三月七日

酒井雅樂頭

被 止入京官位候事。

三月 七日

官中 日家記
酒井忠邦家記

○忠邦家記、頭ノ字ヲ省ク、案スルニ、忠悖官位褫奪ノ命、宜ク正月姫路城討伐ノ時ニアルヘシ、蓋シ騷擾ノ際偶遅延セシナリ。

○鍋島茂實、支族直彬ヲシテ、代リテ長崎鎮衛ヲ按行セシメント請フ、之ヲ聽ス。直彬、九日途ニ上ル、

○朔日上申書

私儀、先般議定職外國事務權輔被 仰付、誠以難有仕合奉存候、然處、此度同姓前中將モ議定職被 仰付、重疊難有仕合奉存候、總テハ長崎表當番之儀ニ付御番請取差付、御番所其外爲巡見罷越候從前之規定ニテ、殊此度 王政御一新ニ付テハ、彼是申付置度次第モ御座候處、私儀當御役其上 行幸供奉ヲモ被 仰付置候付、御暇之儀差付奉願候モ奉恐入候處、幸此度前中將儀、末家鍋島備中守召連登京仕候ニ付、萬事右之者へ相合、先以不差置、私爲名代長崎表巡見等其外申付度奉存候、此段奉伺候、以上。

三月

肥 前 侍 從

鍋島直大家記

○本日達書

肥 前 侍 從

長崎表警衛巡見爲名代、鍋島備中守御暇歸國之儀、願之通被 聞食候事。

三月

鍋島直大家記

○直彬家記ニ、三月七日、本家へ御達トアリ。

○議定島津忠義、俸金ヲ辭ス、聽サス。

私事議定職被 仰付置候處、月給イマタ御取究モ無之候得共、此節御金五百兩被下候旨承知仕、難有奉存候、乍然累代過分之領知ヲモ被下置候付、誠以奉恐入候得共、職務ニ付被下方之儀ハ御斷申上候、此段宜敷御執 奏奉頼候、以上。

三月 六日

薩 摩 少 將

○批紙

出願之儀神妙之至候得共、金五百兩無辭退拜受可致候事。

三月

辨事局家記
島津忠義家記

○山内豊範、別子銅山伊豫宇摩郡ニ在リノ事狀ヲ陳シテ、之ヲ管理セント請フ、聽サス。

豫州宇摩郡別子銅山、住友吉右衛門ト申者、年久敷致開鑛、三千五百人許モ生業仕候者有之、徳川舊領川之江四郡米額、右銅山へ扶持方トシテ賣渡來候先例ニ御座候、仍テ此度取締ニ差向置候家來共ヨリ、當春以後渡方被差止候テハ、四千ニ近キ人口必至ト食料ニ差向へ、其上近年諸色高價ニ付、雜費甚敷、銅利年ヲ遂テ減少仕候場合、旁以忽チ生業ヲ廢シ可申、不便之至ニ付、如何可被 仰付哉、太政官之御沙汰奉伺候様申來候、然ニ彼地海陸遼遠ニ付、時々之事務鉅細共奉伺候儀、往返ニ日月ヲ曠シ、且業前ニオイテモ行届兼可申候間、銅山世話方並川之江四郡試字米額賣渡方共、一切鄙藩へ御試トシテ、四五年之内御任被 仰付候ハ、下ハ四千許之人口生業ニ放レ不申、上ハ 朝廷御爲銅利増益仕候様奉存候、此段御聞濟之上ハ、目今銅鑛之盛衰其餘跡取扱振等、委細帳面ヲ以可奉伺間、宜御評議被 仰付度奉願候、以上。

三月

山内土佐守

附箋

本文米價、去卯年分六千石之内三千石ハ、去冬悉皆相濟居候趣、残り三千石、川之江藏許ニ差置キ御座候ニ付、當三月彼地之相場參荷參荷ノ二字、ヲ以賣渡候得ハ、代金ハ限月ヲ定メ、上納爲仕先例ニ御座候。

○批紙

銅山之儀ハ、追々御見込モ可有之ニ付、願之趣難承届、尤當節之處、取締向竝職方之者扶助等ハ、從來之振合ヲ以、取計可有之候。
辦事局記

○柳生俊益、歸藩ヲ請ヒ、京極朗徹、養父高朗長門守ノ疾アルヲ以テ、歸藩ノ次響ニ在リ江戶京師ニ詣ラ
スシテ、直ニ藩ニ就カシメント請フ、竝ニ之ヲ聽ス。俊益十日、途ニ上ル、

○四日申請書

先般不容易形勢ニ付、不取敢、去ル正月申上京奉伺 天機候處、弊藩在所之儀ハ打捨置候始末ニ付、種々輕重之辨モ無之儀ト奉存候得共、右取締方暫歸邑御暇奉願上度奉存候、萬一緩急之節ハ、皇都弊邑距離厘十餘里之儀ニ付、迅速馳著準備可仕候間、何卒前件之次第被 聞食、暫歸邑御暇被下置候様奉仰願候、以上。

三月 四日

柳生 但馬守

○本日批紙

願之通御暇被免候事。

辦事局記
柳生俊郎家記

○六日申請書

右、去ル丑年出府、於同處病氣ニ罷在、尤老年之儀ニ付、快方モ仕兼、無餘儀四ヶ年之間滯府罷在候之處、此度 御一新ニ付江戶屋敷引拂、去ル廿日江府出立、今六日大津驛止宿仕候ニ付、登京之上可奉伺 天氣處、病中ニ付勤上難仕、依之、道中附

私養父長門守儀

屬仕候重臣之者差登可奉伺 天氣、長門守儀ハ、格別之 御憐愍ヲ以、歸邑被 仰付被下候様、御執成ヲ以、宜御執奏奉願候、以上。

三月

京極 佐渡守

○本日批紙

願之通被免候事。

辦事局記
京極高徳家記

○辦事局記、九日トス。

○細川興貫、森川俊方、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。細川興貫、森川俊方家記 又丹羽長國、支族一柳國敬四郎ヲシテ代觀セシメント請フ、遂ニ果サス。

左京大夫儀、兼テ被 召置候處、先般關東 御征討被 仰出、且會津御追討御座候趣ニ付、歸國仕候段、別紙御請書二月十日見ユ差上候處、抑大御變革 王政御復古之折柄、可奉伺 天機素願モ御座候得共、積年之宿痾、去冬來病勢猶更相募、永々之儀繼悴仕、逆モ長途之旅行難相成體ニテ、素願モ不相立、殘懷至極相心得候趣ニ相聞候、右之姿ニテ遷延仕候ヨリ、一類之者爲名代上京爲仕候儀、如何可有御座哉、右ハ左京大夫繼嗣無之ニ付、一類一柳信次郎弟同姓四郎儀、行々養子相續之儀奉願度心得ニテ、既ニ國許へ引取教育罷在候、未幼弱之事ニ御座候得共、重臣之者差添上京爲仕遂 召命、左京大夫素心ヲモ安候様爲仕度奉存候、此段從私 御内慮奉伺候、以上。

丹羽左京大夫家老

江口三郎右衛門

三月 七日

○批紙

伺之通可然候事。

辦事局記
東征總督記

○ 左京大夫儀、伺御用奉伺 天機旁上京仕之處、乍心外、病氣同篇ニテ長途之旅行相成兼、殊ニ左京大夫女子而已ニテ、未タ家督男子無之、且近來多病ニ相成、旁致養子度、一柳信次郎ニハ縁類ニモ有之候ニ付、同人弟四郎儀養子ニ相願度含ニテ、當春江戸表下向之節、右四郎儀二本松表へ致同道居候所、未タ養子ニハ不奉願候得共、右四郎儀上京爲致御用筋爲伺、且奉爲伺 天機度奉存候、此段御内慮奉伺候、以上。

丹羽左京大夫内

江口三郎右衛門

三月

○批紙

伺之通、四郎儀爲名代可爲致上京候事。

丹羽長裕家記

○按スルニ、前條、辨事局記、七日ニ收メ、批下ノ日ヲ署セス、東征總督往復記ニハ、書尾三月七日ト署シ、批紙ヲ十一日トス、而シテ、長裕家記ハ後條ヲ載セ、上申、批下竝ニ日ヲ佚シ、其文異同アリ、併録シテ參考ニ備フ。

○再申書

左京大夫儀、兼テ被 召置候處、積年之宿痾體悴仕、逆モ長途之旅行難相成體ニ付、爲名代一類一柳四郎儀上京爲仕奉伺 天機度段、過日御内慮奉伺候所、伺之通被 仰出候ニ付、名代之者早速上京可仕之處、今般會津御征討之應援精々手當可仕 且又領内御通行之節ハ、城内可爲御本陣旨 御總督様ヨリ御書取ヲ以被 仰付候ニ付テハ、兵勢減少不致様仕度、上京之方如何進退仕可然哉、御總督様御出陣先へ別紙之通御内慮奉伺候所、會津征討中ハ上京可見合御附札ヲ以 御沙汰御座候付、此節名代上京爲仕候儀ハ相控、討會鎮定之上、早々上京爲致候様可仕旨、國元ヨリ申越候間、此段御届申上候、以上。

丹羽左京大夫内

日野七郎治

閏四月廿八日

辦事御役所

丹羽長裕家記

○別紙之ヲ略ス。

○勝山藩美、美作警備ノ兵ヲ撤還セシヲ稟ス。

先般、作州爲御取締、池田備前守殿御人數出張ニ付、備後守人數差出、右御人數へ差加置候處、一同退陣仕候様、備前守殿ヨリ御達ニ付、去月廿二日領内迄引揚候旨申越候、此段御届申上候、以上。

三浦備後守家來

渡邊恒太郎

内國事務局叢書
三浦顯次家記

三月七日

○石川總管、徳川氏ニ請ヒ、江戸ヨリ其藩ニ歸ル。石川總管家記、
八日、橋本實麗ヲ以テ參與ト爲ス。

橋本大納言

別本官中日記
橋本實麗履歷書

參與職林和靖間詰被 仰出候事。

○實麗手記ニ云、八日、除服出仕原註、先林和靖間詰了、退出之處可見合之旨被示、申刻計於林和靖間、中山前亞相、三條前亞相列座、自今參與職並林和靖間詰可存被 仰出候旨被申渡、元來愚昧質且御時勢柄恐懼不少之間、再三雖及固辭、何分被 仰出之儀、是非御請可申上被示、依之不得止事乍恐懼御請申上、且兩卿被示曰、是迄議奏商量之分相心得候様、且至大事件ハ、太政官代可出席之旨也。

○市中取締三藩膳所、篠山、高須ヲ以テ京都裁判所ニ屬ス。

是迄、市中取締三藩、自今京都裁判所附屬候間、爲御心得申入候事。

三月八日

內 國 局

官中日記

○案スルニ、二家記、竝ニ此事ヲ佚ス。

○是ヨリ先、典藥少允高階經由安藝等、書ヲ上リ、醫學ヲ興復シ、歐洲ノ方技ヲ兼用センコトヲ請フ、是日、令シテ歐方ノ所長ヲ採用ス。

本朝醫學、從來漢土之法御採用ニテ、私共モ家祖以來、漢法ヲ以テ奉仕罷在候處、近來世上西洋醫法盛ニ被相行候ニ付、先帝様之御時、御所向ニ於テハ、夷法御採用不被爲在候ニ付、和漢之醫法勉勵可仕、就テハ醫學所被下置、學頭兩人被、仰付、竝ニ講師兩人被補、寮官人候得共、同寮内ニ於テ異存之者有之、一致不仕候儀哉、於今醫學取建候事モ無御座、其儘廢絶ニ相成、誠以歎ケ敷次第二奉存候、然處、今般、御政道御一新外國御和親被、仰出、廣ク宇内ニ、皇威御耀被爲遊候御儀ニ御座候得ハ、醫道モ、御國政ニ於テ、御仁濟之御一端ト奉存候、既ニ外國ニ於テハ、人命ニ拘リ候事故深ク貴重仕、各國ニ於テ、醫學所、醫病院、癲狂院等相設ケ、醫學ヲ相勸メ、偏ク衆庶之疾苦ヲ濟ヒ候事ニ御座候、元來外國之風俗何事ニ不拘研究ヲ重シ、日新之學ヲ貴ヒ候得ハ、切磋之功日ニ加リ、漢土古來之法ニ勝レ候事モ御座候、然處、同寮内ニ於テ、漢法修行之儀サヘ廢絶仕候事ニテ、切磋之功モ無之、唯家傳之法ニ因循シ、秩祿ヲ世襲仕、等閑ニ打過候事、誠以無冥加次第ニテ、私共ニ於テハ、深ク歎息罷在候得共、今日之形勢ニ至リ候テハ、難打捨置儀ニ奉存候ニ付、何卒早々醫學開講可仕被、仰出、和漢之醫法講習之儀ハ勿論、西洋醫法ニテモ所長ヲ採用仕、廣ク醫學ヲ勸メ、猶病院等被相設、鰥寡孤獨貧窮無資行旅艱難之者ヘ御施藥被下置、皇國ニ於テモ深ク、御仁恤之御政道被爲在候様、外國ヘ御耀ニ相成候様仕度奉存候、尤從來、和漢之法全備仕候得共、西洋法ニモ新規發明之術御座候ニ付、御採用相成候テ可然奉存候得ハ、以來一同衆法折衷、精々修行可仕

可被、仰出候、若又此儀御請不奉申上候輩ハ、其旨趣御糺之上ニテ、各和漢之醫法、精々勉勵仕候様可被、仰付候、且又、皇上ニ於テハ、是非和漢之法ノミナラテハ、御用不被爲在候御儀ニ御座候得ハ、猶更和漢之法切磋勉勵不仕候テハ、不相叶儀ニ奉存候、何分從來之舊弊一洗不仕候テハ、追々鄙拙之醫道ニ相成、外國ヘ被爲對、御國辱ニ相成候事モ御座候哉ト奉存候、猶又醫學所竝ニ醫病院等御取建ニ付テハ、内外雜科修學仕候儀ニ付、何卒實學實驗之良醫ヘ、學頭竝ニ取締役被、仰付、官醫ニ限ラス、敷澤之醫士ニテモ、材藝ヲ以テ御撰舉被爲遊、醫學講師ニ可被、仰付奉存候、醫學ハ誠ニ小道ニ御座候得共、皇國御政典御全備之御一端トモ奉存候ニ付、不省恐此段奉建言候、猶醫學修行仕法之儀ハ、前文御採用ニモ相成候ハ、追々可奉申上奉存候、以上。

二月

高階典藥少允

高階筑前介

內國事務局叢書

○本條、上申ノ日ヲ失ス。

○本日達書

西洋醫術ノ儀、是迄被止置候ヘ共、自今其所長ニ於テハ、御採用可有之被、仰出候事。

三月

官中日記

○高階經由再申書

口上覺、

西洋醫術、是迄於典藥寮ハ被差止置候得共、自今其所長ニ於テハ、御採用ニ相成候様、先達テ被、仰出一同奉畏候、尤寮内モ追々有志之輩有之候得共、右醫術傳習之儀、當時西洋醫術ヲ以テ、開業仕居候醫師共モ追々有之候得共、隨從傳習仕候程ニ學術有之候醫師無之候ニ付、何卒洋醫名譽之者、攝海迄被爲、召登居留被、仰付、有志之者共修學親炙可仕候様被、仰

出候得ハ、追々西洋醫術傳習仕候テ、皇國從來之和漢醫術等モ折衷兼備仕候得ハ、往々急度 御用ニ相立候醫師出來可仕ト奉存候ニ付、不願恐奉建言候、御採用ニモ相成候得ハ難有仕合奉存候、仍テ此段奉申上候、以上。

辰 四月 廿日

高階 安藝 守

辨事

御役所

辨事局 叢書
外國事務局 筆記

○本條、批紙ヲ佚ス、之ヲ經由ノ子經德ニ質スニ、文書散佚シテ詳ナラスト云。

○是ヨリ先、松平頼聰京ニ詣リ、屏居罪ヲ待チ、上書シテ、軍資金ヲ獻セント請フ、是日、之ヲ聽ス。

○三日申請書一通

別紙之通、先般於大坂表、家來共ヨリ奉歎願置候處、其後入京 御免被成下、冥加至極難有仕合奉存候、急速罷登、於興正寺深ク相愼、御沙汰奉待罷在候處、未タ出兵等之被 仰出モ無御座、奉恐入罷在候義ニ御座候、別紙ニ家來共ヨリ申上候通、天朝之御爲、一際奉盡忠誠度志願ニ御座候間、國力相應之御用向抽丹誠相勤申度、此段只管奉歎願度折柄、方今於朝廷モ、莫大之御用途可被爲在御義ト奉恐察、自然右等之御用筋ニテモ可被 仰付御義モ御座候ハ、乍微少此度爲持罷登居候間、速ニ調達仕候テ成共、奉報 御厚恩萬分之一度奉存候間、頼聰心中御諒察被成下、御用筋早々被 仰付被下候ハ、重々難有仕合奉存候、此段何分宜御執 奏奉願候、誠恐誠惶頓首謹言。

戊辰 三月

頼聰 花押

○口達書、

別紙歎願書ニ、何卒 御用之筋被 仰付度段、相認御座候得共、高不相應之義ハ、如何程盡力仕度心底ニテモ、中々出來不申義ニ付、精々相働、總金數拾貳萬兩追々奉獻上度奉存候間、御用途ニモ御指加被成下候得ハ、重々難有仕合奉存候、尤今般一度ニ拾貳萬兩相揃指上候義ハ、迺モ相整不申義ニ付、只今八萬兩獻金仕、殘四萬兩ハ、來巳年ヨリ二ヶ年ニ皆納候様奉願度、此段宜御執成之程伏テ奉願上候。

○別紙

先般於姫路表 御總督様へ、頼聰竝家中一統謝罪歎願之爲實證、兩姦臣小夫兵庫、小河又右衛門首級奉獻上候處、御實檢之上情實御聞届被成下、其旨可被爲及御奏 聞、就テハ不日關東 御追討被 仰付候義モ被爲在候節、兵隊指出 天朝之御爲抽忠勤顯實効候ハ、可被處 寬典旨被 仰出、重々難有仕合奉謹承、猶此上萬々宜奉願上候段、過日 頼聰謹テ御請書奉指上候ニ付、最早出兵之義被 仰付候事歎ト、日夜謹慎奉待上候處、今般 御親征可被遊旨被 仰出候由ニテ、追々諸藩御人數御練出ニ相成候様奉傳承、如何之御模様ニ被爲在候哉ト、奉恐入深痛心仕候、右ニ付、何卒乍小藩、此時粉骨碎身盡力仕、天朝之御爲抽忠勤、奉報 御厚恩萬分之一度志願ニ御座候間、乍恐相成義ニ御座候得ハ、先鋒被 仰付、御出兵之隊伍ニ御組入被成下候様被 仰付候得ハ、冥加至極重々難有仕合、武門之面目相立申候ニ付、幾重ニモ此段奉歎願候、尤御兵隊追々早御練出之御模様ニモ奉相窺候得ハ、御人數積モ有之事故、出兵之義ハ、如何程奉歎願候テモ、不相叶御義ニ御座候得ハ、此上ハ、何共致方無御座、誠以奉恐入、空ク偷安消光仕候存念ハ、頼聰ハ元ヨリ於一藩モ決テ無御座、何分ニモ出兵之外何成共、國力相應 御用向被 仰付候得ハ、重々難有仕合奉存候、譬國內之處ハ、如何様不自由困窮之配リ方ニ相成候共、斯ル御大事之御場合 天朝之御爲故、頼聰初家中一同聊相厭不申、微力之可相及丈ハ精々盡忠誠、御用之筋被 仰付候様奉蒙 仰度、只管奉歎願候間、萬端宜御執成伏テ奉願上候、誠恐誠惶頓首謹言。

頼聰 内

蘆 澤 伊 織

慶應 四辰年 二月

復古記 卷四十四 明治元年三月八日

松平頼聰家記

○高松藩記ニ云、二月十五日、於大坂、重臣ヨリ薩州藩へ指出スト。

○本日批紙

追々歎願之趣ヲ以、征東出兵可被 仰付之處、一ト先海陸御人數御配當相濟候ニ付テハ、カ、ル御時合ニ對シ、此儘罷在候儀如何ニモ難安、依テ御軍費金拾貳萬圓、調獻仕度志願之趣被 聞食届候、尤身上等 御沙汰筋之儀ハ、追テ可被 仰出候事。

○口達書批紙

願之通被 仰付候、納方儀ハ會計局へ相納可申事。

辨事局記
松平頼聰家記

○頼聰家記ニ云、御上京ニ付、二月廿五日御乗船、同廿七日大阪川口へ御著船、同晦日御入京、興正寺御旅館へ御著座、三月三日、蘆澤伊織御使ニテ、岩倉殿へ右之通御進達相成候處、三月八日辨事御役所へ留守居御呼出、御附紙ヲ以テ御達有之候ニ付、同十日、金八萬兩會計局へ御上納相成申候。

○生駒親敬大内藏交代寄合○後藩屏ニ列シ、矢島藩ト稱スノ請ヲ聽シ、命シテ奥羽鎮撫使ニ屬セシム。

○三月二日申請書

今般 王政御復古ニ付、諸侯上京被 仰出、同列ニモ追々被 仰付候趣傳承仕候、辱小臣祖先大職冠鎌足之孫、參議從三位房前之後裔、左京進家廣四代親正者、被敍從五位下、任左近大夫賜讀岐國一圓、高松、丸龜兩城者其所築候、其子一正敍從四位下任讀岐守、孫正俊敍從四位下任讀岐守、曾孫高俊敍從四位下任壹岐守、世襲父祖之所領、奉頂 朝恩候段、當時 眷遇之厚、子孫之面目誠實難有仕合ニ奉存候、然處、寛永中家隸共不都合之儀ニ付同國沒收、於出羽國矢島莊一萬石被宛行、萬治中嫡子右衛門尉高清、愛弟之餘權之助俊明二千石分知仕候、即分家旬之助祖先ニ御坐候、高濑八千石ニテ、柳之間萬石格參勤交代仕、領政向等都テ自分仕置致來候儀御坐候、兼々勤 王之志願ニ御坐候得ハ、文久四甲子歲、奉窺 天機、且敝邑

之土產ヲモ貢獻仕度旨、幕府閣老迄伺候處、其儘指揮無之、邊土之小封押テモ 朝親仕兼候段、不堪遺憾奉存候、然處、近畿

之同列追々 朝 覬仕候間、御沙汰之儀モ可有御坐哉ト、且夕渴望候得共、不任心底悲歎消光罷在候、累世全ク勤 王可

仕家筋御坐候へハ、何卒 御垂憐被成下、上京被 仰付候様奉歎願度、先達テ家隸共へ申含馳登セ候處、其後無程奥羽鎮撫

使御下向被 仰出候趣、傳承仕候ニ付テハ、小臣所領羽州之一斑ニモ御坐候へハ、分家旬之助引纏急連罷下、一萬石之御軍

役備置、緩急之御用途相勤度乍恐奉願候、然上ハ不厭犬馬之勞勉勵盡力仕、聊奉報無窮之 天恩候様相成候へハ、祖先之

本懐小臣之面目、千海萬岳難有仕合奉存候、此段出格之 御沙汰被成下候様、御執成幾重ニモ奉歎願候、誠恐誠惶謹白。

二月廿一日

生駒 大内藏

辨事局叢書

○

願意被 聞食届、奥羽鎮撫使へ被 召付候條、折角領内之人民困苦ニ不至様加勘辨、 御奉公可致様 御沙汰候事。

三月八日

生駒親敬家記

○親敬家記ニ云、王政御一新被 仰出候處、兼テ勤 王之志願ニ付、早々上京用意仕候處、奥羽 御鎮撫使下向之趣ニ付、

弊邑羽州矢島へ罷下御用相勤度段、直様京師へ家隸馳登奉願候處、三月八日、於 太政官被 仰出候御沙汰、右之通。

○東本願寺光勝、募化ノ金穀ヲ獻ス、因テ書ヲ賜ヒテ之ヲ賞ス。

東本願寺

先般爲糧米補闕東向被 仰出候處、速ニ盡力獻金神妙ニ 思召候、尙又可有誠忠勉勵候事。

三月

東本願寺記

○東本願寺記ニ云、二月廿六日光勝歸京、玄米四千俵、金五千兩獻上之事、但玄米ハ正月ヨリ四月迄、十一ヶ度ニ獻納、金五

復古記 卷四十四 明治元年三月八日

七二九

千兩八三月八日獻上ニ付、同日御書下之事。

○是ヨリ先、遠藤胤城、加藤明實ニ因リテ哀ヲ乞フ、是日、其家臣書ヲ上リ、胤城、東山道總督ニ就テ罪ヲ謝スルヲ以テ、入覲遲延スルヲ稟ス。

去月廿八日、東山道 鎮撫總督、同副總督兼、江州三上陣屋へ出張相成、詰合之家來へ別紙之通被 仰渡候段承知仕、愕然奉恐入候次第ニ御座候、右様奉蒙 勅勘候儀、悲歎痛哭之至、可申上様モ無御座奉恐入候ニ付、御城下迄罷出、謝罪歎願可仕心得ニ御座候得共、遠路彼是日數相掛遲延仕候テハ、猶更奉恐入候間、先不取敢家來共差出、此段懇願仕候間、前文之次第柄厚御汲取被成下、格別之以 御憐察、其御筋へ宜敷御執成之程奉願候、以上。

二月十六日

遠藤但馬守

胤城判

遠藤胤城家記

加藤能登守 稜

○文中、別紙家記、之ヲ略ス。

○二月二十八日加藤明實申請書

乍恐奉歎願候、遠藤但馬守儀、奉對 朝廷不埒之儀有之ニ付、江州野洲郡三上陣屋並知行所被召上、取締之儀、私へ被 仰付奉畏候、直様人數差出、人民 王化ニ服シ候様取仕居候、然處於但馬守、素勤 王志願ニハ御座候得共、定府身上進退不任意、彼是稽滯仕候内、在所三上陣屋詰之者、愚昧ニシテ不辨是非、東山道鎮撫總督様へ不明ニ御對申上候趣、何共奉恐入候、畢竟但馬守指揮不行届之所致、於但馬守深奉恐縮候、何卒出格ノ御憐憫ヲ以、入京御免被成下、勤 王赤心相貫候様被 仰付被下度奉恐願候、私儀隣壤ニ付親相交居、不忍視奉歎願候、御聞濟之程奉願上候、誠恐誠惶謹言。

二月

加藤能登守

辨事

御役所

加藤明實家記

○明實家記ニ云、遠藤但馬守家來山田小太郎、餌取圖書一人、江戶ヨリ歎願書ヲ以テ相上候處、小太郎心配ニ餘リ亂心致候哉、勢州莊野宿ニテ自殺致候、圖書一人水口へ罷出、但馬守衷情哀訴仕候ニ付、隣境之情難默止、添書ヲ以歎願仕候。

○案スルニ、明實家記、胤城ノ歎願書ヲ載セス、胤城家記モ亦云、原文散佚シテ詳ナラスト。

○從東山道 鎮撫 御總督様、江州愛知川驛於 御本陣難有仰ヲ蒙リ、右御趣意ヲ以テ、去ル二月十四日、乍恐書附ヲ以テ奉歎願置、隨 御指揮迅速東下、但馬守へ種々不容易 御寛大 御仁政之御旨趣、具ニ爲致拜承候處、無量之 天恩心膽ニ銘シ、唯落涙仕居候而已ニ御座候、此上ハ須臾モ起臥罷在候次第ニテハ決テ無御座、同月廿一日、憤然江戶表發途仕、當三月四日、濃州大垣表迄馳附候處、最前 御總督様同所 御本陣拂ニ付、夫ヨリ晝夜兼行、御進發先へ推參、御仁恕之御沙汰ニ取繼リ、第一登 京遲延之罪狀可奉歎願心底ニテ、信州路へ突出仕候ニ付テハ、但馬守登 京之儀、暫時延引可仕段、彌以多罪奉恐入候條、私共ヨリ可奉歎願様、同所ヨリ早追ヲ以申付越候ニ付、不取敢右之段奉歎願候、何分ニモ登 京遲延之罪狀相重リ候段、幾重ニモ 御寛宥之奉蒙 御沙汰度、謹テ奉祈願候、以上。

辰 三月 八日

遠藤但馬守家來

餌取圖書

塚本九一郎

○十一日批紙

登京可及延引之段ハ被 聞食届候事。

○再申書

復古記 卷四十四 明治元年三月八日

遠藤胤城家記

但馬守儀

東山道鎮撫 御總督様御進發先へ推參仕、御仁恕之 御沙汰ニ取絶り、第一登 京運滯之罪狀可奉歎願心底ニテ、當月八日、子細奉申上候通、同月六日、濃州大垣出立、信州路へ突出仕、武州蕨驛へ至著、御總督様へ相應之勤向奉歎願候處、同廿一日、於板橋驛、戸田川渡舟場御固被 仰付、冥加至極難有仕合奉存候、右之趣同驛ヨリ、早追ヲ以申付越候ニ付、不取敢 御届申上候、附テハ但馬守登 京猶更遲延仕候間、此段モ 御聽置被下置候様奉願候、以上。

遠藤但馬守家來

三月廿八日

塚本九一郎

○三十日批紙

被 聞食届候、關東鎮定之目途モ相見候ハ、速ニ上京可致候事。

遠藤胤城家記

○青山幸宜、京ニ至ル、青山幸宜家記秋元禮朝、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。辨事局記

○松平定敬、徳川氏ニ告ケテ、江戸ヲ去リ、其別邑柏崎越後蒲原郡ニ赴ク。

越中儀、兼テ築地下屋敷ニ閉居罷在候處、菩提所深川靈巖寺へ相越、猶又謹慎罷在申候、此段申上候。

松平越中家來

二月廿四日

生沼藏之丞

松平定教家記

○再申書

主人越中儀、兼テ申上置候通、菩提所靈巖寺へ閉居謹慎罷在候之處、當地ニテ謹慎罷在候テハ、自然御不都合之筋モ有之候間、遠隔之地へ相越謹慎可仕旨、東叡山ヨリ御内沙汰之趣御達ニ付、不得止事、分領越後柏崎表寺院へ罷越謹慎仕度、只今出

立仕候、尤先達テ入寺、上様御寛大之御所置ヲ相願 天譴ヲ奉待候旨、輪王寺宮様、一橋様等へ歎願書モ差出置候儀ニ付、右之趣ハ 朝廷向へ御手寄ヲ以被 仰上被成下候様仕度奉存候旨申付候、依之此段申上候、以上。

松平越中家來

三月

豊田清兵衛

松平家教家記

○定教家記ニ云、二月廿四日、定教深川靈巖寺へ罷越謹慎ス、既ニシテ官軍追々江戸表へ發向ニ相成ルニ付、萬一再ヒ齟齬ヲ醸シテハ、謹慎無二之障モ生シ、大切ノ折柄ナレハ、遠隔ノ地へ避ケヨト、慶喜ヨリ内意ニ付、三月八日、江戸出立、船路越後柏崎ニ趣キ、謹慎ス。

○中村武雄手記ニ云、初メ我公已ニ江戸ニ著キ玉ヒ、邸内ニモ入り玉ハス、晝夜御登城被爲在、會津侯ト共ニ、大坂ノ御趣意、今一度思召被爲立候様、種々言ヲ盡サルト云トモ、前將軍更ニ用ヒ玉ハス、却テ寡人ヲシテ此ニ至ラシメシハ、肥後ト越中トノ業ナリ杯仰セラシ、程ノ事故、今ハ致シ方無之トテ、築地ノ邸ニ歸ラセ玉ヒ、是ヨリ閉居シテ出テ玉ハス、江戸ノ議論ニハ、桑名モ已ニ罪ニ服シ、徳川家ニモ御恭順ノ上ハ、御謹慎ノ外有之間布トテ、謝罪狀ヲ肥後藩ニ託シテ御謹慎在セラシ、大坂ノ殘兵江戸ニ著シ、此有様ヲ見テ、有志ノ士ハ憤怒ニ堪ス、相議シテ申シケルハ、夫レ大坂ノ事、固ヨリ毫末モ 朝廷ニ敵スルノ意アルニ非ス、君側ノ奸ヲ掃ハント欲スルナリ、不幸ニシテ軍サ敗ルト云トモ、其誠心天地ニ質シテ疑ヒナシ、誓テ挽回ノ策ヲ立テ、日月ヲシテ光明ナラシムヘシ、且徳川氏奸臣ノ陷ル所トナリ、看々顛覆ニ至ントス、祖先ノ御神靈之ヲ何トカ云レナン、我藩ハ固ヨリ譜代ノ世臣、必ス興廢存亡ヲ共ニセサルヲ得ス、今主家危殆ニ臨ンテ興復ノ軍サヲ立サル時ハ、何ヲ以テ東照公ニ地下ニ見ヘン、桑名ニテハ、御母公御介弟敵中ニ在セラシ、事ナレハ、我公恢復ヲ謀ラル、時ハ、御兩君ノ事未タ如何ヲ知スト云トモ、古ヘヨリ忠孝ハ兩全ナラスト云リ、去レトモ又之ヲ處スルノ方ヲ説キ、唯其所在而致死ト云リ、今徳川氏ノ危急如此ナレハ、是親ヲ捨テ君ニ致スノ時ナリト論シケル、又恭順家ノ説ニハ、今母公介弟敵中ニ在セラ

ル、ニ、當方ニ於テ過激ノ處置アラハ、御兩君ノ御身甚タ危シ、縱ヒ德川氏ニ忠ナリトモ、御養子ノ御身ヲ以テ、御兩所ヲ死地ニ陥ラレテハ、不孝不友ノ罪ヲ逃レマシ、且德川氏モ御恭順之事ナレハ、妄リニ恢復ヲ説ク者、獨リ御兩君ニ忍フノミナラス、併セテ德川氏ニ負クナリト論ナリ、夫レ德川氏ノ社稷ハ祖宗ノ社稷ニシテ、今將軍ノ社稷ニ非ス、縱ヒ今將軍ノ措置何クニ出ルトモ、其事日光ノ御神意ニ叶ハスハ、之カ臣子タル者、豈默々トシテ枉テ其意ニ從ハンヤ、彼ノ生ヲ偷ミ死ヲ惜ムノ徒、説ヲ御兩君ト德川氏ニ借リテ、己カ偷安ノ非ヲ掩フハ、惡ミテモ猶餘リアリ、如此恢復恭順ノ一論、紛々トシテ合セス、邸中日夜ニ雜沓スル中、前將軍ハ上野ニ入テ御恭順被爲在、我公ニモ寺院ニ入テ御謹慎被爲在ルノ様、德川家ヨリ内諭アリシ故、邸中ノ有司共ハ一議ニモ及ハス、御入院ト事ナリ、有志ノ人々此事ヲ聞キ、固ク争フト云トモ用ヒラレズ、爰ニ馬場良介ト中村武雄ハ、常ニ同室ニアリ、深ク恢復ノ事ヲ語ヒケルカ、此日モ、政府ニテ入院ノ事ヲ争ヘトモ其言聽レズ、既ニ夜モ深ヌレトモ憂憤シテ寐ラレズ、遂ニ一策ヲ案シ出シ、密ニ封事ヲ認メ、明ルヲ待テ公ニ上リケリ、其言ニ曰ク、大坂ノ軍サ敗レテヨリ國事日ニ迫切シ、閣下寐テ席ヲ安ンシ玉ハス、食テ味ヲ甘ンシ玉ハス、畢竟事ノ此ニ至リシモ、微臣等其力ヲ盡スコト未タ至ラサル故ナレハ、實ニ悲痛感愴ニ堪ヘサルナリ、往事咎ムルト云トモ益ナシ、責テハ力ヲ將來ニ盡シ、前日ノ罪ヲ償ン、是臣等夙夜志ス所ナリ、抑古ヨリ忠臣義士冤枉ヲ負ヒ、其志ヲ明ニスルコトヲ得サル者、歴々一ナラスト云トモ、今日ノ事ノ如キ、奸黠ノ徒ニ陥ラレ、多年ノ御精忠モ、埋没シテ明カナラサルノミナラス、忌々シキ朝敵ノ名ヲ負セラレ、空ク一室ニ御幽閉被爲在、遂ニハ御入院迄被爲遊候ハ、實ニ痛嘆ニ堪サル事ナリ、如此臣子ノ情不可忍ノ時ニ至リテモ、人心未タ大義ニ振ハス、百年士ヲ養フハ何ノ爲ソ、有事ノ日ヲ待テ其用ヲ收ムルニ非スヤ、然ルニ今日ニ至リ、身ヲ殺シテ仁ヲ成スノ士ナキハ、閣下ノ御無念嘸ヤト奉深察候、是ト申スモ百年太平ノ習、深ク骨髓ニ入タル故トハ云ナカラ、閣下ノ御深意ノ在ル所ヲ知サル故ニモアラシ、今日御入院ノ事ハ、實ニ悲痛慘怛ノ極ニテ、少ク臣子ノ情ヲ存スル者、誰カ痛悼セサランヤ、閣下願ハ此ノ時ヲ以テ諸臣ヲ殿内ニ被爲召、親ク御内諭被爲在、其奮發ノ念ヲ鼓舞セラル、時ハ、群下ノ者モ閣下ノ御趣意ヲ熟察シ、頗ル報復ノ志ヲ奮ハン、然ル上、臣等モ亦自ラ盡ス所アルヘシ、如此時ハ人心漸ク振ヒ、國是

漸ク定マリ、恢復ノ地ヲ爲スニ足ラント申上ケレハ、我公ニモ殊ノ外御感納被爲在、直ニ令ヲ下シテ、一統ノ者盡ク出頭セヨトノ事ニテ、其日邸内ノ者共參殿ニ及ヒケリ、已ニ集リシコロヲ計リ、先ツ神札一枚宛テ下シ賜リ、諸臣ノ福ヲ祈ラレケレハ、皆々深ク其惠ミヲ感佩ス、頃クシテ、公出テ諸臣ニ面シ玉ヒ、皆々ノ者共大坂ヨリ以來、不一方勤勞疲勞ノ程察シヤラル、然ルニ不幸ニシテ今日ノ事ニ至リシ故、格別其勞ヲ慰スルヲ得ス、一統ノ難義嘸ヤアラシ、寡人モ不得止、今日靈巖寺ニ入テ謹慎スヘシ、汝等益其身ヲ愛護シ、報國ノ志ヲ磨キ、寡人ヲシテ少ク安ンスル所アラシメヨトテ、内ニ入ラレケレハ、皆々感愴セサルハナシ、此日公ハ遂ニ寺院ニ入ラレケリ、中村、馬場ノ兩人ハ、人心如何ト察スルニ、果シテ少ク心アル者ハ盡ク感激ニ堪ス、我公ヲシテ今日ノ言ヲ出サシムルハ、實ニ悲痛ノ至リナリト、嘆ク者コソ多カリケル、時コソ好ケレトテ其策ヲ案スルニ、蓋シ我邸中ニモ有志ノ士ナキニ非スト云トモ、同盟合從セサル故、其力分レテ權ナシ、今有志合シテ一トナリ、其議論ヲ立ル時ハ、一人二己ノ論ナラスシテ其力強シ、因循之説ヲ破ルノ策、此ニ過ル者有ルマシトテ、兼テ相澤安兵衛ハ、年輩ニテ壯士ノ望ミアル者故、先ツ此事ヲ相澤ニ謀リシニ、相澤一議ニモ及ハス、同意シタリケレハ、去ハ事ヲ謀レトテ、先ツ回狀ヲ以テ密ニ議スヘキ事アル故、深川ノ八幡へ會セヨトテ、有志ノ人々ニ達セシニ、此日會セシ者ハ廿餘名ナリ、是ニ於テ反覆痛切恢復ノ義ヲ説シ處、皆々同意シテ深ク同志ノ約ヲ結ヒケリ、是ヨリ有志ノ議論稍伸ルヲ得タリ、是時官軍ハ東海、東山ノ兩道ヨリ江戸ニ迫リ、先手ハ已ニ近ツキタリ、輪王寺宮深ク東西ノ分裂ヲ憂ヘ、之ヲ和セントテ、親ラ駿府ニ出テ、有栖川親王ニ面シ玉ヒ、講和ノ事ヲ説タレトモ其事調ハス、前將軍ハ益御謹慎ニテ、會津、莊内侯モ已ニ歸國ヲ命セラレ、大事爲スヘクモアラサレハ、我公ニハ北越柏崎ニ御轉駕被爲在、會津ト謀リテ義兵ヲ舉ラル、ノ外ナシトテ、數々大計ヲ論スレトモ、議論紛々トシテ決セズ、恭順ヲ唱フル者ハ、執政吉村又右衛門ヲ魁首トシテ、死ヲ恐レ生ヲ偷ム者ハ、盡ク其論ニ左袒シ、恢復論ノ人々ハ、政府ニハ山脇十左衛門、森彌一右衛門、町田老之丞、立見鑑三郎、馬場三九郎ヲ初メトシテ、相澤等同志ノ壯士並近侍ノ人々、谷三十郎、中山源十郎、山脇隼太郎、高木剛次郎等十餘人ニテ、日夜靈巖寺ニ會シテ事ヲ謀リケリ、是時官軍先鋒ハ已ニ箱根ヲモ打踰ヘ、神奈川、品川邊迄モ來リシニ、我藩ニテハ事未タ決セズ、空ク議論ニ日

ヲ送ルノミナレハ、有志ノ人々手ニ汗ヲ握ラヌ者ハナシ、爰ニ岡本雅次ハ、兼テ壯士ノ同盟中ニ在リ、共ニ事ヲ謀リケルカ、其父平塚與市、兄平塚照尾、深ク其非ヲ責メ、是非々々同盟ヲ脱セヨト迫リケレハ、雅次同志ニ從ヘハ父兄ニ負キ、父兄ニ從ヘハ忠義ヲ欠キ、又同志ニモ負ク故、三月五日遂ニ自殺ニ及ヒケリ、時ニ年十九歳ナリ、雅次ハ、天性質直ニシテ義ヲ好ミ、事ニ臨ンテ果決ナル者ナリシニ、惜ミテモ餘リアル事共ナリ、斯テモ議論未タ決セス、寺中邸内鼎ノ沸クカ如クナリシ、前將軍ヨリ御内諭ノ旨ヲ、大久保一翁ヨリ傳ヘラレ、越中、府下ニ在ルハ宜シカラス、僻遠ノ地ニ退キ謹慎シテ、朝裁ヲ待ツヘシト沙汰アリ、議論始テ決シケリ、兼テハ議論如何シテモ決セサレハ、公ヲ奉シテ會津ヘ走ラント覺悟シケレトモ、密ニ謀ル者アリテ事此ニ及ヒシハ、實ニ踴躍ニ堪サルナリ、山脇十左衛門ハ、預メ魯國ノ蒸氣艦ヲ裝シ置タル故、我公ニハ三月八日、寺院ヨリ築地邸ヘ還ラセ玉ヒ、其ヨリ御乗船ニテ横濱ヘ寄セ玉ヒ、横濱ニ滞在セラル、コト八日、十六日御發艦ニテ、廿三日新潟ニ達シ玉ヒケリ、山脇ハ公ニ供奉セシカ、船中ニテ、長岡ノ家老河合嗣之介ト深ク相結ヒケリ、凡ソ公ニ從ヒシ者ハ百人計リニテ、其餘ノ者共ハ、陸地ヨリ栢崎ニ至ルヘシトノ事ナリシニ、盡クハ栢崎ニ至ラス、或ハ府下ニ潛伏シ、又ハ桑名ニ歸リ、越後ニ至リシ者二百名ニハ踰ヘサリケリ、是モ器械ヲ持チ行ケト申シケレトモ、道路如何ト危ミテ攜ヘス、後ニ船ニテ栢崎ニ送リシニ、佐渡ニ滯泊中、官軍ニ奪ハレタリトソ。

○親子内親王、將ニ大總督ニ哀請スル所アラントス、因テ田安慶頼ヲシテ其臣隸ヲ撫輯セシム。

○靜寛院宮日誌ニ云、八日田安中納言に面會、官軍御進に付ては、天兵下々の者共、粗暴の義無様、少將の頼の女使差出しではいかゞや、付ては當地下々迄、猶又鎮撫之爲書取出し度趣相談す、至極宜旨返答、尤天御方へも示談候事、酉刻書付、錦を以、田安へ渡し置、

此度追討使差向られ候に付、末々に至る迄も不敬之義無之様、此程より精々仰付られ候事乍、猶又御諭遊度思しめし候、朝廷にも謝罪之次第により、いか様にも寛大の御所置有らせられ候御様子に御伺被爲有候得共、當地多人數之内には、萬一心得違の者候て、其邊より恭順之意取失候ては、朝廷にも最早寛大の思召も堪させられ、徳川家も是限之由、京都より御伺被爲有候間、假令忠義を存候ても、恭順之意取失候ては、朝廷に恐入思召候已不成、立させられ候御家名も、立させられず候様に成行候ては、實に御残念至極に思召候間、人氣御取鎮之事に付、此度大總督御宮殿御陣中、上臈御使に立られ候間、何卒靜寛院宮様、御當家の御爲に深御心痛被爲有候思召、下々迄も貫徹致、恭順之意取失ざる様相心得候様、厚御諭の事御頼遊はし候事。

九日、天皇、太政官代ニ臨ミ、三職ヲ召シテ、高野保建、清水谷公考建議ノ蝦夷開拓ノ可否ヲ諮詢ス、群議其利ヲ陳ス、是日、又宴ヲ百官ニ賜ヒ、其勤勞ヲ賞ス。

○太政官日誌ニ云、三月九日辰刻、太政官代へ行幸被爲在、御坐ノ間へ、出御、玉坐近ク三職ヲ被爲召、親ク蝦夷地開拓之事件ヲ、御下問有之、一同大ヒニ開拓可然之旨ヲ言上ス、此儀相濟テ後酒肴ヲ賜フ。
勅旨曰、先帝深厚之、勅旨御繼述被爲遊度、至重之、宸慮被爲在、偏ニ寛洪ヲ以御國基ヲ被爲立度、思食候處、兵革草卒ニ起リ、不可言之勢ニ至リ、内外御多難之砌、三職百官之輩奮勉勵之力ニヨリ、即今粗方向相立チ候段、深ク御満足候、依之、乍聊酒肴ヲ下シ賜候間、各積日之勞苦ヲ可慰候、然リト雖モ巢窟未タ平カス、人心深憂懼ヲ抱候得者、尙此上忠誠ヲ盡シ志ヲ遠大ニ期シ、皇威ヲ振起シ萬民ヲ安堵セシメ、宿昔之、宸慮貫徹候様、御沙汰候事。

○春嶽私記ニ云、上下精勤之御褒詞、岩倉卿御讀渡シニテ酒饌賜之。

○高野保建、清水谷公考建議
蝦夷島周回二千里中、徳川家小吏之一鎮所而已、無事之時モ懸念御坐候處、今般賊徒、御征討被、仰出候ニ付テハ、東山道往來相絶シ、徳川莊内等之者共、彼地ニ安居仕事ハ難相成、島内民夷ニ制度無之、人心如何當惑仕候儀ニ有之ヘクヤ、不軌之

輩御坐候へハ、竊ニ賊徒之聲援ヲナシ可申モ難計、魯我元來蠶食之念盛ニ候へハ、此虛ニ乘シ島中ニ横行シ、兼テ垂涎イタシ候北地久春古丹等ニ割據シ、如何様之舉動可有之モ難計候へハ、一日モ早ク、以御人撰鎮撫使等御差下ニテ、御多務中モ閑暇被爲在候勢ヲ示シ、御外間ニモ相成候様仕度、且漁魚之利モ夥敷場所ニテ、御軍費之一助ニモ可相成候間、乍不肖臣等ニ於テモ抛身命勉勵仕度存候、皇政復古之折柄、右等之邊モ必定被 仰出候儀トハ奉存候得共、寒暖之違モ有之、内地ニテ二三月之延引ハ、彼地ニテ五六月又ハ一年之手後ト相成、今年内ニ策略難相立候間、何分早ク御採用相成候様仕度奉存候、此段去月以來議論仕居候儀ニ有之、海水流漸之時節ニ相至候へハ、魯人軍艦、毎年久春内へ罷出候間、當月中ニモ御差下ニ相成候様被遊度積リ、警衛人數ハ有志之者共兼テ相約候分、箱館諸所散在之者ヲ除テ、現在二百人計軍艦共有之、金穀之類ハ紀州、江州等ニ於テ、彼地ニ引合御坐候町人共、盡力仕度内願ニ及候者多ク御坐候テ、内々支度ハ粗調居候間、何卒公論ヲ以、即日御評決被 仰付、今般 行幸被爲在候已前ニ 勅許ニ相成候様仕度奉存候、猶巨細之儀有志之者共別紙差出候間、宜敷御参考之程奉懇願候、誠恐誠惶謹言。

二月廿七日

保 建

內國事務局叢書
外國事務局筆記

○別紙ハ散佚シテ見ル所ナシ。

○再申書

一 蝦夷開拓之儀、諸藩へ御布告被 仰付、有志之者何時モ自由ニ令移住候得ハ、積年彼地之爲ニ苦心仕居候者、多分可有之候間、一同奮赴イタシ盡力可仕、猶大坂、敦賀諸所ニ會所ヲ設ケ、應援爲致度存候、

一 全島所置有志之者、深見込モ有之、兼テ約置候者ニテモ、微忠相貫可申ト存候、尤一己之見ヲ主張イタシ候者ハ、奇手異能有之候テモ、妄ニ撰用仕間敷候得共、猶懸念被爲有候ハ、諸藩有志之輩御人撰ヲ以テ、可然御擧用被 仰付度存候、

一 鎮撫使御差下ニ相成候得ハ、松前家ニ於テモ船路案内仕度由、就テハ松前表著到之上、一先箱館へ布告仕方可然哉、徳川家

人數ハ一同蓄財之爲ニ罷越候族而已、直ニ箱館ニ著船候テモ更ニ懸念無之、社稷之爲ニハ徳川家ヲ願候筈ニ無之様申居候輩モ有之由、右等之者召出候得ハ、箱館一局ハ必定瓦解イタシ可申、増テ會津莊内之外ハ、何レモ異存無之候間、諸藩陣代等召出シ、復古之御趣意相諭候得ハ難有御請可仕、民間ニ議論イタシ候輩ニ至テハ勿論ニ存候、

一 魯西亞國並諸蕃之儀ハ、一切御趣意ニ相本ツキ、是迄之通交易等仕、税銀ヲ出シ規則ニ違背不仕候得ハ、自他之差別ナク令親交度存候、尤大事件ニ至テハ 伺之上宜令所置、北地經界之儀、萬一魯人議論於有之ハ、一千年來本朝ニ相屬候場所、徳川家ニテ雜居之約ニ取極候ハ、於 天朝存外之儀ニ候得共、是迄令委任候廉モ有之、猶 伺之上返答可致ト應接仕候へハ、奥地開拓之名義十分相貫可申ト存候、箱館在留英人ブリツキストン有志之者ニテ、終身彼地ニ居留仕度念願御座候由、右等之者召使候得ハ、自然航海等之諸術モ相開ケ、魯人ニ對候爲ニモ宜敷存候、

一 箱館表所置相付候上ハ、夷地巡見イタシ、自然石狩等之所ニ引移リ、徳川氏因循姑息之風習ヲ令一洗、奥地開拓之策ヲ運シ、大義天下ニ相貫候様仕度、石狩近邊ハ全島要害之地ニ御座候由、彼地ニ根據イタシ、是迄客ニ取扱候場所ヲ主ト變候得ハ、早ク開拓之功モ相立候道理ト存候、

一 北地全島雜居之約ニテ、今更議論仕候モ實ハ仕方無之、只管開拓肝要ニ候間、有志之輩ニ命シ、東北奥地へ遣シ經營爲仕度、尤東北ハ魯人滞在無之、形勢宜敷場所ニ御座候由、早ク所置爲仕度存候、富内、久春古丹等モ内外御趣意相辨候輩ニ命シ、漁夫等多人數練込令指麾度存候、

一 二八運上之法ニ隨ヒ請負人ヲ廢シ、其地出稼之者共、直様居住爲致候得ハ、俄ニ開拓之功モ相立可申由ニ候得共、夫ニテハ、松前、箱館諸所之町人共大ニ困却イタシ、紛々異論相生シ、却テ御煩ト可相成モ難計候間、土人建言之狀ヲ察シ、情理不相戻、人心悅服候様所置仕度存候、兵法調練勞物產學ヲ講究シ、人心怠屈不仕候様可令鼓舞ハ勿論ニ候得共、何分安靜ヲ本トシ、下々私財ヲ以テ經營イタシ候外ハ、篤ト加勘考、妄ニ舉動仕間敷存候、

右件々、見込之有増奉建言候、猶方略委細之儀著到之上 伺候様仕度存候、成功ヲ急ニシ邊蒙ヲ開候ハ、古之之明戒ニテ、

昔李唐玄宗之時、郝靈仙、突厥默啜之首ヲ獲テ、不世之功ト自負候所、宋璟、賢相トシテ其功ヲ抑ヘ、一年之後始テ郎將ヲ被授候得ハ、靈仙即チ慟哭シテ死タリト申モ、宋璟之意實ニ邊釁ヲ被慮候儀、於臣等モ深慮慮罷在候、猶衆議ヲ盡シ勉勵可仕候間、萬一御失體ニモ相成候様之義有之候得ハ、如何様之刑典モ預 御沙汰度存候、誠恐誠惶謹言。

三月十九日

保 建
公 考
内國事務局叢書

○十日達書

別紙^{保建、公考ノ}建議ヲ指ス、昨日被議候、蝦夷地開拓之儀、鎮撫使被差立候、遲速之儀、來十二日中、建言可有之候事。

内國事務局叢書
外國事務局叢書

○對議二十五條

今般從高野少將、清水谷侍從、蝦夷島開發及建言候旨趣、急務至當之議論感佩候處、御採用之御決議ニ相成候故、速ニ任撰鎮撫使可被差遣候、於嘉彰モ、右一條兼々懸念之次第有之、軍艦金策等ノ儀速ニ行届候様、過日來家來共ヘ申付、此策行届候得ハ、見込之趣可致建言覺悟之折柄、豈圖ヤ、兩人之建言速ニ 御採用 皇國之大幸候、併大島之儀不容易事件候故、彼島五部之中平分之境界ヲ定、其一分嘉彰ヘ被委任候様懇願候也。

三月十二日

嘉 彰
内國事務局叢書

○

蝦夷島之儀ハ、寒國ニハ御座候得共、土地柄之趣承居候事故、御開拓之儀、至極重疊之御儀ト奉存候事。

三月十二日

資 訓 白川
内國事務局叢書

○

蝦夷地開拓之儀、去九日言上仕候通、至當之御儀ト存候間、速鎮撫使被差向可然存候、乍去蝦夷接境之事ニ候得ハ、御人撰肝要ト存候、自餘見込無之候事。

三月十二日

經 之 中御
内國事務局叢書

○

蝦夷地開拓之儀、鎮撫使被差立候、遲速之事何等之見込モ無之候、可然御取計祈存候也。

三月十二日

忠 房 近衛
内國事務局叢書

副總裁 御中

○十二日淺野長勳對議

蝦夷地開拓之儀、所存 御下問之趣奉畏候、此度御一新之御場合 皇威海外萬國迄モ光耀仕候様、被爲在度程之儀ニ候得ハ、素ヨリ我カ 皇國中尺地モ 王化ヲ不蒙所御座候テハ、御都合之儀ニ付、開拓ハ當然之御事ト奉存候、尤御別紙ヲ以 御下問被爲在候鎮撫使御差立之遲速緩急ハ、地形情態熟知不仕候間、可否難申上、衆論之所歸ヲ以、聖斷被爲在、可然哉ト奉存候事。
内國事務局叢書
淺野長勳家記

○

今般蝦夷地開拓之建言、篤ト拜見熟考仕候處、何以奉申上候儀無御坐、建言之次第御採用被 仰付、可然御儀ト奉存候、此段御請奉申上候、以上。

三月十二日

蜂須賀阿波守
内國事務局叢書

○ 蝦夷地開拓之事、去九日言上候通、別段異見無之候、就テハ鎮撫使被差遣候遲速之儀、土地不案内之儀ニ候間、猶彼地之模様巨細承知候者ニ 御下問被爲有、御決定之上ハ、速ニ被差遣可然存上候事。

三月十一日

信 篤 長谷

内國事務局叢書

○ 蝦夷地開拓之儀、去九日言上仕候通、至當之御儀ト存候、就テハ得ト御人撰之上、鎮撫使被差向可然儀ト存候、遲速之儀ハ、何分不心得之土地、可及言上見込モ無之候、仍此段言上候也。

三月十一日

信 成 長谷

内國事務局叢書

○ 去九日、於 御前御沙汰被爲在候蝦夷地御開拓之事ニ付、兩朝臣建白ヲモ披見被 仰付奉畏候、臣不肖斷然明決之義ハ難申上候得共、建言之旨公平至當ニ存候、乍恐御採用被遊、御開拓被爲在度奉存候、元來魯人之蝦夷地ヲ侵掠セント欲スル事多年ニシテ、既ニ故人モ深愛スル處ニ候、況ンヤ我 邦ト連續之地ニ候得ハ、此ヲ彼ニ併吞セレ候テハ、後來大患之基ト相成候哉ニ存候、所謂先スル時ハ人ヲ制シ、後ル、時ハ人ニ制セラレ候格言モ有之候得ハ、一日モ早ク鎮撫使御差向可然儀ニ奉存候、將又町人有志之者共、内願ノ事件ハ如何可有之哉、元ヨリ下情ハ利欲ヲ主ト致シ候得ハ、若盡力モ己カ身ヲ富サシ爲ニ願候モ難計存候、乍恐專ラ 公論ヲ以テ、夷民之承服仕候様 御高諭被遊度奉存候、鎮撫使御差向遲速之儀ニ於テハ、建白之旨趣並不肖前段申上候義モ有之候ヘハ、精々駈速ニ被 仰出度存候、依テ蒙 御下問候ニ付、聊愚存申上候、宜御明裁奉專願候、誠惶誠恐謹言。

三月十二日

哲 長 堤

内國事務局叢書

○ 過日爲見被下候蝦夷地開拓之儀、何之所存モ無之、彼地熟練之者御人撰被爲在候テ、御採用可然ト奉存候事。

三月十二日

隆 聚 鷲尾
時 厚 平松
光 德 烏丸
通 旭 愛宕

内國事務局叢書

○ 蝦夷地開拓御遲速之儀御下問被 仰付奉謹承候、右御取扱御專任之儀、御精撰ヲ以、成丈早急御施行被爲在度様奉存候、以上。

三月十二日

十 時 攝 津
毛 受 鹿 之 助
神 山 左 多 衛

内國事務局叢書

○ 蝦夷島事情、有志之者共獻言之條熟覽仕候處、如何ニモ難被遊御棄置御模様ニ有之、早々御採用被爲在、鎮撫使御差下ニテ御新政御布告被遊度、且神社等モ御取建ニテ、夷民共 御國恩ヲ相辨候様爲致度奉存候、彼地之事一向不案内候得共、右御尋ニ付愚存奉申上候事。

復古記 卷四十四 明治元年三月九日

三月 十二日

七四四 雅言 植松
內國事務局叢書

○ 蝦夷地開拓之儀、先達言上仕候通、至當之御儀ト奉存候間、早々鎮撫使御差下シ專要ト奉存候、就テハ申上候迄モ無之候得共、彼地開拓之儀ハ、實以重大之事件ニ御坐候間、御人撰之儀偏奉希候、仍言上仕候也。

三月 十二日

安仲 五辻
內國事務局叢書

○ 蝦夷地開拓之儀ハ、過日直ニ言上仕候通、至當之御儀ト奉存候、就テハ鎮撫使被差立候遲速之處、存意可申上旨奉拜承候、開拓御決定之上ハ、速ニ被差向可然存候、乍去建言之上ニ有之候有志之者共、尤情態相辨候儀ニハ可有之候得共、猶又出格王化ニ服居候諸藩中、御人撰ニテ被差添、且其最寄土地案内之諸藩中ヨリモ出張被 仰付、實ニ 皇威之相輝候様有之度儀ト奉存候、仍言上仕候事。

三月 十二日

基正 石山
內國事務局叢書

○ 蝦夷地開拓之事件ニ付、保建、公考等朝臣言上一紙爲見被下、所存被尋下候旨謹奉候、愚昧之質何共難辨候得共、差當リ鎮所無之候テハ、元來夷族之儀、自ラ制度難立、且ハ賊徒散兵彼島ニ渡リ、如何様之舉動可有之モ難量ト存候、魯我蠶食之儀ハ有之間敷候哉、既各國御和親被爲在候上ハ、聊モ懸念無之儀ト存候、併彼地奥端有之、端方計此方ハ屬シ候様ニモ傳承候、其境界如何様ニ有之候事哉不辨候間、屹トモ難申上候、且又巨細之儀別紙ニ有之候由、旁是非難申上候、何分衆議以至當御

處置之儀奉祈候也。

三月 十二日

實麗 橋本
內國事務局叢書

○ 去九日、太政官代於 御前御下問之砌、 出御中 御空坐守固仕候ニ付、其 御座ニ不令侍陪候ニ付、更 御下問之趣恐入敬承仕候、從元 愚昧之重徳殊ニ蝦夷地不案内之事故、一言吐露可仕儀無之候、乍去、水戸故齊昭卿、彼地之儀苦心之事書取共一覽仕候儀モ有之、何様ニモ可被捨置地ニハ無之、殊ニ御時節柄故、一日モ早ク御世話有之度事ニ奉存候、就テハ此地之事ニ心配仕居候當時、岩倉家ニ附屬仕居候杉浦直三郎左衛門ト申者心配仕、先達テ徳川家へ存意申立候儀モ有之候旨、直ニ本人ヨリ承候事モ有之候、ケ様之者ニ御尋被遊御所置被爲有度事ト奉存候、自餘可令言上儀無之候、誠恐誠惶謹言。

三月 十三日

重徳 大原
內國事務局叢書

○ 十三日答議

蝦夷開地之事、御評議御尋問之趣夫々敬承仕候、抑境ヲ廣メ民ヲ息スル事ハ 聖主之御最業ニシテ、極メテ 皇天之被爲好候御事務ト奉存候得ハ、聊モ被爲捨置間敷御儀ト奉存候、本朝之人員モ近來餘程増益仕候半歟ニ候ヘハ、壯勇之徒被駈催候テ、速ニ御取掛リ被爲在候様有之度愚考仕候、併彼地之有様ニオイテハ、是迄何之取調モ不仕置儀ニ付、可申上委細之存付モ無御座候、此間一覽被仰付候建白之趣モ御座候ヘハ、其筋功者之者へ御委任專一之御事ト奉存候、且申上迄ハ無御座候得共、開地民育之御法ニ引添候テ、 皇國之教令懇々ト御施行被爲在、不經多年シテ、慥ニ 神州之内ト相成、敬上報本之風儀行ハレ候様之御次第、冀望仕候事ニ御座候、右ハ御尋問之御請迄言上仕候處如此御座候、頓首謹言。

三月

津和 野侍 從

○ 蝦夷地之儀ニ付所存尋被下奉畏候、不願恐多ヲ言上仕候、臣案スルニ、古ヨリ能ク地ヲ開キ候者ハ、必先兵食ヲ足シ、内患ヲ掃イ、後ニ能數千里之地ヲ開キ候、然ルニ賊之巢穴未拔、民心尙安スカラ不ルニ、深ク不毛ニ入り開カント欲ハ、寧不可ナラン、不如 陛下斷然 御親征之儀ヲ被決候上ハ、賊ノ巢穴拔ケ内民安ク、然後鎮撫使ヲ被差遣候テ、不運ト乍恐奉存候、併臣從本、蝦夷ノ地理及情實ヲ不知候間、何共難申上候、何卒彼ノ地ノ情實ヲ能ク知ル者ニ、御下問被爲遊候得ハ尤可然奉存候、味摩愚臣及發言候段、何共恐多奉存候得共、聊奉建言候、尙宜 聖斷伏奉願候、誠恐誠惶頓首頓首。

三月

俊 章 坊城

內國事務局叢書

○ 蝦夷地開拓之儀、去日蒙御下問、且一紙建白書爲見被下謹承仕候、右様御開拓ニ相成候ハ、一新之折柄、民夷追々 王化ニ服シ、最御國是之筋ト奉存候、乍併私共元ヨリ其風土情態承知不仕儀ニ候得ハ、得失之儀ハ何共難申上候、付テハ鎮撫使御差立之儀ハ、何分海路遠隔之事ニモ候得ハ、議論御研究之上、御熟算被爲在度奉祈望候事。

三月

松 室 豐 後
鳴 脚 加 賀
松 尾 但 馬
松 尾 伯 耆
中 川 對 馬
吉 田 遠 江

內國事務局叢書

輔

熙 鷹司

內國事務局叢書

○ 蝦夷地開拓之義、所存無之候へ共、鎮撫使被差立候遲速之義難申候、猶衆議之上可被決存候事。

○ 蝦夷地開拓之事、事情不案内候間、不辨可否候、以群議宜在 聖斷矣。

傅

房 萬里 小路

內國事務局叢書

○ 蝦夷地開拓之事、去九日言上仕候通、見込無御坐候、鎮撫使遲速之儀ハ御下問被爲在、御決定之上、速被差遣可然存上候。

爲

榮 五條

內國事務局叢書

○ 去九日、於 御前、三職へ被尋下候蝦夷地開拓之事、

右、所意可申上敬承仕候、元來彼土地逐一承知不仕、甚不案内候條、彼土地得ト心得候輩ニ被

實

聞 食、御評決可然奉存候事。

內國事務局叢書

保建朝臣、公考朝臣等建言候蝦夷地鎮撫使之事、蒙御下問深奉恐入存候、元來海外遠島之義、不知事實何共難申上候、併王政御復古御一新之折柄、彼地御開拓ニ付テハ、少モ早被置鎮撫使、軍防嚴固被仰出候ハ、魯我蠶食、久春、古丹等割據之憂相除可申歟、專被盡衆議、叡斷可被爲在奉存上候。

通 富 中院
内國事務局叢書

○ 蝦夷地開拓之事被尋下之趣謹承候、別段所存無之候、唯廣被遂衆議之上、聖斷之程奉懇祈候。

季 知 三條
内國事務局叢書

○ 案スルニ、本日ノ議ハ之ヲ三職ニ下セシノミナルヘシ、此外對議見ル所ナシ。

○ 毛利廣封ヲ以テ議定ト爲シ、議定鍋島齊正ノ軍防事務局輔ヲ罷メ、制度事務局輔ヲ兼シム。

長 門 少 將

議定職被 仰出候事。

職務進退錄
毛利元徳家記

三月

○ 先達議定職被 仰出候處、段々奉辭之次第、情實不得止儀、無據事ニ被 思召候間、職掌之儀ハ不被 仰付御都合ニ有之候處、猶又方今事情ニ付テハ、議定職之儀再應被 仰出候處、速奉 命有之候段、御満足被 思召候、彌以勉勵奉可有之様 御沙汰候事。

長 門 少 將

三月

毛利元徳家記

○ 元徳家記ニ云、二月十六日御用之儀ニ付、太政官代へ參上可仕御沙汰有之候得共、當日所勞ニ付、參上仕兼候旨御斷申上置、追テ右御用筋、内々正親町三條實愛へ相伺候處、議定職可被 仰付トノ御事ニ付、奉役之儀ニ付テハ、不得止内情モ有之、何卒被差除被下候様、三條實美、岩倉具視、正親町三條實愛之三卿へ、家來ヲ以種々及歎願候得ハ、遂ニ御間届相成、同廿二日、太政官代へ留守居御呼出ニ付、寺内暢三ト申者出頭爲仕候處、非藏人松尾但馬ヲ以、先日御用召ニ付テハ、正親町三條卿へ内願之趣、總裁職被間届、御取消ニ相成候段御授ケ有之候、其後三月九日、更ニ議定職拜命仕候次第ニ御座候。

肥 前 中 將

職務進退錄
鍋島直正事蹟

○ 案スルニ、家記ニ據レハ、前命ハ未タ發セスシテ中止セシモノナリ、第二ノ達書、被仰出ノ字、蓋シ措辭ヲ失ス。

○ 直正事蹟、十三日トス、今職務進退錄ニ從フ。

○ 薩摩藩ニ命シテ、鷲尾隆聚ノ邸ヲ守衛セシム、之ヲ辭ス、建部政世モ亦華頂宮ノ警衛ヲ罷メント請フ、之ヲ聽ス。

鳥津修理大夫内

内 田 仲 之 助

鳥津忠義家記

鷲尾爲警衛、人數拾人可差出旨、御達之趣承知候處、東海、東山兩道、大坂、兵庫並奥羽鎮撫使へモ、附屬出兵仕居候へハ、繰合兼申候付、無據御斷申上候様申付候付、此段申上候、以上。

三月 九 日

○守衛ヲ命セシハ、二月二十九日ニアリ、指令原記ヲ佚ス。

○正月三日以來異變ニ付、在所表ヨリ人數早速上京仕候處、猶又姫路表へモ、備前先鋒人數差出候ニ付、小家人少引足不申候間、在京人數ハ一先引取候様仕度旨、伺之通被 仰付候、然ル處右伺中 華頂宮様へ撰士十六人、醍醐大納言様へモ十人、爲御警衛差出候様被 仰付罷在候ニ付、御警衛之儀ハ如何可仕哉ト相伺候處、先其儘相勤候様 御沙汰ニ付、殘人數計引取申候、其後醍醐様之分ハ御免ニ相成候得共、華頂宮様御警衛十六人之外、增人數等モ用意仕居候處、病氣之者追々出來仕、此節御供ニ差支申候、且 御親征ニ付テハ、代人早々呼寄可申候處、日數モ相懸リ、其上姫路表へ、人數差出罷在候ニ付、彼是人數引足不申、御警衛手薄之段奉恐入候、依之、華頂宮様御警衛之儀ハ、一先蒙 御免度奉存候、此段奉願上候、以上。

三月九日

建部三二郎家來
松本元太郎
辨事局記
建部揆家記

○批紙
願之通、華頂宮御警衛被 免候事。

○辨事局記、十日トス

○是ヨリ先、戸田氏共ヲ召ス、是日、京ニ至ル。

○氏共家記ニ云、二月廿四日、太政官代ニテ、左之通口達有之、采女正々願之趣被聞召候間、人數百人程召連上京可致旨。但、日限之儀ハ別段御達無之候。

○去三日御届申上候通、五日在所表發途、唯今京著仕候、此段御届申上候、以上。

三月九日

戸田采女正
内國事務局叢書

○案スルニ、氏共上京ノ事ハ、之ヲ東山道總督ニ申請シ、總督之ヲ奏セシナリ、二月二十日ノ條參看スヘシ。
○松平頼升、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。松平喜徳家記

復古記 卷四十四 終

- | | | |
|-------|----|-----|
| 一等編修官 | 長松 | 幹 |
| 二等協修 | 四屋 | 恒之 |
| 三等出仕 | 中村 | 鼎五 |
| 六等掌記 | 石津 | 發三郎 |
| 八等掌記 | 澤渡 | 廣孝 |
| 一等繕寫 | 松浦 | 辰男 |
| 二等繕寫 | 小川 | 長和 |
| 二等繕寫 | 小島 | 春 |
| 二等繕寫 | 藤園 | 賢意 |

檢閱

一等編修官	重野安繹
一等編修官	川田剛
三等編修官	藤野正啓
監事	三浦安

復古記 卷四十五

明治元年戊辰三月十日ニ起リ十一日ニ至ル

○三月

十日、浪士ノ私ニ貴紳ニ託シテ、其附屬兵ト稱スルヲ禁ス。

是迄浮浪脱走之者、自然附屬之姿ニ相成居候處、以來宮堂上方附屬兵ト唱へ、相集候儀堅ク被禁候、若爲 朝家、忠誠ヲ遂ケ度輩ハ、太政官軍防局へ願出候へハ、何分之御證議可被 仰付旨 御沙汰候事。

三月十日

有栖川宮家記
官中日記

○是ヨリ先、奥平昌服ヲ召シテ、大阪ヲ守衛セシム、時ニ昌服疾ニ罹ル、而シテ其子昌邁美作大阪ニ在リ、是日、書ヲ上リ、自ラ父ニ代ラント請フ、之ヲ聽ス。

今般 御親征行幸被遊候ニ付、大阪警衛被 仰付候、附テハ彼地 行在中、其方儀上阪懸ケ引致候様 御沙汰候事。

二月

奥平昌邁家記

○本條、日ヲ佚ス、案スルニ、此達書、二月二十一日、有馬慶頼等ニ命セシモノト同文ナリ、恐クハ同日ナラン、又別ニ達書一通アリ、其意前ニ同シ、今之ヲ略ス。

○本日申請書

今般 御親征 行幸被爲 遊候、就テハ大坂邊御警衛、大膳大夫へ被 仰付候間、彼地御行在中、上坂驅引仕へク旨 御沙汰ニ候處、大膳大夫儀何分病氣相勝不申、出坂仕兼候趣此節申越候、然處、私儀上坂仕居候ニ付、何卒右代リ被 仰付被下

候様仕度、此段奉願候、以上。

三月九日

奧平美作守

○批紙

伺之通候事。

奧平昌邁家記

○秋月藩ニ命シテ、二條城ノ柵門ヲ守衛セシム。黒田長徳家記

○徳川慶喜、其臣梅澤亮ヲ遣シ、東山道總督岩倉具定ニ因リテ、哀請書ヲ上ル、具定之ヲ納レ、

後命ヲ俟シム、是日、慶喜之ヲ其臣僚ニ告ク。

中山道 御總督府へ爲御歎願、大目付梅澤孫太郎被差遣候處、別紙之通 御總督府ヨリ被 仰出候趣ニテ、先鋒隊長相渡候間、爲心得相達候、就テハ彌以御恭順之御趣意厚相守、決テ心得違無之様被 仰出候。

三月

右之趣、萬石以下之面々へ不洩様可相達候。

別紙

徳川慶喜並家來共歎願書三通 二月十三日及十九日 被致傳達及披露候處、右ハ早速朝廷へ御差出可有之、乍去、今度先鋒總督之勅命ヲ蒙リ御發向ニ付、今更私ニ進軍ヲ止候事ハ難被遊、何分大總督宮、及東海、北陸兩道之總督共、於江戸表御會議之上可被仰渡候、尤慶喜一身之進退ハ 朝命被爲伺候上ニ無之テハ、私ニ御取計難相成候、右之趣、慶喜家來共へ可申渡旨 御沙汰候間、御達申入候也。

東山道總督府

參

謀

薩州
長州

御人數中

春嶽私記

○春嶽私記ニ云、三月十日、江戸表ニ於テ、川勝備後守殿ヨリ、大小御目付へ御達、右ノ如シ、私記又左ノ告諭書ヲ載セタリ、今併録ス。

○ 甲州表人氣騷立候ニ付、爲鎮撫差遣候衆之内、脱走之者モ相加、對官軍爭端開候哉之趣相聞へ、右ハ兼々被 仰出候御趣意ニ相背候者共ニ付、召捕次第、夫々嚴重御處置可有之候間、心得違無之様可被致候、右之趣向々へ不洩様可被相觸候。

三月十日

春嶽私記

○附千人隊頭歎願書

普天ノ下莫非 王土、率土ノ濱莫非 王臣、關東ノ陪臣、誠惶誠謹奉歎願候、今度徳川家、奉對 天朝如何様ノ次第御座候儀哉、陪臣ノ私共不奉存候得共、御追討使御下向被爲在候趣、奉承知驚入奉恐入候次第、號哭啼泣ノ至ニ奉存候、縱令官軍御下向御座候テモ、不敬ノ儀毫末モ仕間敷、天朝へ恭順ノ道不取失様可致旨、且寡君恭順勤 王之素志相貫キ候様可致、猶又當節心得違無之、彌一同謹慎罷在候様可致旨、再三被申付罷在、於私共殊更恭順敬肅之外他念無御座候、一同勤 王謹慎之素志不相改、且東照宮勤 王治國以來、三百年天下之至治隆盛、數代苦心仕、政務執行候大義鴻勳ヲ被 思食、徳川家之儀、何卒 御寛大之御所置被成下候様、只管奉歎願候、尤私共東鄙ニ罷在、朝廷之御禮節不相辨、何方へ申上可然哉不奉存、只管奉懇願度一心ニテ、不願恐 御軍前ニ奉申上候、懇願之趣千萬御採用被成下候ハ、大幸不過之候、陪臣某等誠惶誠謹頓首稽顙謹言。

德川慶喜家

千人隊之頭

慶應四年三月

- 山本彌左衛門源忠孝
- 中村左京藤原安賢
- 窪田金之助源正繩
- 志村太郎源直鏡
- 河野忠次郎越智通聿
- 志村源一郎源直康
- 萩原頼母源友親
- 石坂鈴之助源義敬
- 石坂彌次右衛門源義禮
- 原半左衛門平胤龍
- 萩原土岐次郎源昌緯
- 山本錦太郎源忠久

御追討使殿下
御執事 中様

池田輝知家記

○輝知家記ニ云、三月十日、武州八王子驛へ著陣、當所居住、德川氏千人同心頭ノ者、路傍ニ出迎、右ノ歎願書差出スト、但シ指令ヲ佚ス、故ニ此ニ附録ス。

十一日、神武天皇祭、使^{愛宕}、ヲ畝傍陵ニ遣シテ、幣帛ヲ奉ス。

神武帝山陵使 宣命辭別

天皇我 詔旨止掛畏岐 畝傍山乃東北陵爾恐美恐美奏賜^{者久} 奏去元治元年利與始氏限以永代氏每年常例乃幣帛乎令發遣免
從二位行權中納言源朝臣通祐乎差使氏令捧持氏奉出賜布此狀乎平久安久 聞食氏 天皇朝廷乎 寶位無動久常磐堅磐爾
夜守日守爾護幸賜氏四海無事久國家無故久安穩泰平爾恤助賜^{倍恐美恐美奏賜^{者久}} 奏辭別氏奏久近頃天下乃形勢不穩志不
慮毛去正月爾干戈乎動^{須災起志加} 間毛無久彼凶徒等者罷退^{奴禮} 猶毛人心乃不安須國家乃不靜爾依氏數多乃鎮撫使乎四方爾
令差向氏速爾姦賊乎令絶^平 所念行須彼止云比是止云布内外乃禍乃屢到^{禮留} 誠爾危急存亡乃時^{奈利} 終食乃間毛 御心不安
須造次爾忘禮不賜須深久恐禮重久患比賜布此狀乎平久安久 聞食氏 天皇朝廷乎 寶位無動久常磐堅磐爾夜守日守爾護
助賜^比 自今以後者天下安穩爾四海靜謐爾無事久無故久護幸賜^{倍恐美恐美奏賜^{者久}} 奏

慶應四年三月八日

大内記新作留

○ 神饌、

- 神酒二升 納瓶子二口原註、土器二枚、土高杯二基添
- 白餅五拾 盛^二折櫃^二合^一
- 甘鹽鯛二尾 載^二檜掛盤^一
- 時菓 盛^二折櫃^二合^一
- 時菜 盛^二折櫃^二合^一
- 幣帛、

- 錦 壹丈 ○綾 壹丈 ○五色帛 各壹端 ○五色絲 各壹兩 ○布 壹端

御祭典次第、

當日早且諸陵寮官先參^向 向 御陵、點^二檢敷設^一 刻限就^二隄外^一 二同手水、
次寮頭參^進 進 陵前^一 寮官等相從參進、
次寮頭向^二 山陵^一 再拜兩段拍手兩段寮官等從^二其後^一 羅拜拍手一如^二寮頭作法^一、
次寮頭拜跪謹奏^二今日御祭奉仕之由^一 訖寮官一拜退下、原註、自^二下^一 下^二下^一 立
次寮官就^二辨備所^一 辨^二備御酒饌幣物等^一、
次樂官參進著座、
次寮官率^二守戶^一 就^二 陵前^一 令^レ敷^二高案^一 下敷葉薦、
次寮官昇^二高案^一 共進並^二列^一 陵前葉薦上^二退^一、

次寮頭進_二 陵前_一樂官奏_レ樂、

次寮官次第相進立、

次自_二下_一轉_レ傳役送打敷供御物等_二寮頭陪膳先敷_一打敷於高案上_二次供_二白餅_一次御酒蓋土器次瓶子次鯛次菜次菓陪膳訖寮

官退下樂止、

次寮頭拜跪拍手兩段申_二御饌祝詞_一訖拍手兩段一拜退、

次寮官令_二守戶敷_一 勅使座、

次 勅使參向寮頭出_二迎東門_一先導至_二隍内_一、

次寮官昇_二幣物高案_一共進立_二供饌之前_一、

次寮官一同著座、

次 勅使就_二 陵門外_一解_レ劍下_レ裾從官供_二手水_一、

次 勅使入_二 陵門_一徐步參進樂官發_二鼓笛之音_一、

次 勅使參_二進_一 陵前_二之間寮官一員捧_二玉串_一趨進獻_二 勅使_一、

次 勅使執_二玉串_一著_二 陵前座_一、

次 勅使作法、

次 勅使讀_二上_一 宣命_二訖目_一寮官、

次寮官一員進跪_二 勅使座_一下、

次 勅使賜_二 宣命于寮官_一寮官請取副_二于笏_一立進_二 陵前_一跪_二于折敷之前_一、

次寮官一員執_二脂燭_一進_二 宣命之傍_一渡_レ脂燭退、

次燒_二上_一 宣命訖徐步退就_二 勅使座_一下_二跪申_二燒畢之由_一復座、

次 勅使作法退出樂止先_レ是寮頭起_レ座付_二立陵門_一先_レ導 勅使_二至于隍外_一、

次 勅使更進有_二私拜_一此間寮頭付_二立隍外_一、

次 勅使退_二出隍外_一寮頭先導奉_レ送_二東門_一、

次寮官起_レ座令_二守戶撤_一 勅使座_二訖出_二于隍外_一待_二寮頭歸參_一一同手水、

次寮頭更進_二 陵前_一拜跪謹奏_二幣物供饌可_レ奉_レ撤之由_一、

次寮官二員進昇_二幣物案_一撤却、

次寮頭又進_二 陵前_一樂官又奏_二物音_一、

次寮頭撤_二却御酒饌_一寮官共進轉傳送下如_二初儀_一、

次寮頭再拜兩段拍手兩段寮官等共從_二寮頭作法_一訖樂止、

次樂官退下、

次寮官一同退下、

明治三年三月十一日

諸陵御祭典略抄

○案スルニ、祭典畧抄、畝傍陵祭ノ條、明治二年前ハ單ニ宣命ヲ載セ、三年ハ則神饌祭儀等ヲ詳叙ス、之ヲ式部寮ニ質セシニ、元治元年本陵再興後、年々ノ祭典異同ナシ、略抄載スル所詳略アルノミト、因テ三年載スル所ノモノヲ此ニ補填ス。

○在京ノ諸侯ニ令シテ、官位任叙ノ年月日ヲ錄上セシム。

官位 宣下之年月日急御用候間、以書附、明十二日辰刻迄ニ、必 太政官代へ可差出候事。

書附雛形

何年何月何日

叙某位、

復古記 卷四十五 明治元年三月十一日

七五九

任某官、

三月十一日

辨事役所

黑田茂承家記
德川家記

○各藩上申書

覺、

嘉永五壬子年十二月十九日 叙從四位下 任侍從

元治元甲子年四月十八日 任少將

黑田下野守官位 宣下之年月日、右之通御坐候、依御達、此段申上候、以上。

黑田美濃守内

三月十二日

井上六之丞

内國事務局叢書
黑田長知家記

○

文久三亥年二月十一日 叙從四位下 任侍從

元治元子年四月十八日 任少將

右、官位 宣下之年月日ニ御坐候、以上。

三月十二日

安藝新少將

内國事務局叢書

○

私

官位叙任之年月、左之通御座候、

文政十年亥十二月廿二日 叙從四位下 任信濃守

同 十一年子十二月十六日 任侍從

天保元年寅十一月廿三日 任肥前守

同 六年未十二月十六日 任左近衛權少將

安政六年未十二月十六日 任左近衛權中將

元治元年子四月宰相蒙御推任候處、再應御辭退奉申上候末、御許容相成候、以上。

三月十二日

肥前前中將

内國事務局叢書
鍋島直大家記

○

私

官位叙任之年月、左之通御坐候、

文久元年酉三月十三日 叙從四位下 任侍從兼信濃守

同年十二月七日 任肥前守

以上

三月十二日

肥前侍從

内國事務局叢書

○

一天保九年戊戌十二月十一日 叙正四位下 任左近衛權少將、

復古記 卷四十五 明治元年三月十一日

一 嘉永四年辛亥十二月十六日 任左近衛權中將

一元治元年甲子四月 推任參議敍正四位上

右之通御坐候、以上。

三月十二日

越前宰相

內國事務局叢書

○ 萬延元申年三月九日

任敍從四位上侍從

元治元子年四月十八日

任少將

三月十二日

蜂須賀阿波守

內國事務局叢書

○ 弘化四未年正月十二日

敍從四位下 任侍從

安政七申年正月十八日

任少將

元治元子年四月廿九日

任中將

右之通御坐候、以上。

三月十二日

有馬中務大輔

內國事務局叢書

○ 元治元甲子年五月五日

敍正四位下

安政四丁巳年十二月十六日 任中將
右之通御坐候、以上。

三月十二日

美作中將

內國事務局叢書

○ 安政二乙卯年十二月十六日

敍從五位下 任肥前守

元治元甲子年五月五日

敍從五位上

三月十二日

松浦肥前守

內國事務局叢書

○ 十二日上申

元治元甲子年五月五日

敍從四位下

同年八月九日

任左京大夫

右之通御座候、以上。

青山左京大夫

內國事務局叢書
青山忠誠家記

○ 慶應元乙丑年二月三日

敍從五位下 任遠江守

三月十二日

加藤遠江守

內國事務局叢書

○十二日上申

元治元甲子年四月六日

敘從五位下

任佐渡守

右之通被 仰附候、以上。

三月

藤堂 佐渡守

內國事務局叢書
藤堂高邦家記

○

安政二乙卯年十二月十二日

敘從五位下

任左兵衛佐

文久二壬戌年十月十八日

改遠江守

文久三癸亥年十月廿八日

敘從四位下

右之通御坐候、以上。

三月 十二日

有馬 遠江守

內國事務局叢書

○

慶應三卯年三月十五日

敘從五位下

任圖書頭

右之通御坐候、此段申上候、以上。

三月 十二日

松平 圖書頭

內國事務局叢書

○

弘化四丁未年十二月十六日

敘從五位下

任豐前守

右之通御坐候、以上。

三月 十二日

牧野 豐前守

內國事務局叢書

○

嘉永五子年十二月十六日

敘從五位下

任大炊頭

右之通蒙 御尋候ニ付奉申上候、以上。

三月 十二日

水野 大炊頭

內國事務局叢書

○

嘉永六丑年十二月十六日

敘從五位下

任但馬守

右之通御坐候、此段奉申上候、以上。

三月 十二日

松平 但馬守

內國事務局叢書

○

慶應四辰年二月廿六日

敘從五位下

任攝津守

右之通。

三月 十二日

池田 攝津守

內國事務局叢書

○十二日秋月種樹上申

復古記 卷四十五 明治元年三月十一日

文久二年十二月廿六日 敘從五位下 任右京亮

內國事務局叢書
秋月種股家記

○ 文久四甲子年十二月十五日 敘從五位下 任伊勢守

小出伊勢守

右之通御座候、以上。

內國事務局叢書
小出英尙家記

三月十二日

○ 弘化四未年十二月十六日 敘從五位下 任備中守

木下備中守

右之通御坐候、以上。

三月十二日

內國事務局叢書

○ 嘉永二酉年十二月十六日 被敘從五位下 被任信濃守

池田信濃守

三月十二日

內國事務局叢書

○ 慶應元乙丑年十二月二十五日 敘從五位下 任能登守

加藤能登守

三月十二日

內國事務局叢書

○ 慶應二丙寅年十二月十八日 敘從五位下 任淡路守

土井淡路守

右之通御坐候、以上。

三月十二日

內國事務局叢書

○ 弘化四年丁未十二月二十八日 敘從五位下

京極飛驒守

同年 同月 同日 任飛驒守

右之通御坐候、以上。

三月十二日

內國事務局叢書

○ 嘉永元戊申歲十二月十日 敘從五位下 任伊豆守

森對馬守

右御尋付申上候、以上。

三月十二日

內國事務局叢書

○ 森俊滋家譜ニ云、元治元甲子年七月、對馬守ト改ムト。

復古記 卷四十五 明治元年三月十一日

○ 文久四甲子年正月廿日 敍從五位下 任丹後守
右之通御坐候、此段御届申上候。
三月十二日

池田相模守
内國事務局叢書

○ 池田德定家譜云、文久四甲子年三月十五日轉任内匠頭、慶應元乙丑年七月廿八日轉任相模守。
文久元辛酉年十二月十六日 敍從五位下 任相模守
元治元甲子年五月十三日 推敍從五位上
三月十二日

北條相模守
内國事務局叢書

○ 萬延元庚申年十二月十六日 敍從五位下 任壹岐守
元治二乙丑年十二月 任下總守
右之通御坐候。
辰三月十二日

京極下總守
内國事務局叢書
京極壽吉家記

○ 文久三亥年正月廿一日 御推任敍 大和守 從五位下

戸田大和守
内國事務局叢書

三月十二日

私儀

○ 嘉永元申年十二月十六日 敍從四位下
嘉永五子年十二月十六日 任侍從
元治元子年四月十八日 轉任左近衛權少將
右之通蒙 宣下候ニ付、此段御届申上候、以上。
三月十九日

藤堂大學頭

内國事務局叢書
藤堂高潔家記

○ 文久元辛酉年十二月十六日 敍從五位下 任佐渡守
慶應四戊辰年三月廿二日

松平佐渡守
内國事務局叢書

○ 天保六乙未年 敍從四位下
弘化三丙午年 任侍從
文久四甲子年四月十日 任少將

復古記 卷四十五 明治元年三月十一日

同年 月十四日

敘從四位上

右之通御坐候、以上。

三月

宇和島少將

內國事務局叢書

○ 嘉永二己酉十二月十六日

敘從五位下

任佐渡守

元治元年甲子五月五日

被從五位上

右之通被 仰付候。

三月

京極佐渡守

內國事務局叢書

○ 天保十一年庚子十二月十六日

敘從五位下

任隱岐守

萬延元年庚甲十二月十六日

敘從四位下

元治元年甲子五月五日

任侍從

右之通三御坐候、以上。

三月

津和野侍從內

大谷庄三郎

內國事務局叢書

○

天保六年未十二月廿八日

敘從五位下

任飛驒守

右之通御坐候、以上。

三月

安藤飛驒守

內國事務局叢書

○

天保七年丙申十二月十六日

敘從五位下

任讚岐守

右之通御坐候、以上。

辰 三月

仙石讚岐守

內國事務局叢書

○

文久元年辛酉十二月十六日

被 敘從五位下

被 任大隅守

元治元年甲子五月五日

被 敘從五位上

右之通御坐候、以上。

辰 三月

九鬼大隅守

內國事務局叢書

○

弘化元年甲辰年十二月十六日

敘從五位下

任下總守

復古記 卷四十五 明治元年三月十一日

復古記 卷四十五 明治元年三月十一日
右之通被 仰出候。

三月

○ 文久元年酉十二月十六日 任播磨守
右之通御坐候、以上。

三月

○ 安政二年十二月十五日 任中納言
元治元年五月十三日 正三位 御推敍

○ 島津忠義上申
安政六年未二月七日 敍從四位下 任少將

安政六年十二月一日 任權中納言
元治元年五月十五日 御推敍正三位

○ 慶應三年六月十一日 敍從四位下 任侍從

○ 慶應四年三月二日 敍從五位下 任左京亮

○ 毛利廣封上申
安政元甲寅三月九日 敍從四位下 任侍從
文久元辛酉十二月十六日 任少將 任長門守

○ 安政四巳年四月廿六日 任少將
元治元子年四月十八日 敍從四位上

復古記 卷四十五 明治元年三月十一日

七七二
市橋下總守
內國事務局叢書

伊東播磨守
內國事務局叢書

金澤中納言
內國事務局叢書

紀伊中納言源茂承
內國事務局叢書

德川茂承家記

細川右京大夫

長岡左京亮

內國事務局叢書

內國事務局叢書

松平出羽守

七七三

○ 慶應二寅歲十二月廿八日 敍從五位下 任出雲守

織田出雲守 內國事務局叢書

○ 文久二壬戌十二月十六日 敍朝散大夫 任主計頭
右之通御坐候、以上。

松平主計頭 內國事務局叢書

○ 諸侯參罷錄ニ據ルニ、當時京ニ在ルモノ七十人、而シテ本條載スル所四十七藩、其餘二十三藩ハ原記ヲ佚ス、案スルニ、四月十三日ニ至リ、全諸侯再ヒ此命アリ、參看スヘシ。

○ 藤堂高邦、宇治ニ赴キ、自ラ關門ノ守衛ヲ檢セント請フ、之ヲ聽ス。

私儀

今般依 御召上京仕候處、宇治關門御警衛被 仰付候條、嚴重可仕旨蒙 御沙汰雖有仕合奉存候、是迄モ形勢柄ニ付、增人數等差出置候得共、此度改テ蒙 勅諭候ニ付テハ、此上猶更節制分配等之儀、嚴重ニ差圖仕度、依之、暫時彼地へ罷越申度、此段奉伺候、以上。



三月七日

藤堂佐渡守

○ 本日批紙 可爲伺之通候事。

辨事局家記 藤堂高邦家記

○ 覺、

一 關門朝六時相開、暮六時閉可申哉、

一 勅使之御方

總裁樣

副總裁樣

御輔弼樣

宮樣方

親王樣方

御門跡樣方

右、御方々樣御通行之節ハ、總土下座可仕哉、

一 議定衆樣

參與衆樣

右、御方々御通行之節、總下座可仕哉、

其餘、堂上方大名衆御通行之節ハ、下座ニ及申間敷哉、

一 天盃

復古記 卷四十五 明治元年三月十一日